近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT ～亀山西 JCT）建設事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ

２０１４（平成２６）年　８月

三重県埋蔵文化財センター

釜垣内遺跡（東から）

小牧南遺跡　古墳時代前期の竪穴住居群（北西から）

ＳＦ1506集石炉検出状況（北から）

ＳＦ1425（南から）

ＳＦ1506集石炉底面配石出土状況（北東から）

ＳＦ1425煙道天井部（南西から）

煙道付炉穴群（南から）

例　　言

1　本書は、平成25年度に実施した近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う緊急発掘調査の概要報告書である。

2　調査にかかる費用は、中日本高速道路株式会社が全額負担した。

3　調査は、下記の体制で実施した。

委託者　中日本高速道路株式会社

受託者　三重県

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター　調査研究３課（四日市駐在）

副所長　野原宏司

課長　森川常厚

主幹　服部芳人・松永公喜・浅野隆司

主査　鈴木規之・宮﨑久美・溝田　靖・水橋公恵・中村法道・勝山孝文・水谷　豊・東谷洋平・山田　猛

主事　矢田　陽・西脇智広

技師　髙松雅文・相場さやか・宮原佑治

4　調査面積・期間等は、下表による。

遺 跡 名（調査次）	調査面積	調査期間	担 当 者	作業受託
伊坂城跡（第５次）	4,100㎡	H25.11.28～H26.２.28	西脇・水谷	㈱イビソク
北山Ｃ遺跡（第３次）	915㎡	H25.４.24～H25.８.29	鈴木・水橋	㈱アート
北山Ｃ遺跡（一次）	1,000㎡	H25.６.19～H25.７.12		
北山Ｃ遺跡（第４次）	4,030㎡	H25.８.21～H26.１.14	水橋・鈴木	大成エンジニアリング㈱
野中遺跡（一次）	500㎡	H25.11.18～H25.11.22	野原	
北山Ａ遺跡（第５次）	4,920㎡	H25.５.10～H26.２.24	中村・東谷・山田	㈱アート
中野山遺跡（第10次）	2,480㎡			
中野山遺跡（第11次）	7,347㎡	H25.４.26～H26.１.17	勝山・宮﨑	㈱イビソク
中野山遺跡（第12次）	8,006㎡	H25.５.９～H26.１.６	相場・西脇	安西工業㈱
筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡（第６次）	5,319㎡	H25.８.21～H26.２.17	浅野・髙松	㈱イビソク
北山城跡（第３次）	6,438㎡	H25.５.９～H25.11.20	松永・水谷	㈱アート
小牧南遺跡（一次）	72㎡	H25.11.５～H25.11.６	矢田	（労務提供）
小牧南遺跡（第２次）	7,371㎡	H25.５.28～H26.２.６	宮原・矢田・服部	㈱島田組
中野平古遺跡（一次）	940㎡	H25.５.27～H25.７.25	服部	橋本技術㈱
椋ノ木遺跡（一次）	930㎡	H25.11.８～H25.１.６	松永	西武緑化㈲
大久保遺跡（一次）	800㎡	H25.12.25～H26.２.25	服部	西武緑化㈲
鈴山遺跡（一次）	980㎡	H25.７.30～H25.９.30	服部	西武緑化㈲
釜垣内遺跡（第4次）	3,200㎡	H25.５.27～H25.９.13	髙松・浅野	㈱イビソク

5　発掘調査及び本書の作成に際しては、下記の諸先生・諸氏にご指導とご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。

石井　寛　　大下　明　　久保　勝正　　高橋健太郎　　早野　浩二　　（敬称略）

6　本書で示す方位は、すべて世界測地系を用いた座標北で示している。

7　本書では、以下のように遺構の略記号を使用している。

ＳＨ：竪穴住居　　ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＫ：土坑　　ＳＤ：溝　　ＳＦ：煙道付炉穴・集石炉

ＳＸ：墓　　Ｐit・Ｐ：ピット・柱穴

本　文　目　次

1　前言 …… （服部） …… 1

2　伊坂城跡（第５次） …… （水谷） …… 6

3　北山Ｃ遺跡（第３次） …… （鈴木） …… 9

4　北山Ｃ遺跡（第４次） …… （水橋） …… 13

5　北山Ａ遺跡（第５次） …… （東谷） …… 17

6　中野山遺跡（第10次） …… （中村） …… 21

7　中野山遺跡（第11次） …… （宮﨑・勝山） …… 26

8　中野山遺跡（第12次） …… （西脇） …… 36

9　筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡（第６次） …… （髙松） …… 44

10　北山城跡（第３次） …… （松永） …… 48

11　小牧南遺跡（第２次） …… （矢田・宮原） …… 52

12　釜垣内遺跡（第４次） …… （浅野） …… 58

13　北山Ｃ遺跡（一次） …… （鈴木） …… 60

14　野中遺跡（一次） …… （野原） …… 61

15　小牧南遺跡（一次） …… （矢田） …… 62

16　中野平古遺跡（一次） …… （服部） …… 63

17　鈴山遺跡（一次） …… （服部） …… 64

18　椋ノ木遺跡（一次） …… （松永） …… 65

19　大久保遺跡（一次） …… （服部） …… 66

写　真　目　次

表紙（表）　小牧南遺跡ＳＸ250検出状況

表紙（裏）　小牧南遺跡ＳＸ250出土の垂飾

巻頭図版１　釜垣内遺跡、小牧南遺跡　古墳時代前期の竪穴住居群

巻頭図版２　中野山遺跡：ＳＦ1506集石炉検出状況、ＳＦ1506集石炉底面配石出土状況、ＳＦ1425、ＳＦ1425煙道天井部、煙道付炉穴群

１　前言

写真１　現地説明会 …… 5
写真２　遺跡見学 …… 5

２　伊坂城跡（第５次）

写真３　調査区遠景 …… 8
写真４　西区全景 …… 8
写真５　中区全景 …… 8
写真６　西区断ち割り土層断面 …… 8
写真７　調査区全景 …… 8
写真８　西区東部 …… 8
写真９　東区全景 …… 8
写真10　中区断ち割り土層断面 …… 8

３　北山Ｃ遺跡（第３次）

写真11　ＳＤ63 …… 9
写真12　ＳＤ67・ＳＤ68 …… 9
写真13　ＳＤ67遺物出土状況 …… 10
写真14　ＳＤ67遺物出土状況 …… 10
写真15　ＳＨ60 …… 12
写真16　ＳＨ66 …… 12
写真17　ＳＢ70 …… 12
写真18　ＳＢ71 …… 12
写真19　調査区全景 …… 12

４　北山Ｃ遺跡（第４次）

写真20　調査区全景 …… 13
写真21　土壙墓ＳＫ92 …… 14
写真22　ＳＫ92鉄製品出土状況 …… 14
写真23　古墳ＳＤ80・ＳＫ81 …… 15
写真24　ＳＫ81（現地説明会） …… 15
写真25　古墳ＳＤ75・ＳＤ76～78 …… 16
写真26　ＳＤ79南溝遺物出土状況 …… 16
写真27　ＳＤ82南溝遺物出土状況 …… 16
写真28　ＳＤ82西溝遺物出土状況 …… 16
写真29　古墳ＳＤ84 …… 16
写真30　古墳ＳＤ86 …… 16
写真31　ＳＤ86東溝遺物出土状況 …… 16
写真32　土壙墓ＳＫ74 …… 16

５　北山Ａ遺跡（第５次）

写真33　調査区全景 …… 17
写真34　ＳＢ323 …… 18
写真35　ＳＢ340 …… 19
写真36　ＳＨ332 …… 19
写真37　ＳＨ336 …… 19
写真38　ＳＫ229・ＳＫ309 …… 19
写真39　ＳＨ321 …… 19

６　中野山遺跡（第10次）

写真40　ＳＦ1421等煙道付炉穴群 …… 21
写真41　ＳＦ1402 …… 21
写真42　ＳＦ1412・ＳＦ1415 …… 22
写真43　ＳＦ1489礫出土状況 …… 22
写真44　ＳＦ1404 …… 22
写真45　ＳＨ1444 …… 23
写真46　ＳＨ1438 …… 25
写真47　ＳＨ1438カマド周辺遺物出土状況 …… 25
写真48　ＳＢ1426 …… 25
写真49　ＳＫ1442土器出土状況 …… 25

７　中野山遺跡（第11次）

写真50　調査区遠景 …… 26
写真51　ＳＦ1501・1592・1593・1594 …… 27
写真52　ＳＦ1594 …… 27
写真53　ＳＦ1594煙道内埋土 …… 27
写真54　ＳＦ1585半截状況 …… 31
写真55　ＳＸ1590出土状況 …… 31
写真56　ＳＸ1590出土土器３内に残るベンガラ …… 31
写真57　ＳＨ1515 …… 33
写真58　ＳＨ1714 …… 33

写真59　掘立柱建物集中地区 …… 33
写真60　ＳＫ1503 …… 33
写真61　須恵器杯蓋（ＳＨ1714出土） …… 34
写真62　砥石（ＳＨ1562貯蔵穴出土） …… 34
写真63　鉄滓（ＳＫ1543出土） …… 34
写真64　②区完掘全景 …… 35

８　中野山遺跡（第12次）
写真65　調査区全景 …… 36
写真66　ＳＫ1629半裁状況 …… 37
写真67　ＳＨ1679 …… 37
写真68　ＳＨ1679屋内炉 …… 37
写真69　弥生竪穴住居群 …… 38
写真70　ＳＨ1646（内側ＳＨ1677） …… 38
写真71　赤色顔料の施された壺 …… 38
写真72　ＳＨ1644 …… 38
写真73　ＳＨ1661 …… 39
写真74　ＳＨ1631 …… 40
写真75　ＳＨ1648・1649 …… 40
写真76　ＳＨ1650 …… 40
写真77　ＳＨ1650カマド …… 41
写真78　総柱建物ＳＢ1636 …… 41
写真79　ＳＢ1604 …… 41
写真80　ＳＢ1618 …… 41
写真81　ＳＢ1637 …… 42
写真82　ＳＢ1691（南）・ＳＢ1697（北） …… 42

９　筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡（第６次）
写真83　空からみた筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 …… 44
写真84　竪穴住居ＳＨ219 …… 45
写真85　掘立柱建物ＳＢ313 …… 45
写真86　尖頭器 …… 45
写真87　須恵質の土錘 …… 45
写真88　筆ヶ崎西遺跡 …… 47

10　北山城跡（第３次）
写真89　調査区全景 …… 48
写真90　ＳＨ323 …… 50
写真91　ＳＨ315 …… 50
写真92　居林１号墳・ＳＤ312 …… 50
写真93　ＳＤ304 …… 50
写真94　土塁 …… 51
写真95　土塁 …… 51
写真96　調査区西部 …… 51
写真97　調査区東部 …… 51

11　小牧南遺跡（第２次）
写真98　調査区全景 …… 52
写真99　ＳＨ248 …… 53
写真100　ＳＢ276 …… 53
写真101　ＳＨ191縄文土器出土状況 …… 55
写真102　ＳＨ146内埋甕炉 …… 55
写真103　打製石斧・磨製石斧 …… 56
写真104　古式土師器 …… 56

12　釜垣内遺跡（第４次）
写真105　注口土器（縄文時代後期後葉） …… 59
写真106　ＳＫ161 …… 59
写真107　ＳＫ163（右）・ＳＫ164（左） …… 59
写真108　東区全景 …… 59

13　北山Ｃ遺跡（一次）
写真109　Ｔ５ …… 60
写真110　Ｔ３ …… 60

14　野中遺跡（一次）
写真111　Ｔ１ …… 61
写真112　Ｔ２ …… 61

15　小牧南遺跡（一次）
写真113　Ｔ２ …… 62

16　中野平古遺跡（一次）
写真114　Ｔ２ …… 63
写真115　Ｔ８ …… 63

17　鈴山遺跡（一次）
写真116　Ｔ６東側 …… 64
写真117　Ｔ７土坑検出状況 …… 64

18　椋ノ木遺跡（一次）
写真118　Ｔ16竪穴住居 …… 65
写真119　Ｔ16 …… 65

19　大久保遺跡（一次）
写真120　Ｔ１全景 …… 66
写真121　Ｔ２全景 …… 66

挿　図　目　次

１　前言

図１　遺跡位置図 …… 3
図２　伊坂城跡調査区位置図 …… 4
図３　北山Ｃ遺跡調査区位置図 …… 4
図４　四日市北JCT付近調査区位置図 …… 4
図５　小牧南遺跡調査区位置図 …… 5
図６　釜垣内遺跡調査区位置図 …… 5

２　伊坂城跡（第５次）

図７　調査区位置図 …… 7
図８　遺構平面図 …… 7

３　北山Ｃ遺跡（第３次）

図９　遺構配置図 …… 10
図10　ＳＨ60実測図 …… 11
図11　ＳＨ66実測図 …… 11

４　北山Ｃ遺跡（第４次）

図12　遺構配置図 …… 14
図13　古墳ＳＤ80・ＳＫ81平面図 …… 15
図14　土壙墓ＳＫ92・ＳＫ74平面図 …… 15

５　北山Ａ遺跡（第５次）

図15　遺構平面図 …… 20

６　中野山遺跡（第10次）

図16　ＳＦ1402平面図・断面図 …… 21
図17　遺構平面図 …… 23
図18　出土土器実測図 …… 25

７　中野山遺跡（第11次）

図19　①区遺構平面図 …… 28
図20　②区遺構平面図 …… 29
図21　ＳＦ1506平面図・断面図 …… 29
図22　ＳＦ1594平面図・断面図 …… 30
図23　ＳＦ1594出土土器 …… 31
図24　ＳＸ1517平面図・断面図 …… 32
図25　ＳＸ1590平面図・断面図 …… 32
図26　ＳＸ1590・ＳＫ1711・ピット出土土器 …… 32

８　中野山遺跡（第12次）

図27　調査区平面図 …… 37
図28　ＳＢ1643平面図・断面図 …… 39
図29　赤彩顔料が認められる須恵器 …… 43

９　筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡（第６次）

図30　遺構平面図 …… 46

10　北山城跡（第３次）

図31　遺構平面図 …… 49

11　小牧南遺跡（第２次）

図32　遺構配置図 …… 54
図33　ＳＸ250・ＳＸ251出土状況 …… 55

12　釜垣内遺跡（第４次）

図34　西区遺構平面図 …… 58

13　北山Ｃ遺跡（一次）

図35　調査区配置図 …… 60

14　野中遺跡（一次）

図36　調査区配置図 …… 61

15　小牧南遺跡（一次）

図37　調査区配置図 …… 62

16　中野平古遺跡（一次）

図38　調査区配置図 …… 63

17　鈴山遺跡（一次）

図39　調査区配置図 …… 64

18　椋ノ木遺跡（一次）

図40　調査区配置図 …… 65

19　大久保遺跡（一次）

図41　調査区配置図 …… 66

表　目　次

１　前言
表１　近畿自動車道名古屋神戸線
埋蔵文化財発掘調査経過表 …… 2
表２　普及公開活動一覧 …… 2

５　北山Ａ遺跡（第５次）
表３　飛鳥・奈良時代の掘立柱建物一覧 …… 17
表４　飛鳥・奈良時代の竪穴住居一覧 …… 18

６　中野山遺跡（第10次）
表５　飛鳥・奈良時代の竪穴住居一覧 …… 24
表６　飛鳥・奈良時代の掘立柱建物一覧 …… 24

７　中野山遺跡（第11次）
表７　飛鳥・奈良時代の竪穴住居一覧 …… 34
表８　飛鳥・奈良時代の掘立柱建物一覧 …… 34

８　中野山遺跡（第12次）
表９　弥生時代の竪穴住居一覧 …… 38
表10　古代の竪穴住居一覧 …… 41
表11　古代の掘立柱建物一覧 …… 42

1　前　　言

1．はじめに

近畿自動車道名古屋神戸線（以下、新名神高速道路）の四日市JCT～亀山西JCTにかかる埋蔵文化財発掘調査を、平成20年度から実施している。

平成20年度から平成24年度に実施した発掘調査の概要は、発掘調査概報Ⅰ[①]、Ⅱ[②]および同Ⅲ[③]として、また、平成20年度に発掘調査を実施した伊坂窯跡と平成21年度に発掘調査を実施した伊坂遺跡第３次・第５次調査の結果については発掘調査報告[④]を刊行し、公表している。その中に当該遺跡の発掘調査成果はさることながら、新名神高速道路の概要や発掘調査に至る経緯、保護措置などについても記載しているため、参照されたい。

2．平成25年度の調査

（１）現地調査

発掘調査は、昨年度と同様に最盛期を迎え、当埋蔵文化財センター職員の約１／３を四日市整理所に駐在させ、当事業に対処した。当初の計画としては、伊坂城跡、北山Ｃ遺跡、北山Ａ遺跡、中野山遺跡、筆ヶ崎古墳群、北山城跡、小牧南遺跡、小社遺跡、釜垣内遺跡の９遺跡の二次調査（計51,590㎡）、北山Ｃ遺跡、中野平古遺跡、椋ノ木遺跡、大久保遺跡、鈴山遺跡の５遺跡の一次調査（計4,650㎡）、合計56,240㎡が予定された。

今年度も用地問題等の進捗を踏まえて、発掘調査計画を確認する定例会を、中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所、三重県県土整備部新名神推進課などで定期的に開催し、調査計画と用地問題、工事計画との調整を図った。

今年度は、概ね計画通りに発掘調査を実施したが、路線全体の中でも、特に平成27年度末に共用開始予定をしている四日市JCT～四日市北JCT間については、発掘調査の優先度が高くなった。そのため、鈴鹿・亀山工事区管内の小社遺跡の発掘調査は平成26年度に繰り越し、その代替えとして工事用道路として先行して建設しなければならない伊坂城跡の発掘調査を年度後半に実施した。その他、一次調査の野中遺跡については、用地買収が整ったため発掘調査を実施した。結果的には、二次調査は計54,126㎡、一次調査は計5,222㎡、合計すると計画より3,108㎡多い59,348㎡の発掘調査を行った。

なお、野中遺跡、中野平古遺跡、大久保遺跡の３遺跡については、今年度の一次調査をもって、事業地内での発掘調査を完了した。

（２）室内調査

現地調査に重点をおいたため、室内調査においては出土遺物の洗浄・注記等の一次整理及び遺物実測等の二次整理作業を行ったに止まる。その中で、昨年度調査を実施した発掘調査概報の作成を実施した。

3．その他

調査の概要については、報道機関などへ資料提供を行うとともに現地説明会を８月12日に釜垣内遺跡で、10月５日に北山Ａ遺跡、中野山遺跡、北山城跡で、10月27日に小牧南遺跡で、12月15日に北山Ｃ遺跡で、翌１月18日には筆ヶ崎古墳群で東海環状自動車道にかかる調査と合同で実施した。

また、11月17日には、土木の日での親子ふれあい見学会や、地元小学生の現場見学も行った。さらに、地元中学生の職場体験の受け入れや、地元団体、高等学校への出前講座も行った。

［註］

① 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』2010

② 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』2012

③ 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』2013

④ 三重県埋蔵文化財センター『伊坂窯跡・伊坂遺跡（第５次）発掘調査報告』2011・三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡（第３次）発掘調査報告』2012

No	遺跡名	所在地	事業地内遺跡面積(㎡)	一次調査後施工可面積(㎡)	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	遺跡別調査合計面積(㎡)	未調査面積(㎡)	備　考
					一次調査 二次調査	一次調査 二次調査	一次調査 二次調査	一次調査 二次調査	一次調査 二次調査	一次調査 二次調査			
1	伊坂遺跡・伊坂窯跡	四日市市伊坂町	3,950	0	42 800	3,150					42 3,950	0	調査終了
2	伊坂城跡	四日市市伊坂町	25,000	0		6,000	2,500			4,100	0 12,600	12,400	
3	北山C遺跡	四日市市西大鐘町 桑名市大字志知	22,000	4,000				600	4,350	1,000 4,945	1,600 9,295	8,705	事業地内遺跡面積拡大
4	野中遺跡	四日市市北山町	15,500	15,500					500	500	1,000 0	0	調査終了
5	黒土遺跡	四日市市北山町	11,000	11,000			580	380			960 0	0	調査終了
6	北山A遺跡	四日市市北山町	19,000	5,300			950 100	500 3,760	4,130	4,920	1,450 12,910	790	
7	中野山遺跡	四日市市北山町	43,000	0			1,530	880 6,400	10,712	17,833	2,410 34,945	8,055	
8	筆ヶ崎古墳群	四日市市小牧町	15,000	0				560 750	9,100	5,319	560 15,169	0	調査終了
9	北山城跡	四日市市北山町	20,000	2,500				630	6,426	6,438	630 12,864	4,636	
10	居林古墳群	四日市市北山町	—	—								—	北山城跡対象範囲に含まれる。
11	小牧南遺跡	四日市市小牧町	20,300	500				460	800 165	72 7,371	1,332 7,536	12,264	
12	中野平古遺跡	四日市市中野町	7,000	7,000						940	940 0	0	調査終了
13	野添御飯山古墳	菰野町川北	1,000	1,000					200		200 0	0	調査終了
14	椋ノ木遺跡	菰野町池底	16,500	12,450						930	930 0	4,050	
15	大久保遺跡	菰野町潤田	12,000	12,000						800	800 0	0	調査終了
16	鈴山遺跡	菰野町音羽	8,000	1,500						980	980 0	6,500	
17	大松遺跡	鈴鹿市大久保町	2,200	2,200					180		180 0	0	調査終了
18	高ノ瀬遺跡	鈴鹿市山本町	33,600	17,200					1,580		1,580 0	16,400	
19	折子遺跡	鈴鹿市山本町	13,500	13,500					800		800 0	0	調査終了
20	東荒野遺跡	鈴鹿市山本町	4,900	4,900					500		500 0	0	調査終了
21	小社遺跡	鈴鹿市小社町	12,000	7,500				1,020	400 1,573		1,420 1,573	2,927	
22	釜垣内遺跡	鈴鹿市小岐須町	30,000	12,000				2,300	200 8,500	3,200	2,500 11,700	6,300	
年度別調査合計面積(㎡)			335,450	130,050	42 800	0 9,150	3,060 2,600	7,330 10,910	5,160 44,956	5,222 54,126	20,814 122,542	83,027	

表１　近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）埋蔵文化財発掘調査経過表

内　容	所在地・会場	開　催　年　月　日	参加人数	備　　考
釜垣内遺跡（第４次） 地元説明会	鈴鹿市小岐須町	平成25（2013）年８月12日（月）	29名	
北山Ａ遺跡（第５次）・中野山遺跡（第１０・１１・１２次）・北山城跡（第３次）現地説明会	四日市市北山町	平成25（2013）年10月５日（土）	272名	
小牧南遺跡（第２次） 現地説明会	四日市市小牧町	平成25（2013）年10月27日（日）	335名	
土木の日 親子ふれあい見学会	中野山遺跡	平成25（2013）年11月17日（日）	33名	
四日市市立下野小学校 現場見学	北山Ａ遺跡	平成25（2013）年11月20日（水）	84名	
北山Ｃ遺跡（第４次） 現地説明会	桑名市志知	平成25（2013）年12月15日（日）	117名	
筆ヶ崎古墳群（第６次） 現地説明会	四日市市小牧町	平成26（2014）年１月18日（土）	194名	東海環状自動車道建設にかかる第７次調査と合同開催
北星高校 出前講座	県立北星高校	平成26（2014）年１月19日（日）	９名	
保々地区歴史を語る会 出前講座	保々地区市民センター	平成26（2014）年３月22日（土）	12名	

表２　普及公開活動一覧

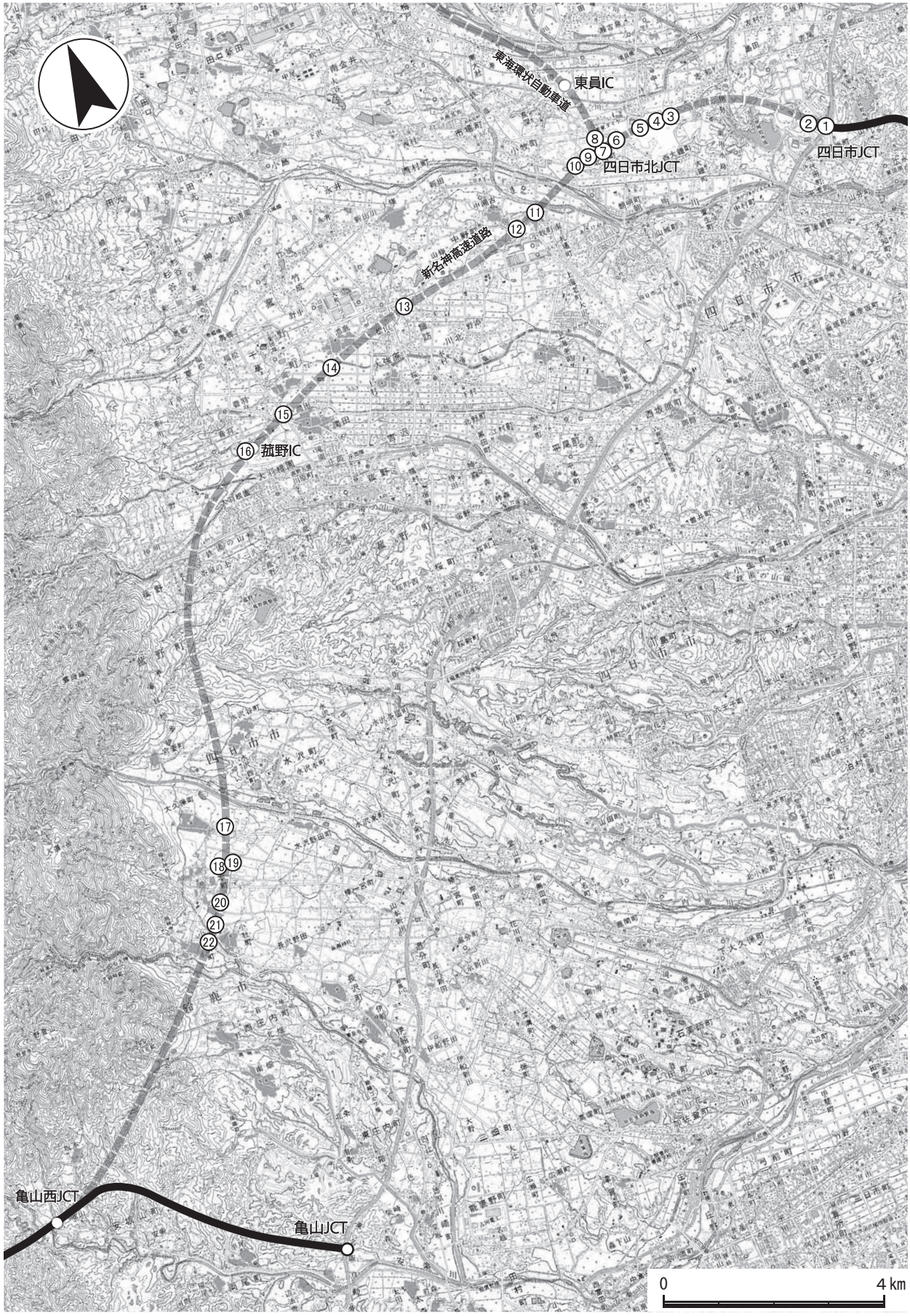


図１　遺跡位置図（1：100,000）

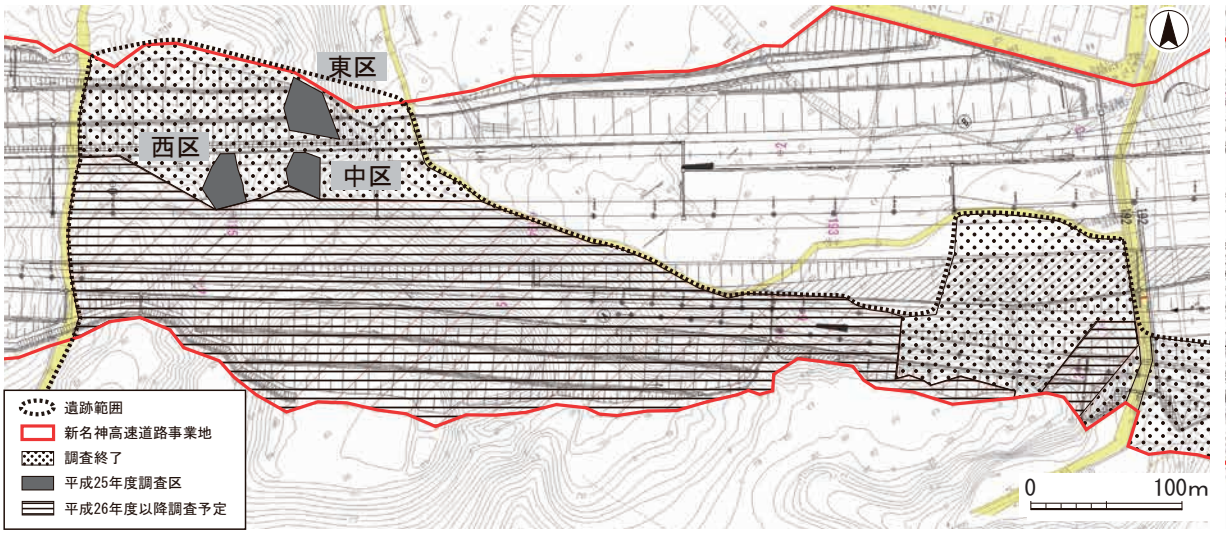


図２　伊坂城跡調査区位置図（１：5,000）

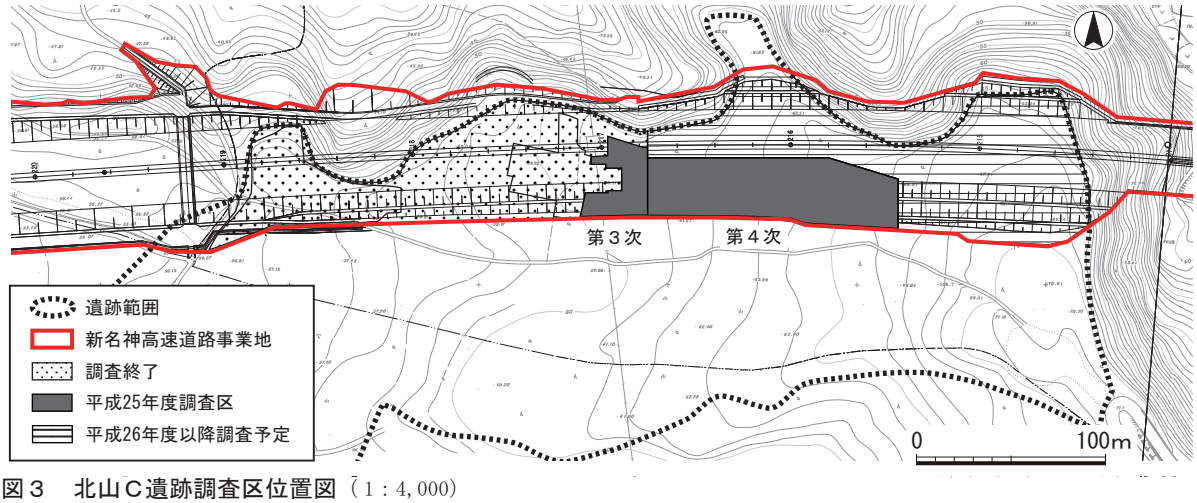


図３　北山Ｃ遺跡調査区位置図（１：4,000）

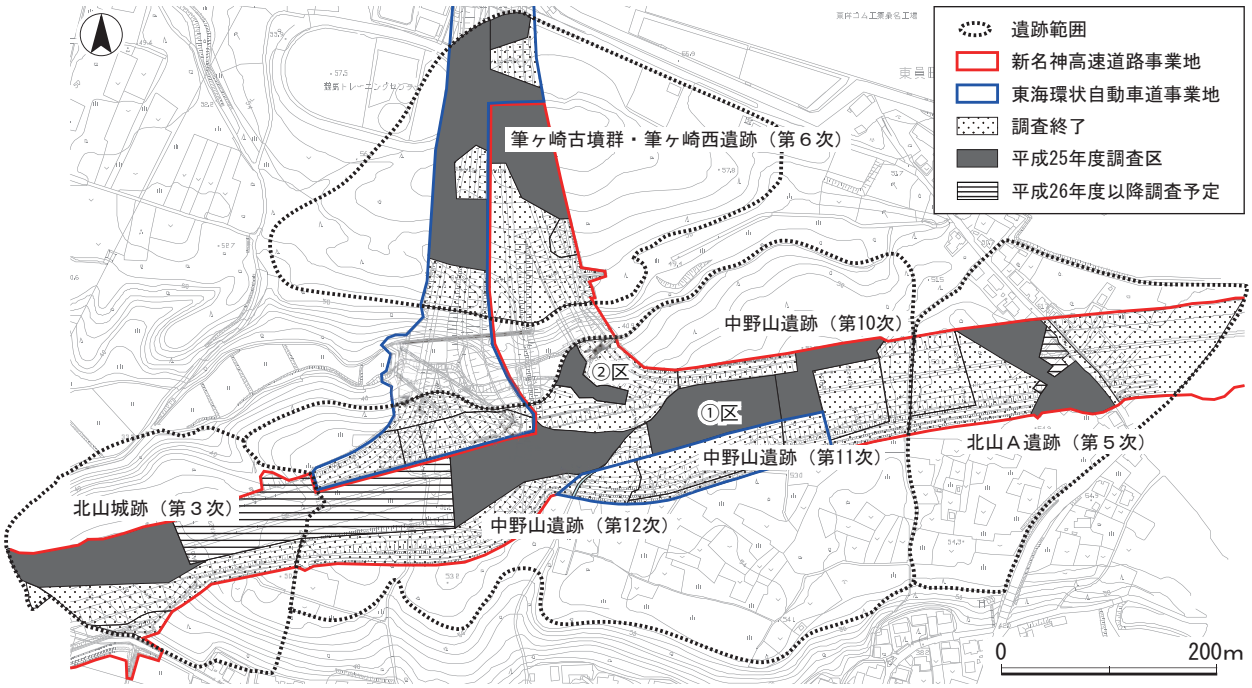


図４　四日市北JCT付近調査区位置図（１：7,000）

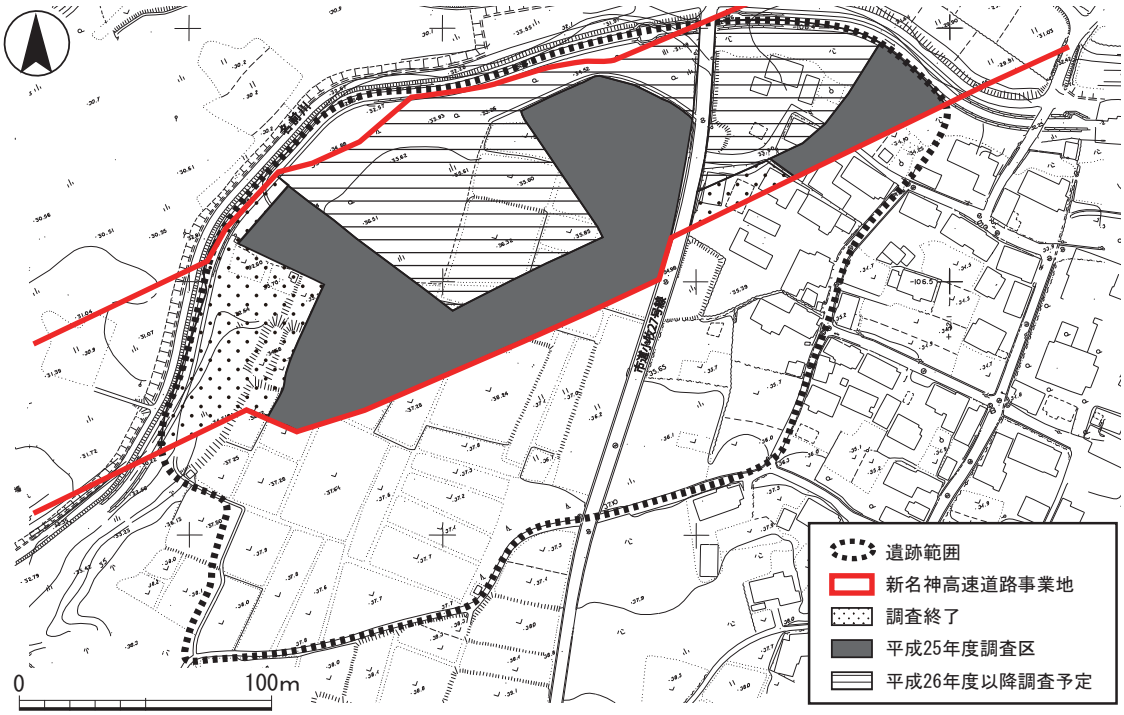


図５　小牧南遺跡調査区位置図（１：3,000）

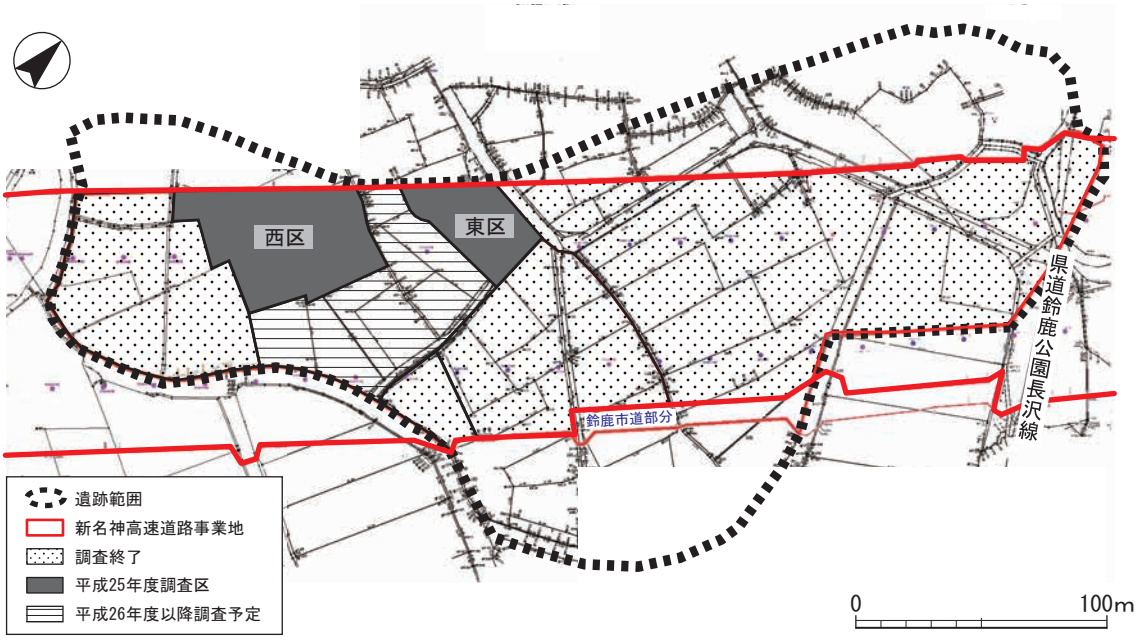


図６　釜垣内遺跡調査区位置図（１：3,000）

写真１　現地説明会（小牧南遺跡）

写真２　遺跡見学（下野小学校）

2　伊坂城跡（第５次）

１．はじめに

伊坂城跡は、朝明川北岸の丘陵上から東に派生する尾根上に位置する中世後期の城館跡である。第二名神高速道路建設工事に伴い、平成９年度に事業地内の測量調査、すでに供用されている四日市JCT以東において、平成11・12年度に第１・２次調査を実施している。また、四日市JCT以西で平成21・22年度に第３・４次調査を実施し、今回は第５次調査である。過去の発掘調査では、古墳時代の竪穴住居、戦国時代の道路状遺構、溝や段状の地形で区画された屋敷地と掘立柱建物などを確認している①。

今回の調査は、遺跡北東部を対象とし、小規模な平坦面を有する３か所について調査を行った。調査面積は西区246㎡、中区117㎡、東区261㎡である。平面調査終了後に各区平坦面の幅約2.0ｍを断ち割り調査し、下層および土層の確認を行った。

２．遺構

（１）西区

主郭から１段低い場所に位置する帯郭から北東部に延びる尾根とその東側に接する平坦面に設定した調査区である。調査の結果、平坦面では、建物としてはまとまらないものの多数のピットを確認した。時期は不明であるが簡易な掘立柱建物か柵列が存在したものと考えられる。また、調査前から溝状の落ち込みとして認識していた東南部の落ち込みは、尾根を分断せず竪堀状となっていることを確認した。

調査終了後、尾根を分断する東西方向の断ち割りを行った。その結果、尾根の最も高いところでは表土下1.3～1.8ｍ、東側平坦面では0.6～1.0ｍ、西側斜面では0.5～1.3ｍで旧表土と考えられる土壌化層を確認した。この層から土師器杯が出土している。盛土については、木や竹の根による攪乱が激しく明瞭ではないが、版築や固く締められた様子は見られなかった。城に伴うものなのか、後世のものなのかについては不明である。

（２）中区

今回調査した中では最も低い場所に位置する平坦面である。遺構は小穴を確認したが、柱穴となるかは不明である。土師器皿・羽釜・茶釜などが出土したが、崩落土からの出土であり、上部の帯郭から転落したものと考えられる。

調査終了後、南北方向に断ち割りを行った。表土下約1.0ｍで基盤層である灰色岩となり、その上部で旧表土の可能性のある土壌化した層を確認した。この層から陶器椀や擂鉢の小片などが出土した。

（３）東区

南向きの緩斜面に位置する平坦面で、南側は急崖となる。表土下0.3～0.4ｍで灰白色シルト層および基盤である灰色岩となり、この面で遺構検出を行ったが、段差のある地形は認められるものの遺構・遺物等は確認できなかった。

調査終了後、南北方向に断ち割りを行った。表土下0.4～0.7ｍで基盤層である灰色岩となる。旧表土や盛土の痕跡は確認できず、現地形の起伏は自然地形と考えられる。

３．まとめ

今回の調査では、西区で柱穴を確認したほかには明確な遺構を確認することはできなかった。西区を積極的に評価するならば、帯郭に接続する尾根状地形を盛土して通路として利用したものと想定される。東部の平坦地には簡易な掘立柱建物、柵列を設置することにより谷部からの進入を防ぐ役割を担った可能性が考えられる。中区・東区では明確な遺構は確認できず、城に伴う作事も確認できなかった。しかし、小規模ながら平坦部を伴っており、このような自然地形を城に取り込み、曲輪として利用していた可能性は否定できない。今後の隣接地の調査結果なども踏まえた上で、当調査地の性格付けを行う必要があろう。

［註］

① 三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡発掘調査報告』2003・同『伊坂城跡（第３次）発掘調査報告』2012

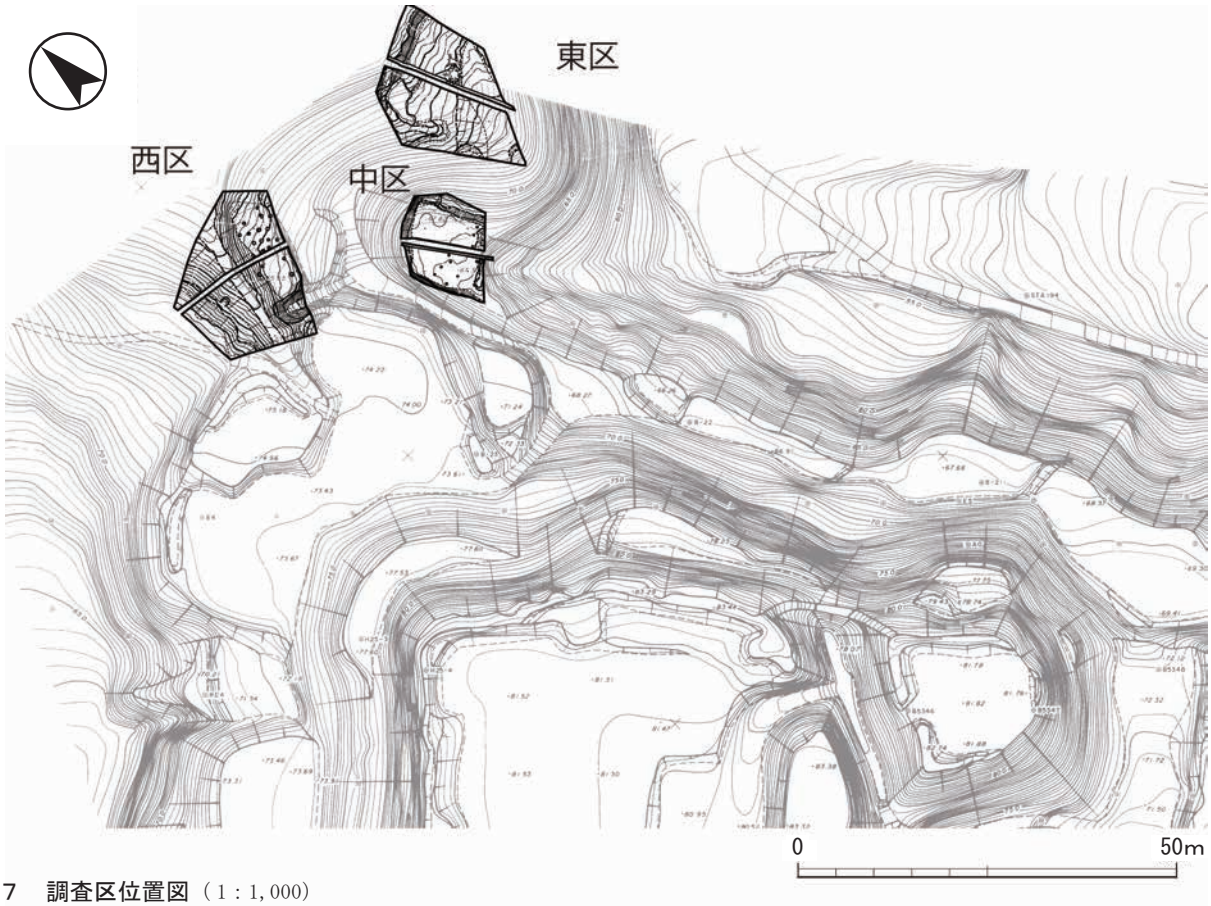


図７　調査区位置図（１：1,000）

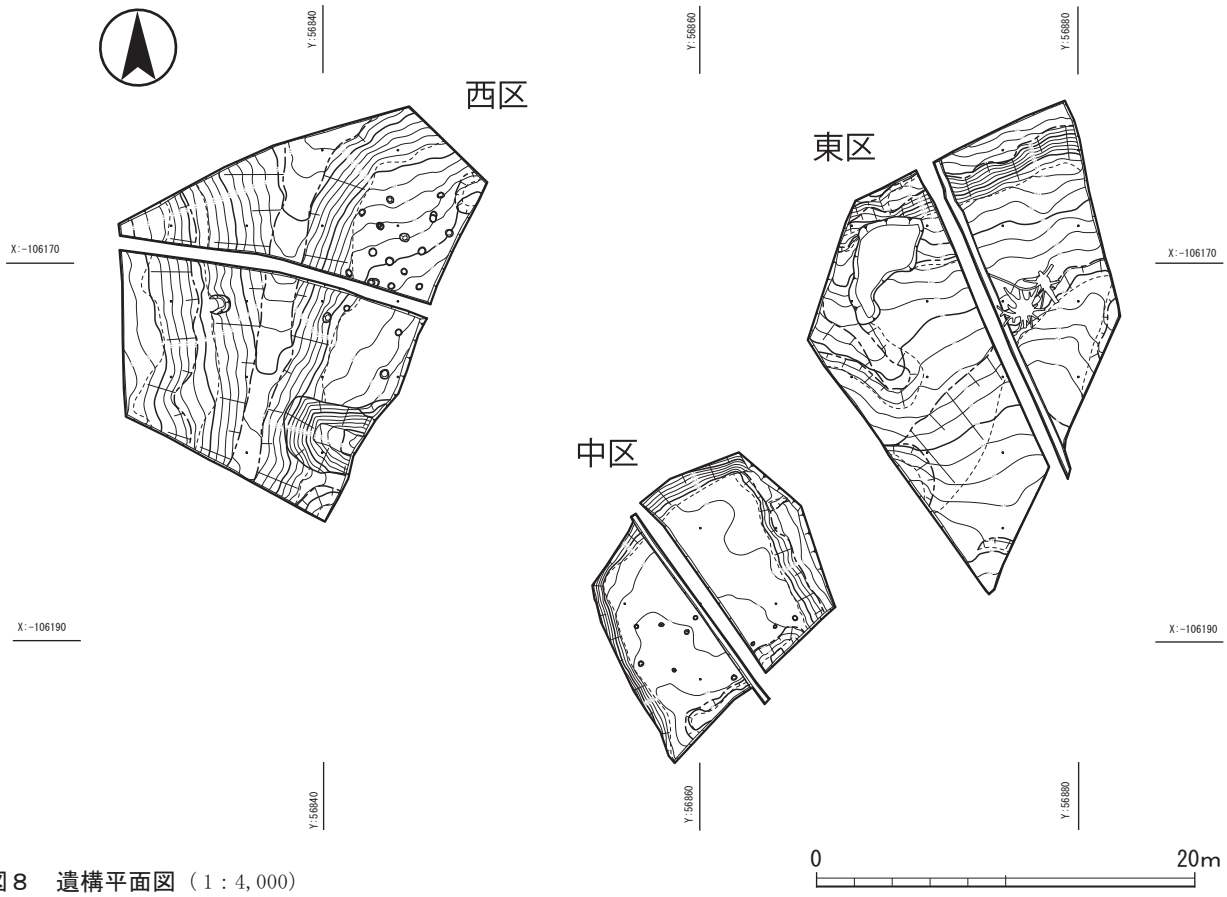


図８　遺構平面図（１：4,000）

写真３　調査区遠景（南から）

写真７　調査区全景（上空から）

写真４　西区全景（北から）

写真８　西区東部（北西から）

写真５　中区全景（北から）

写真９　東区全景（北から）

写真６　西区断ち割り土層断面（北から）

写真10　中区断ち割り土層断面（西から）

3　北山Ｃ遺跡（第３次）

１．はじめに

北山Ｃ遺跡は、桑名市南部を流れる員弁川南岸、桑名市から四日市市にまたがる広さ20,000㎡以上の広大な遺跡である。

当遺跡は過去の調査から弥生時代後期と古墳時代後期の集落跡とされてきたが、平成24年度の第２次調査で古墳10基を検出し、古墳時代中期の古墳群であることも判明した。さらに、周知の包蔵地東方にも遺跡が広がるものと判断したため、H24年度末に「周知の埋蔵文化財の範囲変更」を三重県教育長に通知している。

今回の調査区は第２次調査区の東端に隣接する台地上の915㎡が対象であり、前述した範囲変更区域の一部でもある。

２．調査の概要と結果

第２次調査区で検出していた竪穴住居及び掘立柱建物の遺構の続きを確認した。加えて、新たな竪穴住居１棟、掘立柱立物２棟、及び古墳２基も確認した。なお古墳は西山古墳群に属するため、「西山○号墳」という名称を付与することになるが、路線内の古墳群全体の調査結果が明らかになる平成26年度を待って合わせて行うことにした。したがって、本報告文中では調査中の溝名称をそのまま使用する。

（１）古墳時代

古墳　ＳＤ63、ＳＤ67・68の２基の古墳を検出した。ＳＤ67とＳＤ68は、互いの溝の位置や形状から、同じ古墳の周溝であると判断した。

ＳＤ67・68は円墳であり、周溝を含めた規模は、径が約16mである。ＳＤ63は方墳であり、周溝の西辺及び南西端の屈曲する部分を検出した。残りの部分は第４次調査区に延びている。

どちらの古墳も盛土部分はすべて削平されており、周溝のみを残す。周溝からは、須恵器の杯や土師器の甕が出土した。出土遺物の年代観から、古墳の造営時期は５世紀後半であったと思われる。

ただし、ＳＤ67・68の周溝からは飛鳥・奈良時代まで時代が降りる土器も出土している。これらの土器は、（２）で後述する遺構からの混入があったものと考えられる。(写真13)

写真11　ＳＤ63（西から）

写真12　ＳＤ67・ＳＤ68（北から）

（２）飛鳥・奈良時代

竪穴住居　ＳＨ60は、第２次調査で検出した続きの遺構である。１辺が約４ｍの方形で東壁にカマドを持つ。遺構内から須恵器の杯や土師器の皿が出土した。ＳＨ66は、長辺約５ｍ×短辺約４ｍの方形で北壁にカマドを持つ。遺構内から土師器の甕が出土した。いずれも床に硬化面を確認でき、貼床の痕跡を持つ。また、この２つの遺構は方向を揃える。

掘立柱建物　第２次調査で検出した側柱建物ＳＢ62の北西角の柱穴１つを確認した。またＳＢ70は、調査区の南端で４つの柱穴を確認した。遺構は２間×１間の並びを呈し、より南方へ延びることが考えられる。ＳＢ71も、調査区の南端で６つ柱穴を確認し

た。遺構は、３間×２間の側柱状の配列を呈する。いずれも柱穴からの出土遺物はないが、２棟の竪穴住居ＳＨ60とＳＨ66、及び第２次調査で検出したＳＢ62と方向を揃えることから同時期の遺構と考えられる。

その他の遺構　ＳＫ61からは、須恵器の杯と土師器の甕が出土した。遺物の時期が７世紀まで降りることから、竪穴住居や掘立柱建物と同時期の遺構である可能性がある。

３．まとめ

Ｈ24年度末に行った本遺跡の「周知の埋蔵文化財の範囲変更」は、集落遺跡の広がりを勘案してのものであった。しかし、今回の調査で集落跡は見つかったものの、広がる様相は呈していない。むしろ新たな２基の古墳の発見によって、第２次調査区で終息したかと思われた古墳群が広がっていることが判明した。

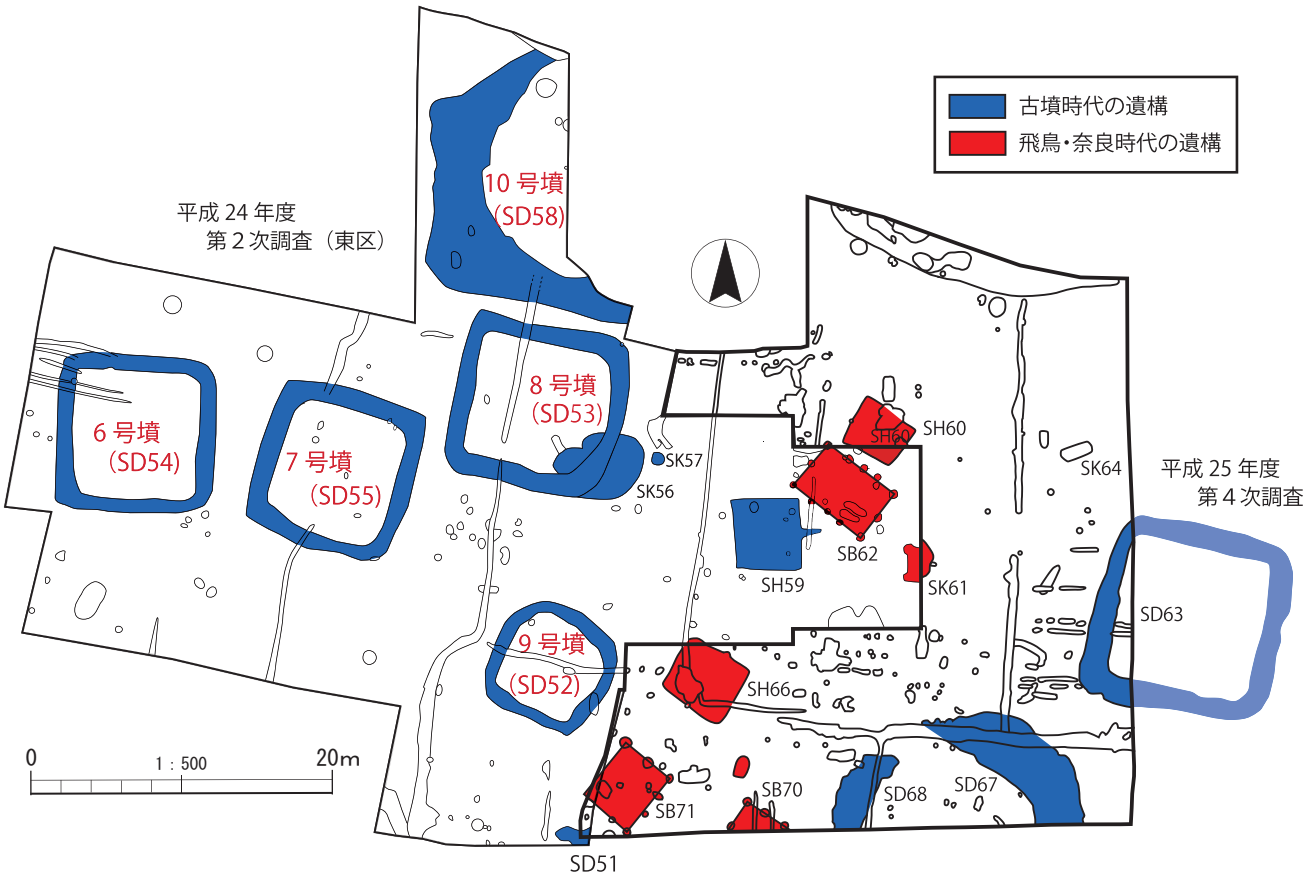


図９　遺構配置図（1：500）

写真13　ＳＤ67遺物出土状況（北東から）

写真14　ＳＤ67遺物出土状況（南から）

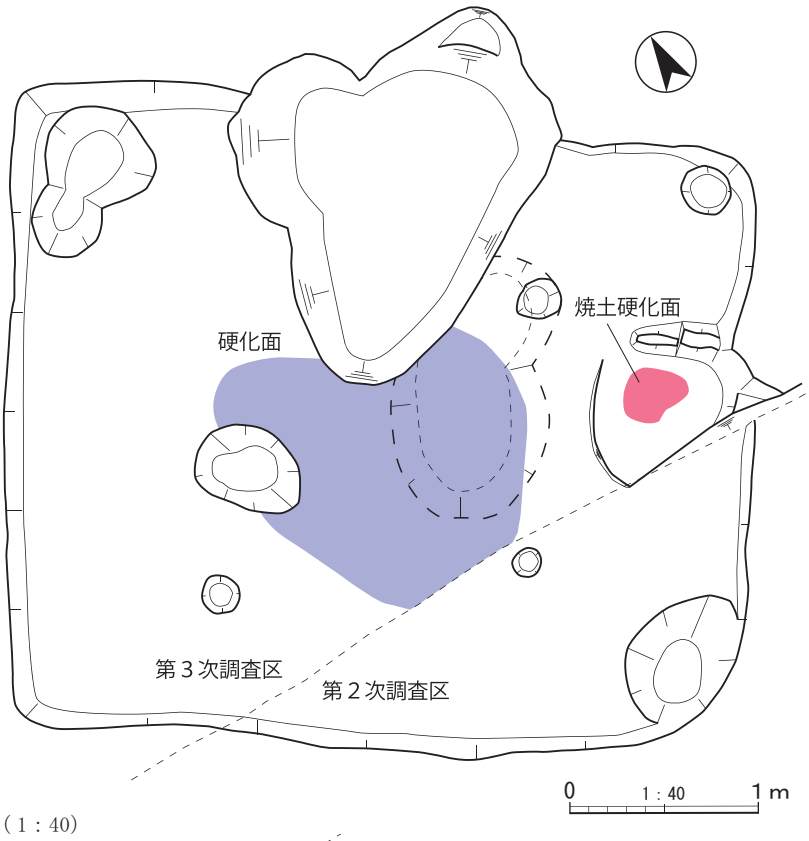


図10　ＳＨ60実測図（1：40）

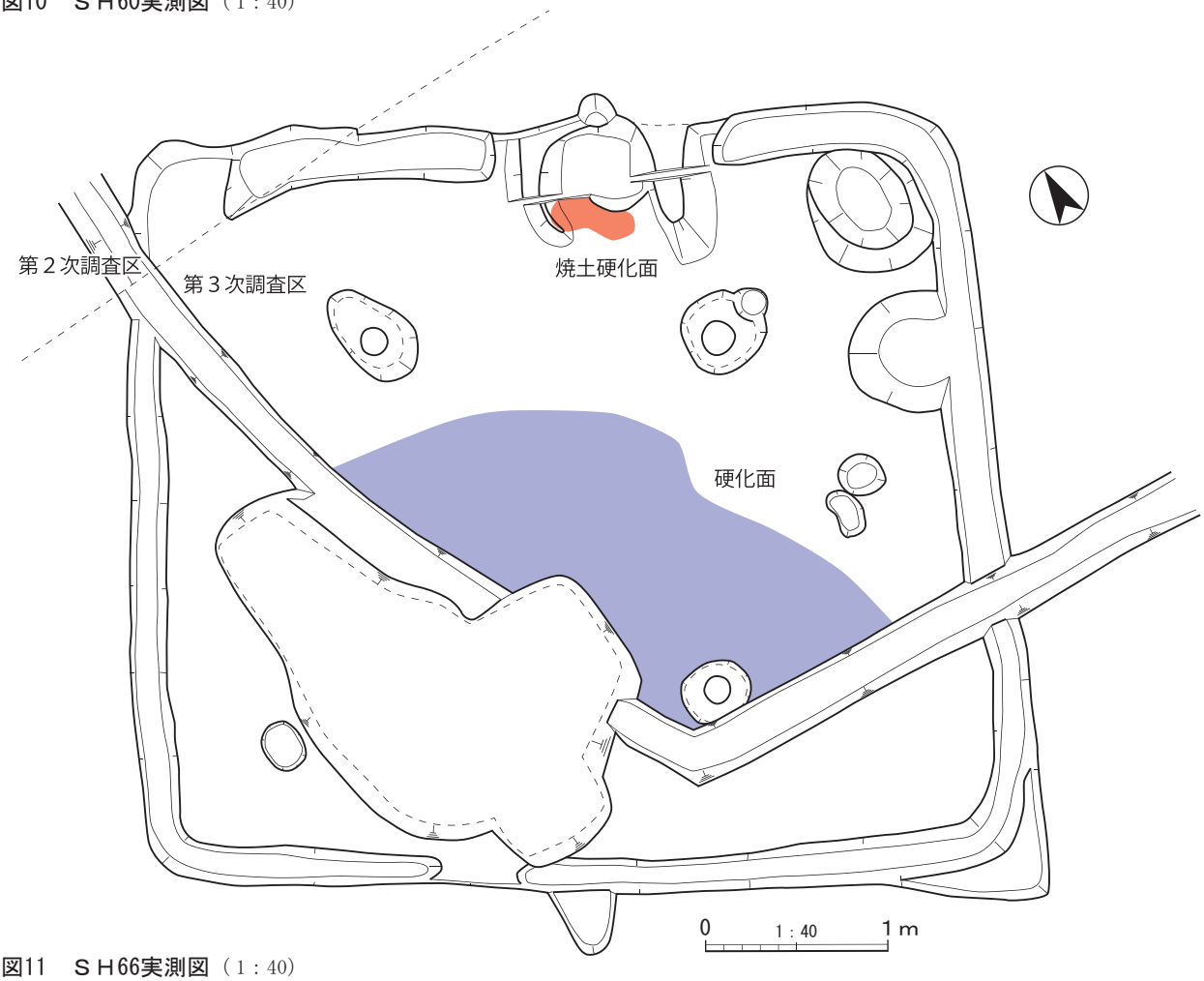


図11　ＳＨ66実測図（1：40）

写真15　ＳＨ60（南から）

写真17　ＳＢ70（北東から）

写真16　ＳＨ66（南東から）

写真18　ＳＢ71（北東から）

写真19　調査区全景（南西から）

4　北山Ｃ遺跡（第４次）

１．はじめに

調査地は、第３次調査区の東側に位置する。調査区は、東西132m×南北30m程度で、面積は4,090㎡。標高は60～66mで、東から西へ向かって下がる緩やかな斜面となっている。

２．遺構と遺物

古墳（方墳）13基、古墳時代の土壙墓１基、飛鳥時代の土壙墓１基を確認した。なお、古墳は西山古墳群に属するため、「西山○号墳」という名称を付与することになるが、路線内の古墳群の全体像が明らかになる平成26年度の調査結果を待って、合わせて行うこととした。したがって、本報告文中では調査中の溝名称をそのまま使用する。

（１）古墳

古墳を13基検出した。盛土部分が削平され、大半は周溝を残すのみであったが、ＳＤ80の中央では主体部を確認した。古墳の形状はすべて方墳で、規模は周溝を含めて一辺10～16mのものが多い。周溝は、最も大きなＳＤ75で幅3.0m程度、深さ0.5mの断面逆台形を呈する。

周溝から出土した須恵器・土師器の年代観から、古墳の造営は５世紀後半であったと考えられる。

以下、主な古墳について記述する。

ＳＤ80・ＳＫ81　中央に主体部が確認された唯一の古墳である。規模は周溝を含めて一辺10.4～10.8m。周溝は幅1.2m、深さ0.3mである。

主体部ＳＫ81は木棺直葬で、長さ3.1m～×幅1.0mの平面隅丸方形を呈し、掘方中央の2.4m×0.5mの細長い範囲が丸く窪む。

遺物としては、南溝の東隅付近から須恵器把手付椀、北溝から須恵器甕の小片、主体部の木棺痕跡の際から鉄製刀子１個が出土した。

ＳＤ82　遺物が最も多く出土した古墳である。規模は周溝を含めて一辺11.8～13.5m、周溝は幅1.2～1.6m、深さ0.4mである。

遺物としては、東溝から須恵器𤭯、南溝から須恵器の無蓋高杯と甕、西溝から須恵器甕などが出土した。

ＳＤ86　全体が検出されたもののなかで、平面形が最も大きな古墳である。規模は周溝を含めて一辺

写真20　調査区全景（西上空より）

15.8～16.0m、周溝は幅２m程度、深さ0.45mである。

遺物としては、北溝中央付近の底面から土師器高杯、東溝の中央付近から土師器高杯と須恵器甕などが出土した。

（２）土壙墓

ＳＫ92　調査区北西隅で木棺直葬の土壙墓を１基検出した。長さは3.2m、幅は北西側で0.72m、南東側で0.88mである。中央に木棺の痕跡とみられる細長い窪み（長さ1.3m～×幅0.5m）が検出された。基本的には古墳の主体部ＳＫ81と同じような形状である。

内部から斧・短刀などの鉄製品が出土した。

墓壙掘方の幅と、鉄製品の配置状況から頭位は南東方向と考えられる。

ＳＫ74　長さ1.3m×幅0.45mの土坑。北辺に近い床面付近から飛鳥時代の須恵器杯蓋１点が伏せた状態で出土した。墓の可能性が想定される。

写真21　土壙墓ＳＫ92（東から）

写真22　ＳＫ92鉄製品出土状況（北西から）

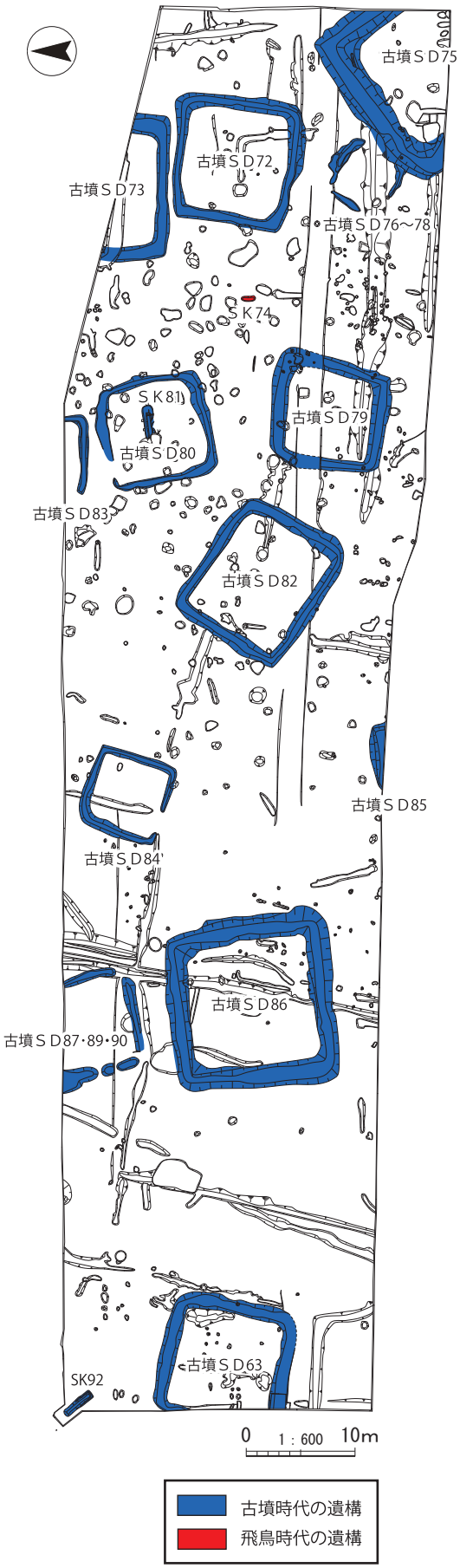


図12　遺構配置図（１：600）

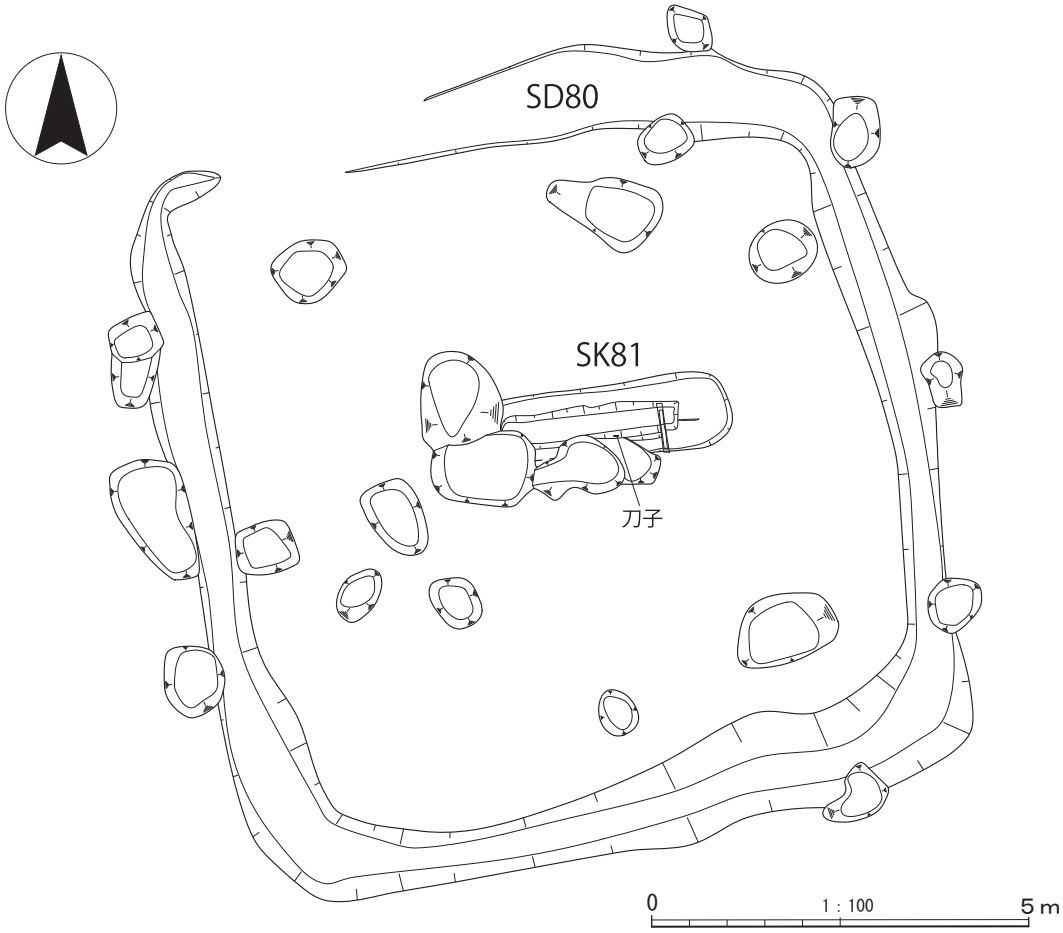


図13　古墳ＳＤ80・ＳＫ81平面図（1：100）

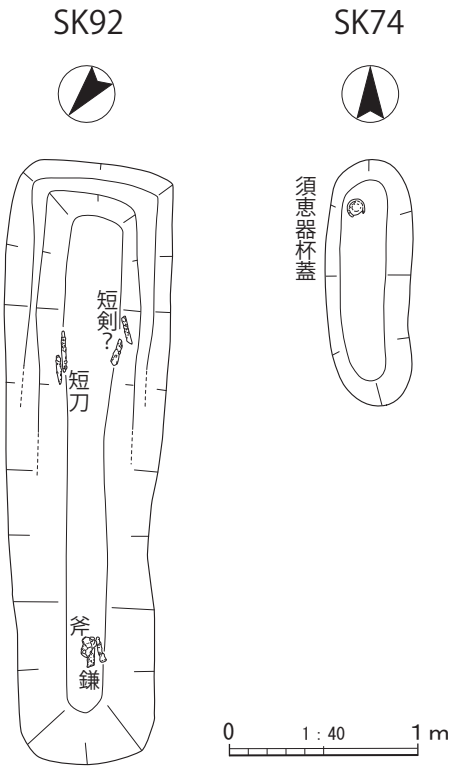


図14　土壙墓ＳＫ92・ＳＫ74平面図（1：40）

写真23　古墳ＳＤ80・ＳＫ81（北西から）

写真24　ＳＫ81（北西から：現地説明会）

写真25　古墳ＳＤ75・ＳＤ76～78（北西から）

写真26　ＳＤ79南溝遺物出土状況（西から）

写真27　ＳＤ82南溝遺物出土状況（西から）

写真28　ＳＤ82西溝遺物出土状況（南から）

写真29　古墳ＳＤ84（西から）

写真30　古墳ＳＤ86（北東から）

写真31　ＳＤ86東溝遺物出土状況（東から）

写真32　土壙墓ＳＫ74（北東から）

5　北山Ａ遺跡（第５次）

１．はじめに

北山Ａ遺跡は四日市市北山町に所在し、中野山遺跡の東側に隣接している。遺構の内容や地形の連続性などから両遺跡は連続する古代の集落跡として捉えられる（図４）。

平成23年度の第２次調査と平成24年度の第３次調査に引き続き、今回の第５次調査では4,920㎡を対象として飛鳥・奈良時代の遺構を検出した。

２．遺構

（１）飛鳥・奈良時代の遺構

掘立柱建物（表３）　飛鳥・奈良時代の掘立柱建物８棟を確認した。そのうち６棟が桁行３間・梁行２間の側柱建物である。柱掘方は全般的に径35～50㎝の円形のものが多い。隣接するＳＢ343とＳＢ344は建物の方位を揃えるが、その他では方位や配置に規格性は見られない。

遺構名	種別	規模（m）	間数	方位
SB244	側柱	5.1×3.7	3×2	N16°E
SB310	側柱?	4.6×3.8	3×2	N3°E
SB323	側柱	5.1×3.4	3×2	N26°W
SB340	側柱	5.2×4.0	3×2	N27°W
SB343	側柱	5.2×4.0	3×2	N54°W
SB344	側柱	5.7×4.2	3×2	N54°W
SB348	総柱	3.0?×2.7	2?×2	N17°W
SB349	側柱?	?×3.0	不明×2	N6°W

表３　飛鳥・奈良時代の掘立柱建物一覧

写真33　調査区全景（東上空から）

竪穴住居（表４）　飛鳥・奈良時代の竪穴住居21棟を確認した。これらは、調査区の東側に集中する傾向がある。平面形は方形と長方形の２種類があり、床面積は25㎡を超える大型のものと、15㎡前後の主柱穴を持たない小型のものに大別される。遺物はカマド付近を中心に、土師器片や須恵器片などが出土した。

ＳＨ324・ＳＨ332・ＳＨ336・ＳＨ339では、中央部に貼床と考えられる硬化した面を確認した。

ＳＨ332は拡張して建て替えられており、床面上下２層それぞれに貼床面を検出した。主柱穴は下層にのみ４基を確認したが、上層には認められなかった。

大型土坑（ＳＫ229・301・326・327ほか）長さ３～４ｍ、深さ10～30㎝程の土坑８基を確認した。平面形は不整形である。いずれの土坑も竪穴住居に近接して存在し、土師器片や須恵器片が出土した。

３．まとめ

今回の調査では、先行する第２次・第３次調査と同様、竪穴住居や掘立柱建物を中心とする飛鳥・奈良時代の遺構を確認した。掘立柱建物については、第３次調査区の東側一帯に集中して営まれる一角があることが明らかになった。ただし、隣接する中野山遺跡に比べて北山Ａ遺跡の掘立柱建物群は方位が不揃いである。

また、四日市市教育委員会が平成24・25年度に個人住宅の建設に伴って、第５次調査区の南に隣接する第４次調査を行っている。ここでも飛鳥・奈良時代の竪穴住居や掘立柱建物などの遺構が検出されている。したがって、今回の調査で確認された飛鳥・奈良時代の集落は、さらに南に広がっていると考えられる。

写真34　ＳＢ323（南東から）

遺構名	平面形	規模（m）		カマドの位置	備考
		長さ	幅		
SH302	不明	5.0以上	3.5以上	北辺	
SH303	長方形	4.1	3.0	北辺	
SH307	長方形	3.8	3.5	北辺	
SH308	不明	6.1	5.4以上	東辺	
SH312	不明	3.0以上	2.0以上	不明	
SH316	不明	不明	不明	不明	カマド痕跡のみ検出
SH318	方形	5.1	4.9以上	北辺	
SH319	方形	3.8m	3.7m	北辺	
SH321	長方形	4.0	3.3	東辺	
SH322	方形	4.0	3.9	北辺	
SH324	方形	5.0	4.9	北辺	貼床 主柱穴４基
SH325	不明	3.0以上	3.6	不明	
SH328	不明	不明	不明	不明	
SH331	不明	不明	不明	不明	北辺の一部とカマド痕跡のみ
SH332	長方形	6.2	5.0	北辺	貼床上下２層。下層に伴う主柱穴４基
SH336	長方形	4.4	2.9	北辺	貼床
SH338	不明	4.8	2.0以上	北辺	
SH339	長方形	3.8	3.5	東辺	貼床
SH341	不明	6.2	2.5以上	北辺	SH347を切る
SH345	不明	不明	不明	不明	
SH347	不明	不明	2.2以上	不明	SH341に切られる

表４　飛鳥・奈良時代の竪穴住居一覧

写真35　ＳＢ340（北から）

写真37　ＳＨ336（北西から）

写真36　ＳＨ332（東から）

写真38　ＳＫ229・ＳＫ309（西から）

写真39　ＳＨ321（西から）

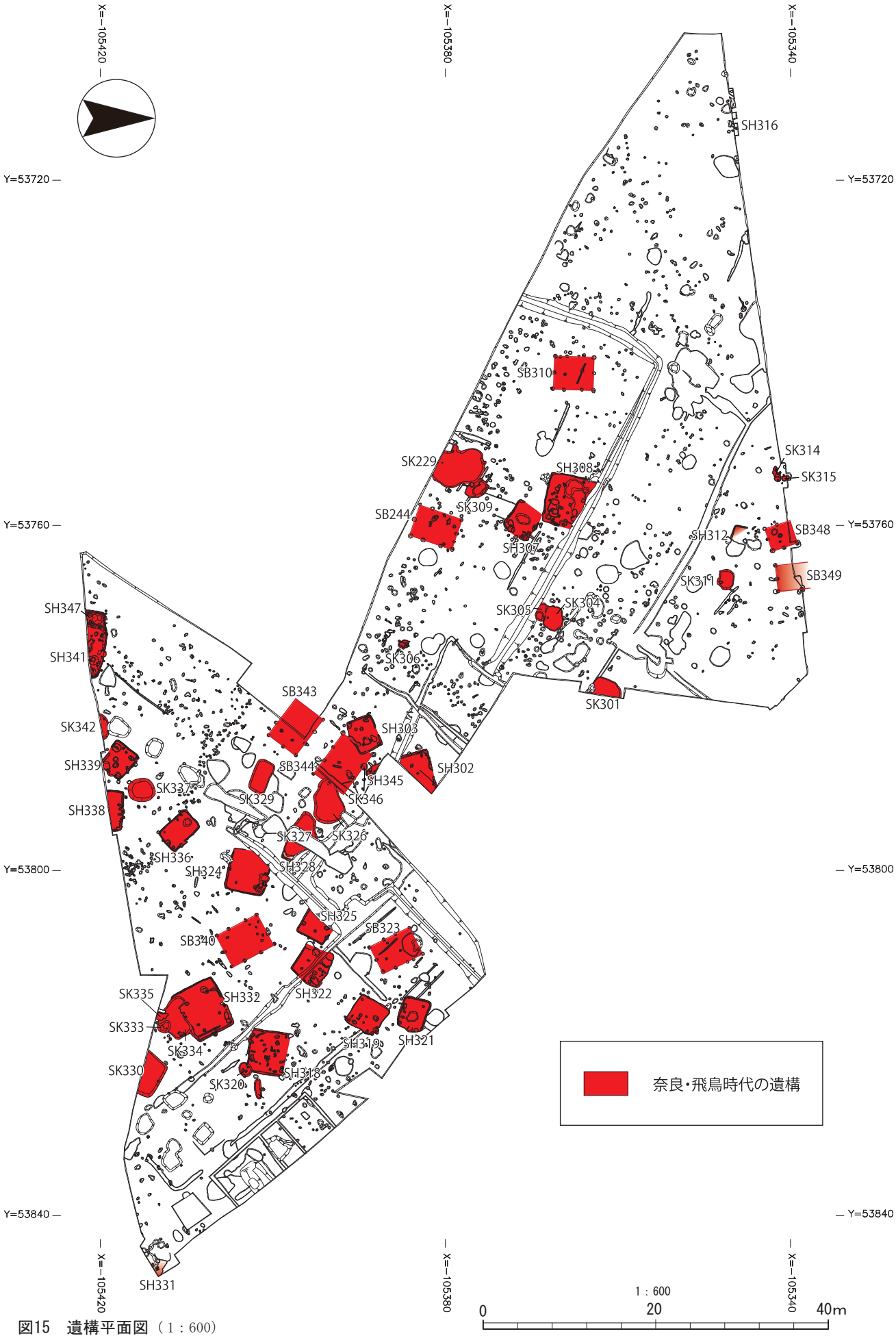


図15　遺構平面図（1：600）

6　中野山遺跡（第10次）

1．はじめに

中野山遺跡は、本年度の発掘調査で対象総面積の約85％を終えた。第10次は、遺跡東部の2,480㎡を対象とした（図４）。調査の結果、縄文時代から奈良時代の遺構を検出した。

2．遺構と遺物

（１）縄文時代

第10次調査では、煙道付炉穴53基・集石炉６基・土坑炉[①]２基を検出した。中野山遺跡全体では、早期の竪穴住居４棟・煙道付炉穴173基・集石炉29基・土坑炉２基を検出したことになる。

ＳＦ1402（写真41・図16）　調査区北西部で検出した煙道付炉穴である。上部は削平され、本来の形状は不明である。残存部は全長1.8m程、幅0.6m程、深さ0.3m程を測る。平面形は、煙道が細くすぼまり、中野山遺跡では最も多い形状となる。煙道の前半部を中心に２～８㎝程の被熱層が形成され、黄褐色や赤褐色に変色して硬化している。なお、燃焼坑の端側や煙出坑[②]には被熱による赤変は見られない。

煙道部で押型文土器片（図18－３・10）や磨石を

写真40　ＳＦ1421等煙道付炉穴群（東から）

写真41　ＳＦ1402（南東から）

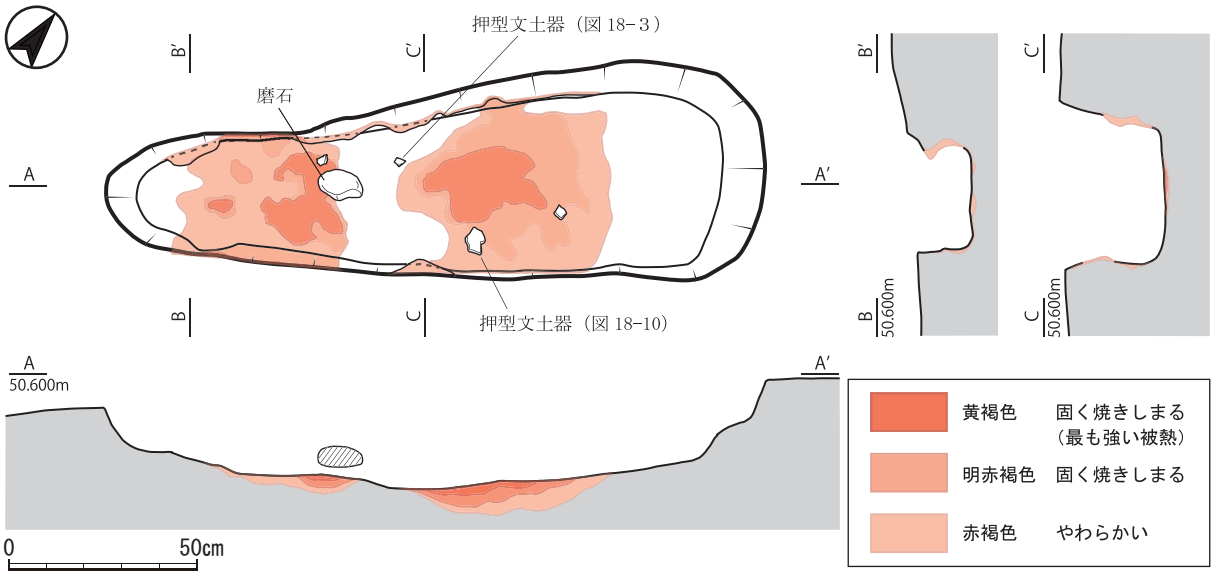


図16　ＳＦ1402平面図・断面図（１：20）

検出した。押型文土器は口縁部の外反が弱く、外面に格子文が施されている。また、口縁部端面には丸棒状具による並行刺突文が認められる。厚さは７㎜程で灰黒色をしている。施文は浅いが大川式と推定される。磨石はいわゆる石鹸形磨石③で、表裏や側面に使用痕が認められる。被熱の痕跡は見られない。煙道付炉穴から磨石が検出される例は、このほかに６例が認められる。

ＳＦ1412・ＳＦ1415（写真42）　調査区北部で検出した、２基の煙道付炉穴である。燃焼坑同士で重複し、２基の煙道はほぼ反対の方角を向いている。西側のＳＦ1415は東側のＳＦ1412を切っている。各々の埋土からは、押型文土器の小片（図18－２・４・６・８）を検出した。中野山遺跡では、２基以上が重複する例がいくつか確認されている。

ＳＦ1489（写真43）　調査区北東部で検出した煙道付炉穴である。これを含めて３基（ＳＦ1488・1489・1491）が一部分で重複し、ほぼ同方向で１列に並んでいる。上部は削平されて本来の深さや煙道部は不明であるが、残存部は全長2.1ｍ程、幅0.7ｍ程、深さ0.4ｍ程を測る。煙道の前半部を中心に、被熱による赤変が見られる。煙道で押型文土器片（図18－１）を検出した。また、煙道のすぼまった付近で石皿を含む20㎝までの礫を床面上で多数検出した。礫は、上面に被熱による赤変が認められるものが多い。

ＳＦ1404（写真44）　調査区北西部で検出した集石炉である。上部は削平されているが、平面形は楕円形を呈する。残存部は長径1.2ｍ程、短径１ｍ程、深さ0.6ｍ程を測る。２面の被熱層を確認した。下層の床面には見られない配石が、約６㎝上層の床面で見られた。配石は、上面に被熱による赤変が認められるものが多い。埋土上部からは、縄文施文土器片（図18－５）や少量の拳大礫を確認した。

（２）弥生時代

竪穴住居１棟と土坑１基を確認した。

ＳＨ1444（写真45）　調査区西部で検出した竪穴住居である。南辺は直線的だが胴張の隅丸方形を呈し、東西4.2ｍ、南北4.1ｍを測る。柱穴や炉は不明だが、幅0.1ｍの周溝を確認した。床面直上で中期中葉の櫛描横線文の壺片を検出した。

写真42　ＳＦ1412・ＳＦ1415（南から）

写真43　ＳＦ1489礫出土状況（北東から）

写真44　ＳＦ1404（南から）

写真45　ＳＨ1444（北西から）

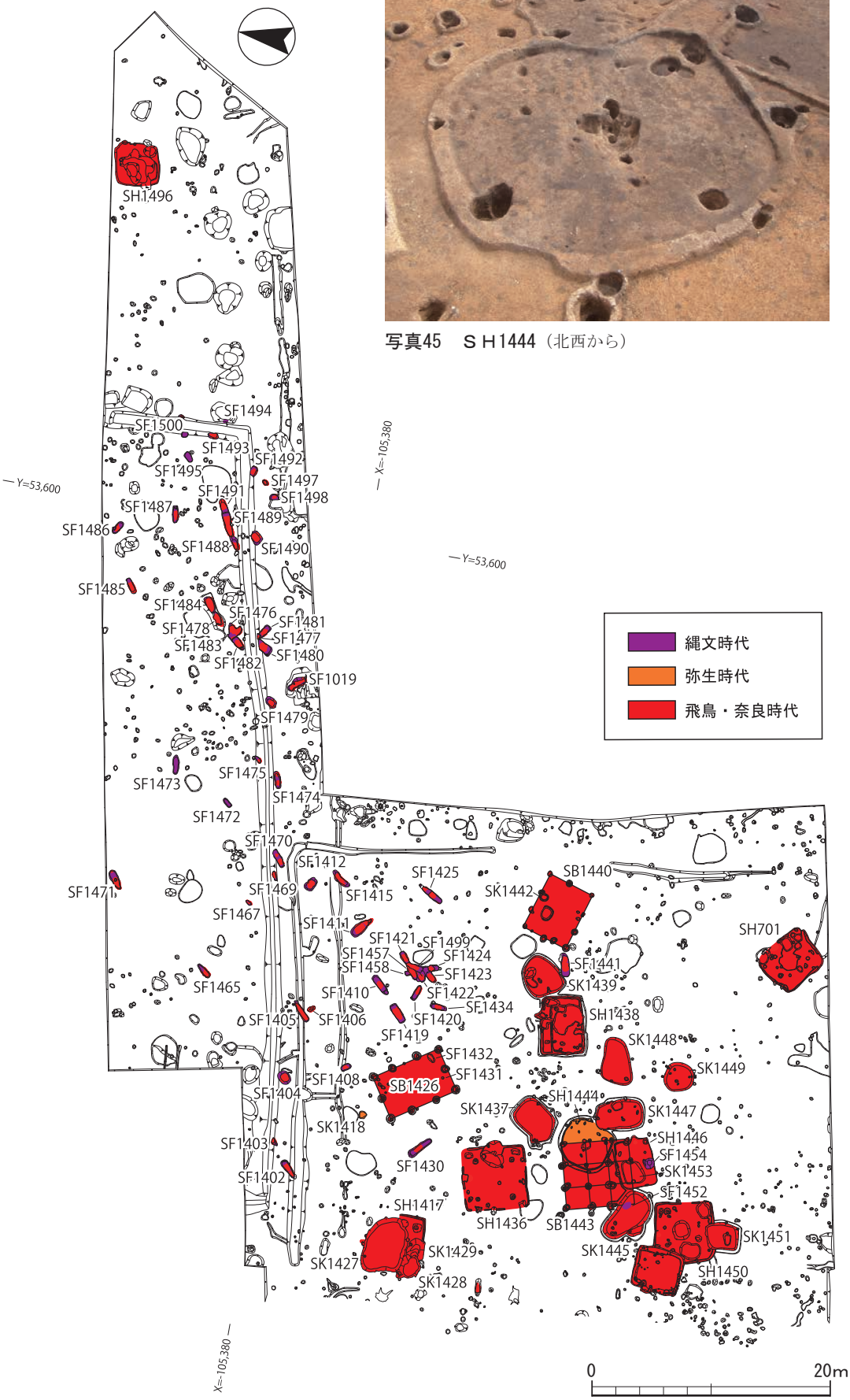


図17　遺構平面図（1：500）

ＳＫ1418　調査区西部で検出した土坑である。楕円形を呈し、長径1.5m、短径1.2mを測る。埋土から、中期中葉の甕の底部片と櫛描横線文や櫛描波状文をもつ壺片を検出した。

（３）飛鳥・奈良時代

竪穴住居７棟と掘立柱建物３棟、大型土坑10基、小土坑１基を確認した（表５・６）。竪穴住居の平面形は、方形もしくは長方形を呈する。掘立柱建物は総柱建物と側柱建物がある。いずれも柱穴は小型で円形であった。

ＳＨ1438（写真46・47）　調査区中央西部で検出した竪穴住居である。長方形を呈し、北と東に0.6mずつ拡張が認められる。拡張後の規模は東西５m、南北3.8mを測る。幅0.2mの周溝が認められたが柱穴は検出されなかった。北壁中央のカマドには、大径側を下に立てた完形の鞴羽口が、支柱石の代わりとして転用されていた。また、カマド周辺から土師器甕片を多数検出した。北東隅にある貯蔵穴の埋土上層では、やや傾いた状態で完形の須恵器杯を検出した。

ＳＢ1426（写真48）　調査区中央西部で検出した掘立柱建物である。桁行３間・梁行２間の側柱建物で、柱間寸法は桁行・梁行ともに6.5尺の等間である。柱掘方は径45～50㎝を呈し、径約20㎝の柱痕跡が認められた。遺物は検出されなかった。

ＳＫ1442（写真49）　調査区中央で検出した小土坑である。平面形は楕円形を呈し、長径0.6m、短径0.4m、現存深は0.14mを測る。埋土には炭化物や焼土が混じっていた。埋土からは、土師器の甕と甑、須恵器の杯身や杯蓋・水瓶（図18－15～24）を検出した。杯身や杯蓋は完形に近いものが多い。火葬墓の可能性もある。

３．まとめ

今回の調査により煙道付炉穴や集石炉が多数確認できた結果、煙道付炉穴が台地北辺に集中していることや、集石炉が台地北辺で散在するという分布状況が明らかになった。縄文早期の遺構の多さに比して、検出できた遺物は少量であった。押型文土器は、大川式から押型文期中頃までに属する。石器組成は、石鏃などチャートやサヌカイト製剥片石器の割合が低い。一方、礫器や石皿・磨石・敲石など礫石器の割合が高いといえる。煙道付炉穴からは石皿や磨石・礫器が多数出土し、集石炉からは石皿や磨石は出土せず礫器が多数出土する傾向が認められた。

飛鳥・奈良時代の遺構分布は縄文早期とは異なって、中央西部に集中する傾向が認められた。掘立柱建物の方向は３棟とも別方向であった。その中で、総柱建物のみが竪穴住居と方向を同じに近接し、東辺を揃えて並んでいる。竪穴住居を主屋、総柱建物を副屋とし、付近にある大型土坑を穴倉とする居住空間が想定される。また、２棟の側柱建物は方向を同じにする竪穴住居や大型土坑が伴わず、単独である。遺物は、土師器や須恵器のほかに鞴羽口や微量の鉄滓が認められた。

［註］

① 山田猛「煙道付炉穴について」『東海地方における縄文時代早期前葉の諸問題』東海縄文研究会 2014

② 前掲註①に同じ

③ 大下明「近畿地方と東海地方西部における押型紋土器期の石器群について」『縄文時代の石器―関西の縄文草創期・早期―』関西縄文文化研究会 2002

遺構名	平面形	規模		カマドの位置	備考
		東西	南北		
SH701	長方形	4.6	4.2	北辺	南半分は７次調査区
SH1417	矩形	－	－	北辺	一部のみ検出 大半を大型土坑に切られる
SH1436	方形	5.4	5.4	北辺	
SH1438	長方形	5	3.8	北辺	北・東に拡張
SH1446	長方形	4	3	東辺	床面より下層にSF1454を検出
SH1450	方形	5.2	5	北辺	北西部をSH1714に切られる
SH1496	方形	3.8	3.8	東辺	中央部大半は撹乱

表５　飛鳥・奈良時代の竪穴住居一覧（単位はm）

遺構名	種別	方向	規模	桁行間数(柱間寸法)×梁行間数（柱間寸法）
SB1426	側柱	N34°W	5.85×3.9	3(1.95＋1.95＋1.95)×2(1.95＋1.95)
SB1440	側柱	E16°S	4.95×3.9	3(1.65＋1.65＋1.65)×2(1.8＋2.1) （北）（南）
SB1443	総柱	N13°W	5.4×5.4	3(1.8＋1.8＋1.8)×3(1.8＋1.8＋1.8) （南北方向として記述）

表６　飛鳥・奈良時代の掘立柱建物一覧（単位はm）

写真46　ＳＨ1438（南から）

写真47　ＳＨ1438カマド周辺遺物出土状況（西から）

写真48　ＳＢ1426（南東から）

写真49　ＳＫ1442土器出土状況（南東から）

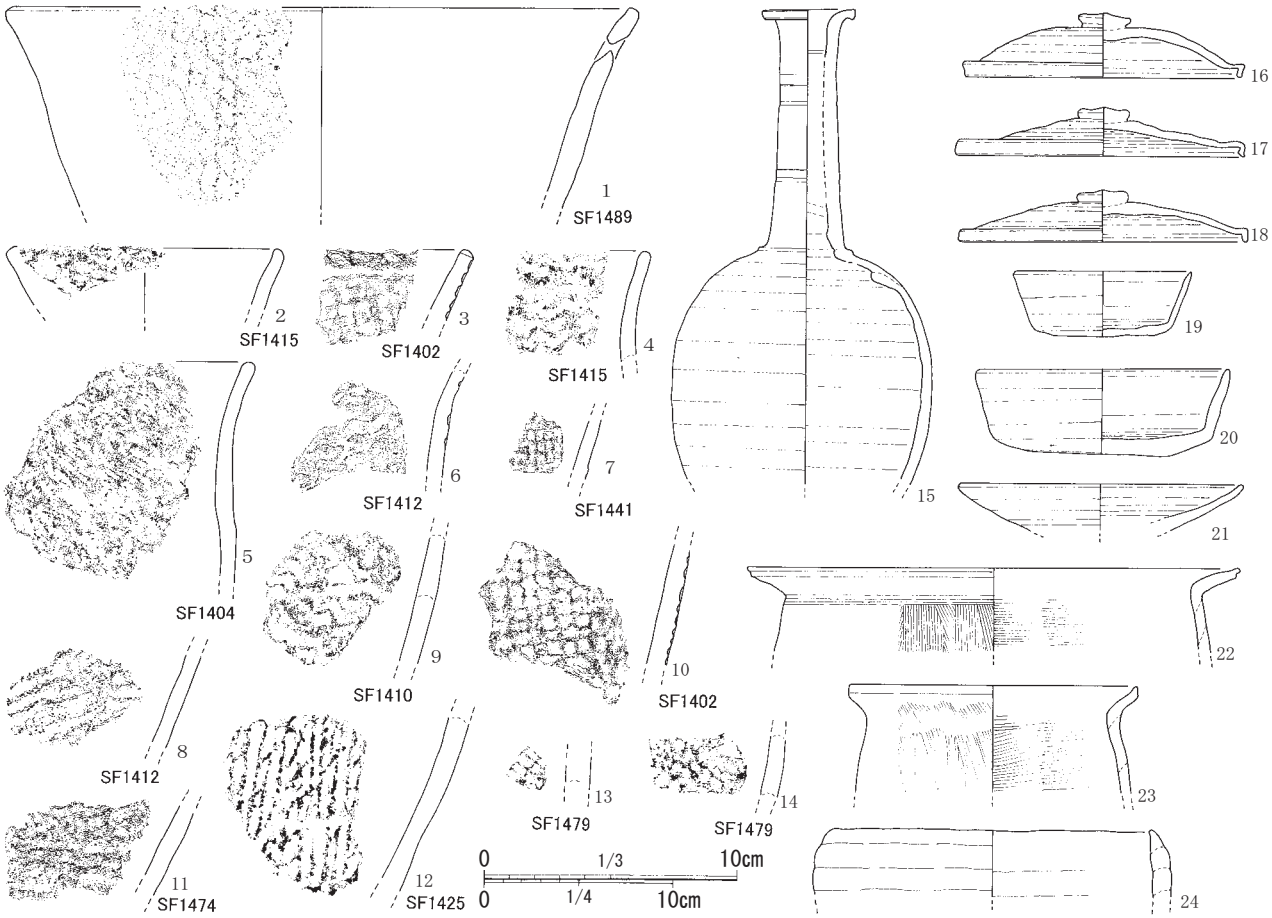


図18　出土土器実測図（１～14：1/3、15～24 ： SK1442 ： 1/4）

7　中野山遺跡（第11次）

１．はじめに

第11次調査として、平成25年４月26日～平成26年１月17日まで、丘陵上の平坦面5,946㎡（以下、①区）と斜面及び谷部分1,401㎡（以下、②区）の２ヵ所の合計7,347㎡を調査した（図４）。

①区は、南側を第３次調査区に、北側を第５次調査区に挟まれる位置にある。どちらの調査区からも縄文時代早期の炉穴が多数検出されていることから、今回の調査でも、飛鳥・奈良の遺構だけでなく、縄文早期の遺構の存在が想定されていた。

②区は①区から北西方向に50ｍほど離れた場所に位置する。調査前に現地を確認したところ、斜面には北西方向へ小規模な谷筋が入り、冬場の乾燥した時期でも湧水がみられた。丘陵下の谷は、狭小ではあるが平坦地となっており、近年まで水田として利用され、コンクリート製の用水路も整備されていた。

平成23年度に行ったトレンチ掘りによる先行調査では、この水田下から、縄文土器や山茶椀、及び木質片などが確認されている。そのため、水場に関連する遺構や丘陵上では残りにくい木器などの遺存が期待された。

２．①区の遺構と遺物

①区では当初予想していた縄文時代早期と古代（飛鳥・奈良）の遺構に加え、少数であるが縄文時代中期と晩期の遺構を検出した（図19）。

（１）縄文時代の遺構

早期の遺構として、集石炉７基・煙道付炉穴63基・土坑３基、中期では土坑１基、晩期では土器棺墓２基がある。以下、主な遺構について報告する。

ＳＦ1506（図21）　調査区中央部北西側で検出した集石炉である。埋土のうち、検出面から炉穴の中程までは径５～15㎝程の被熱礫を多量に含む。炉穴の底面には15～30㎝程の比較的大きめの礫が配置されており、礫の上面は被熱している。炉穴の壁面は開

写真50　調査区（左手前）遠景（北東上空から）

口部から中程までに被熱による赤変が確認できた。遺物は出土しなかった。

ＳＦ1594（図22）　調査区北東部で検出した煙道付炉穴である。煙道の天井が残存していた。被熱による赤変は、煙道の内側と、燃焼坑の煙道に近い部分の底面および側面に顕著にみられた。燃焼坑の断面形と平面形から推測すると、煙道は完存ではなく、燃焼坑側が一部崩落しており、本来は、出土した木炭の上あたりまで続いていたものと思われる。

底面に近い位置から押型文土器の口縁部小片（図23－１）が出土した。

なお、煙出坑に近い位置からピットが検出されている。このピットからの遺物はないが、埋土の特徴や検出された位置などから炉穴に関連する遺構である可能性が考えられるため図中に示した。

ＳＸ1517（図24）　調査区南西部で検出した晩期の土器棺墓である。遺構上面の大半が削平されて消滅しており、残存状況は良くない。棺として使用された土器は１個体とみられ、対となる土器や蓋となる土器片等は出土しなかった。土器の底部および体部の出土位置や墓坑の平面形等からみて、土器棺は、西側に口縁部、東側に底部という方向で据えられていたようである。

ＳＸ1590（図25）　調査区東部で検出した晩期の土器棺墓である。遺構上面の大半が削平されており、残存状況は良くない。調査時は土器片の重なりや裏表関係等から、４個体程度の土器が使用されているとみていたが、接合すると２個体となった（図26－２・３）。木根等による撹乱が認められるため、土器はある時期に割れたあと本来の位置から若干動いているものと思われる。ただし、口縁部や底部の位置を逆転させるほどの撹乱ではないことから、２つの土器は、東西方向に合わせ口で組み合わせられていたものと考えられる。

なお、骨や副葬品等は確認できなかったが、土器２の内面に付着した土や、墓坑の埋土には少量であるが赤色顔料の粒子が含まれていた（写真56）。この顔料について、三重県立博物館の間渕創氏に蛍光Ｘ線による分析を依頼したところ、分析装置に水銀（Hg）の反応は無く、鉄（Fe）の反応が強く現れた。赤色顔料はベンガラであると考えられる。このベンガラの発色は非常に鮮やかであるが、土器の内面はほとんど赤味が感じられず、目視した限りでは、凹みなどにも顔料の残留は確認できない。ベンガラは土器の内面に塗布されたものではなく、骨等に塗られていたものである可能性が考えられる。

写真51　ＳＦ1501･1592･1593･1594（西から）

写真52　ＳＦ1594（西から）

写真53　ＳＦ1594煙道内埋土（西から）

図19　①区　遺構平面図（1：500）

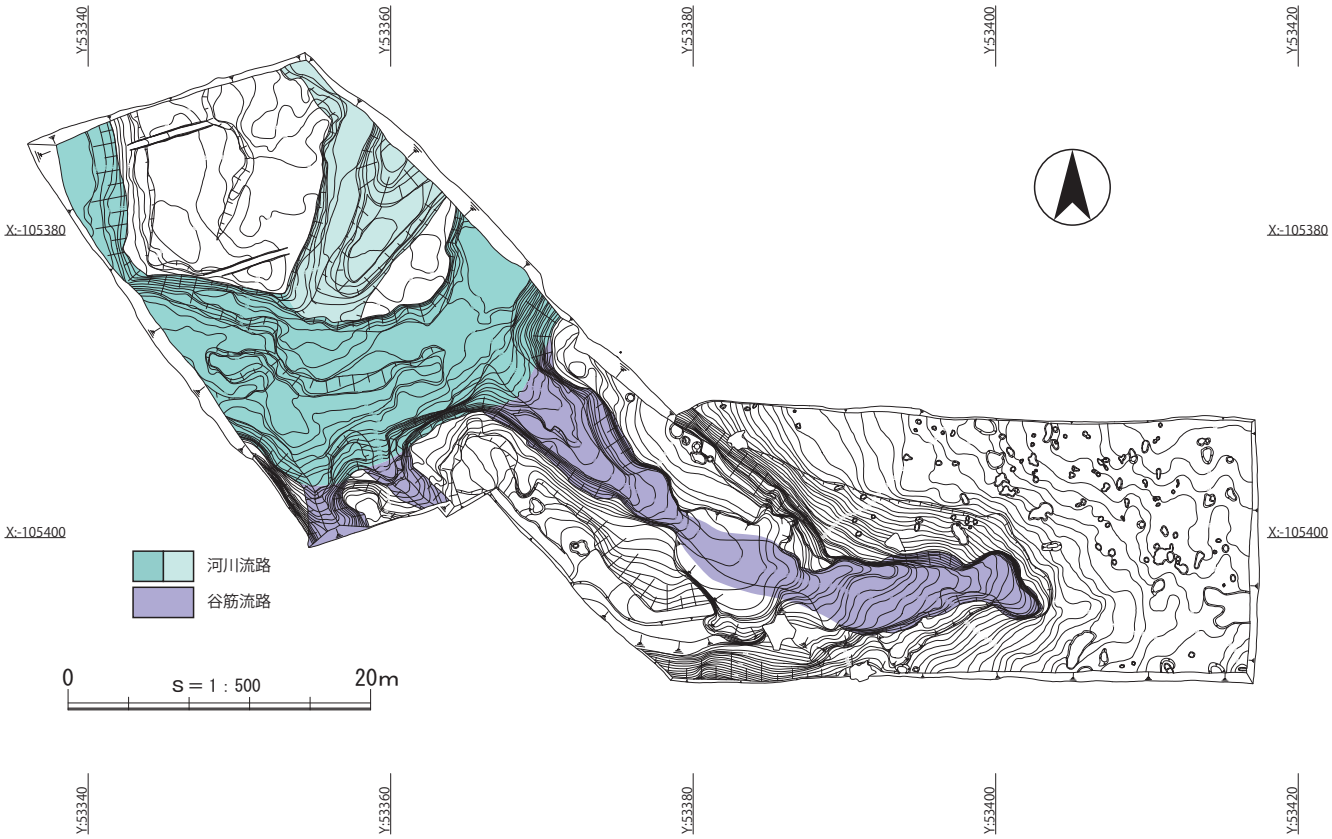


図20　②区　遺構平面図（1：500）

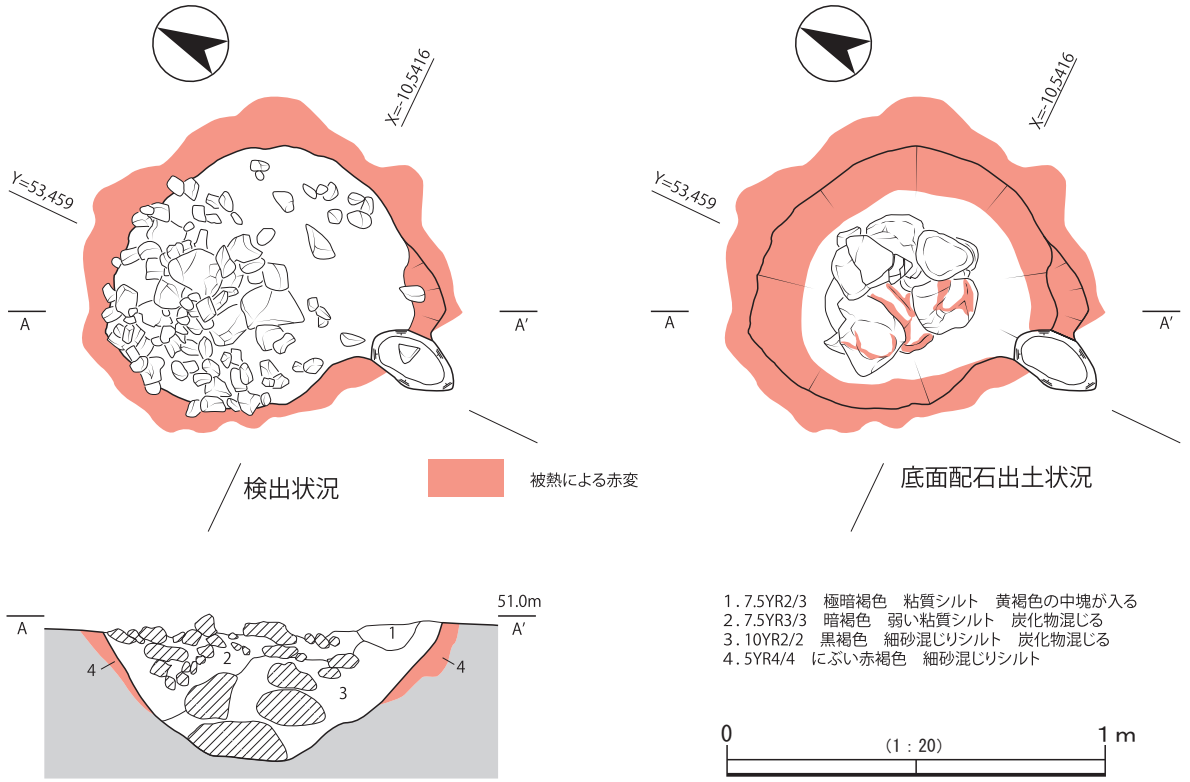
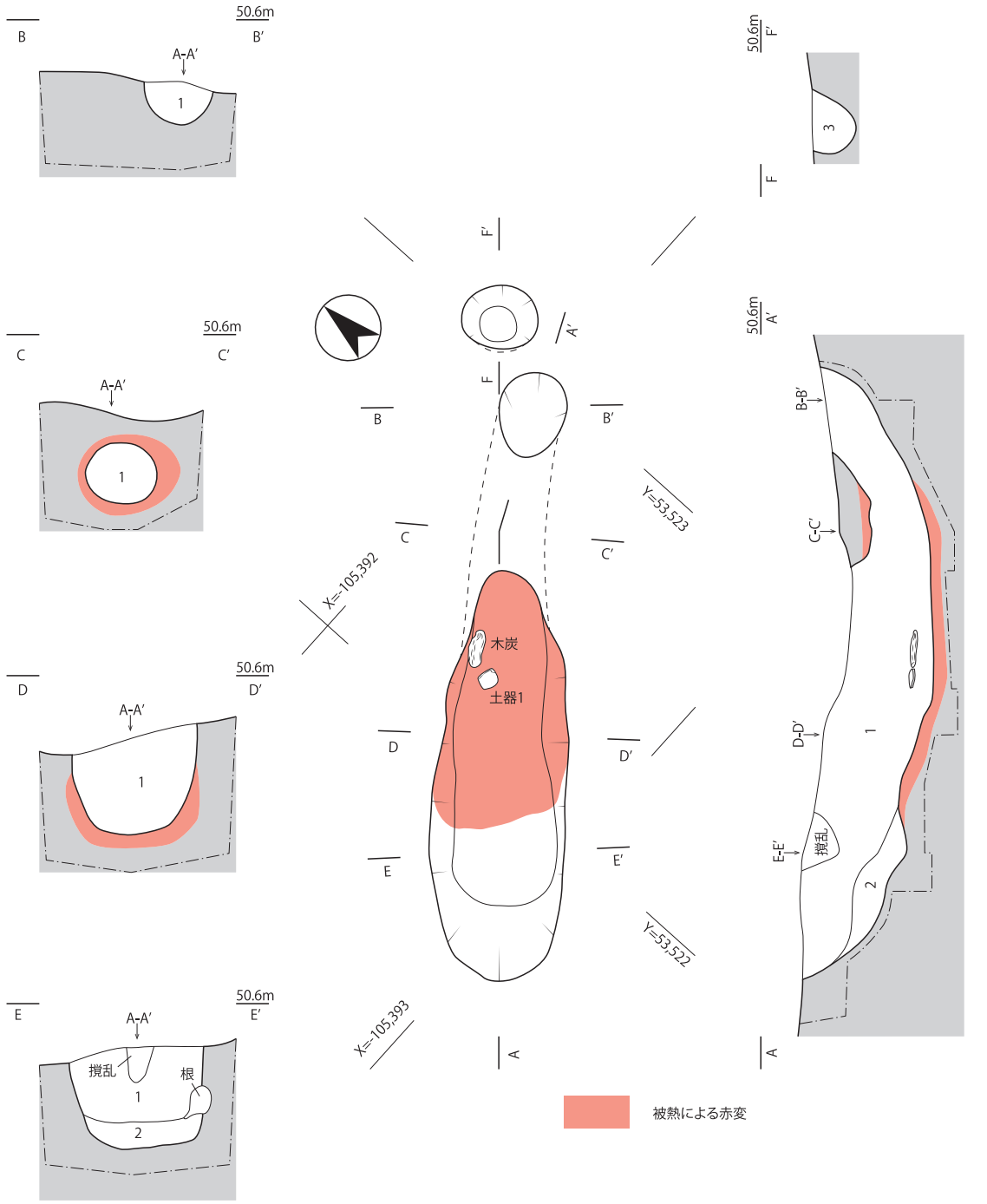


図21　ＳＦ1506平面図・断面図（1：20）



1．7.5YR3/4～4/3　暗褐色～褐色　砂質シルト　炭化物粒・焼土粒を多く含む
2．5YR4/4　にぶい赤褐色　粘質シルト　粗砂多く含む
3．7.5YR4/2　褐色　砂質シルト　炭化物粒　少量含む（ピット埋土）

0　（1：20）　1 m

図22　ＳＦ1594平面図・断面図（1：20）

（２）縄文時代の遺物（図23・26）

縄文時代早期　１は、煙道付炉穴ＳＦ1594から出土した口縁部分の小片である。やや厚みがあり、浅く縦位にやや大ぶりなネガ楕円文を施している。胎土はにぶい黄橙色で、２㎜以下の白色の角粒が目立つ。

縄文時代晩期　２は、ＳＸ1590から出土した一条の刻目突帯深鉢である。体下部は欠損していた。口縁部を外反肥厚させたうえ、ヨコナデを施す。頸部から体部にかけては、なだらかで張り出しは弱い。条痕を突帯直下から施し、体下部は上方に向かってヘラケズリを施す。底部はやや厚く、一旦立ち上がってから体部に続く。胎土は鈍い黄褐色で、長石が目立つ。２㎜以下の石英を含む。納所遺跡下層に類例がある①。

３も、ＳＸ1590から出土した条痕調整の鉢である。口縁部や体・底部の一部がそれぞれ残存していたため、器形の概要が推測できた。口縁部はヘラ状具によりヨコナデが行われている。口縁部直下から全面に条痕を施し、体部にはヘラケズリを施している。胎土は暗い黄土色で、３㎜以下の砂粒を含むが長石は目立たない。底部内面にベンガラが少量残存した。

４は、調査区東南部のピット（M-ｆ６　Ｐ１）から出土した浅鉢の口縁部片である。懸垂浮線文の下に三分岐浮線文を二段残す。胎土は淡い黄色で、細砂などの含有はほとんどみられない。外面に赤色顔料がわずかに残存する。納所遺跡下層に類例がみられる。

５は、調査区東部の土坑ＳＫ1711から奈良時代の須恵器等に混じって出土した。刻目突帯を施文した口縁部片であり、折り返しによる肥厚が認められた。体部には下方からヘラケズリを施しており、外面に指によるヨコナデ、内面にヘラによるヨコナデを施す。胎土はにぶい黄橙色で、白色細砂を含み長石と金雲母が目立つ。伊勢地方における突帯文土器の中頃の所産である。

［註］

① 三重県埋蔵文化財センター『納所遺跡Ⅰ　―遺構・土器・木製品―』2012

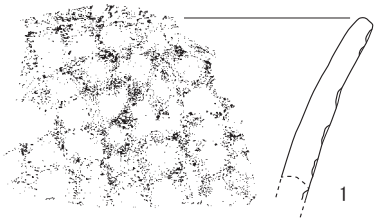
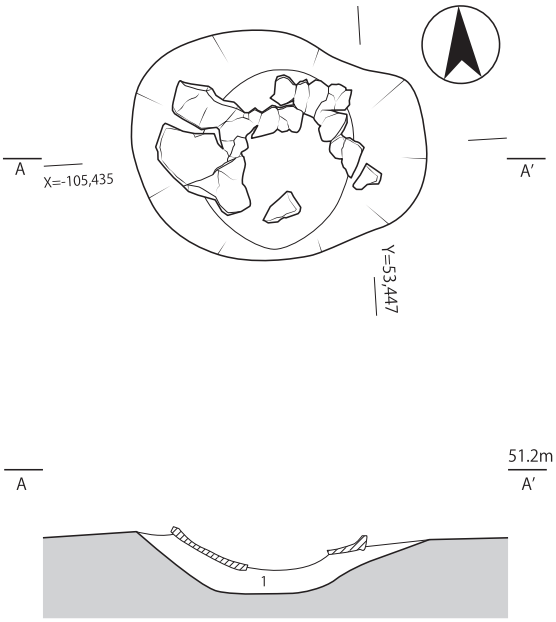


図23　ＳＦ1594出土土器（１：２）

写真54　ＳＦ1585半截状況（南から）

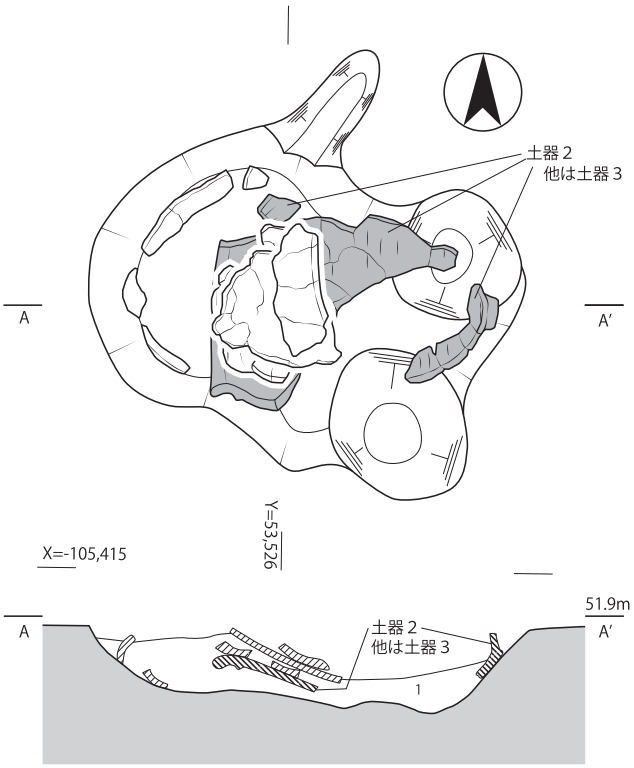
写真55　ＳＸ1590出土状況（南から）

写真56　ＳＸ1590出土土器３内に残るベンガラ



1．10YR5/3　にぶい黄褐色砂質シルト

図24　ＳＸ1517平面図・断面図（１：10）



1．7.5YR2/3　極暗褐色粘質シルト　炭化物・赤色顔料粒が混じる

図25　ＳＸ1590平面図・断面図（１：10）

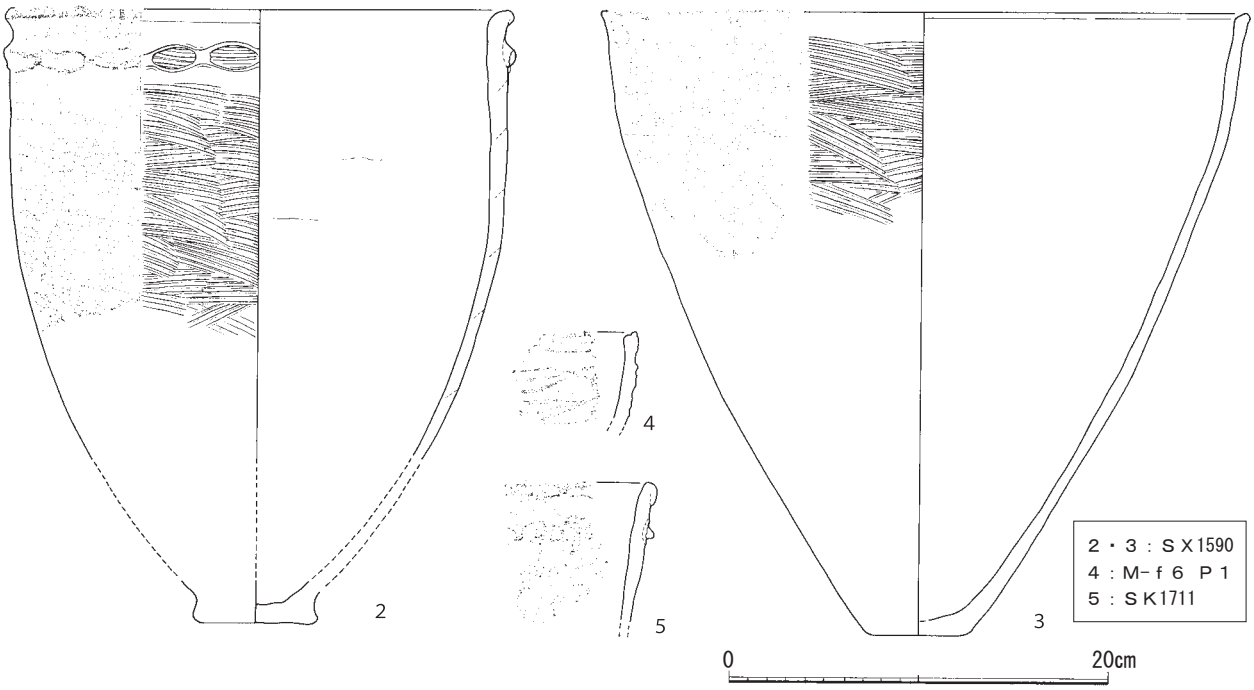


図26　ＳＸ1590・ＳＫ1711・ピット出土土器（１：４）

（３）飛鳥・奈良時代の遺構

この時期の遺構として、竪穴住居６棟、掘立柱建物18棟、土坑22基を検出した（図19）。以下に概要を述べる。

竪穴住居（図19・表７）　調査区北側で検出されたＳＨ1108は、第５次調査時に北側半分が確認されていたものである。今回の調査で全体の規模が明らかとなったが、南側半分は里道として利用されていたため、大きく撹乱・削平されていた。そのため、第５次調査で確認された主柱穴や壁周溝は確認できなかった。他の竪穴住居もかなり削平されており、残存していた竪穴の深さは５㎝以下のものがほとんどであった（写真57）。その中で、調査区東端のＳＨ1714（写真58）のみ、竪穴の深さが30㎝以上と残りがよい。このＳＨ1714は同じ①区の他の竪穴住居に比べ、平面形が長方形を呈し、主柱穴と呼べるものが存在しないなど、構造に差異がみられる。出土遺物も須恵器杯蓋にツマミの付くもの（写真61）があるなど、他の竪穴住居に比べ、若干新しい要素を持つ遺物が出土している。

掘立柱建物（図19・表８）　調査区中央部南側に掘立柱建物の集中する地区があり、ＳＢ1571・1574・1576・1729・1730はおおむね棟方位が揃う。

ＳＢ1522・1523は、どちらも桁行２間×梁行１間（2.4×2.3m）のほぼ正方形の建物である。棟方位は揃えられていないが、２棟は同じ寸法で建てられている。

大型土坑（図19）　飛鳥･奈良時代の土坑は22基を検出したが、これまでの調査同様、半数程度は径４m前後の大型土坑である。これらは、平面形がいびつな円形～楕円形を呈し、底面は竪穴住居のように平坦に作られているものが多い。しかし、壁面の立ち上がりは竪穴住居よりも緩やかである。土坑の周囲または壁面に不規則にピットが検出されるものもあり（写真60）、簡単な屋根が付いていた可能性も考えられる。

写真57　ＳＨ1515（東から）

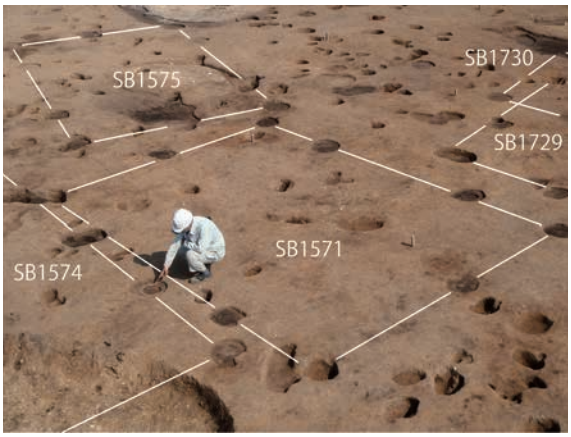


写真59　掘立柱建物集中地区（北西から）

写真58　ＳＨ1714（北から）

写真60　ＳＫ1503（南から）

遺構名	竪穴規模(m)	柱間寸法(m)	竈	貯蔵穴
SH1515	4.8×5.0	2.5×3.0	東	南東隅
SH1516	5.0×5.1	2.7×3.0	東	南東隅
SH1562	5.3×5.6	2.6×2.2	北	北東隅
SH1598	(5.2×5.5)	3.0×3.3	(北)	北東隅
SH1714	4.1×3.5	なし	西	北西隅
SH1108	3.7×3.9	1.7×1.8	不明	不明

表７　飛鳥･奈良時代の竪穴住居一覧

遺構名	建物種別	規模(m)	間数	方位
SB1504	総柱	3.9×3.2	3×2	N25° E
SB1522	側柱	2.4×2.3	2×1	N44° W
SB1523	側柱	2.4×2.3	2×1	N18° W
SB1539	側柱	4.8×3.3	3×1	N14° E
SB1540	側柱	4.5×3.6	3×2	N8° E
SB1551	側柱	3.6×3.6	2×2	N15° W
SB1557	側柱	5.1×3.3	3×2	N7° E
SB1558	側柱	5.4×4.2	3×2	N33° W
SB1571	側柱	5.4×4.2	3×2	N12° W
SB1574	側柱	6.6×4.5	4×3	N10° W
SB1575	側柱	5.5×3.3	3×2	N7° E
SB1576	側柱	6.3×5.1	4×3	N19° W
SB1577	側柱	6.6×5.1	3×3	N8° W
SB1578	総柱	3.8×3.6	2×2	N24° W
SB1703	側柱	6.8×4.2	4×2	N5° E
SB1704	側柱	6.8×5.1	4×3	N4° W
SB1708	側柱	6.6×4.5	4×3	N32° E
SB1710	側柱	4.2×3.8	2×2	N12° W
SB1729	側柱	6.6×4.95	4×3	N15° W
SB1730	側柱	6.6×3.3	4×2	N14° W

表８　飛鳥･奈良時代の掘立柱建物一覧

（４）飛鳥・奈良時代の遺物

須恵器杯蓋（写真61）　ＳＨ1714より出土。復元すると径は、写真左が10.4cm、右が13.6cmとなる。

砥石（写真62）　ＳＨ1562貯蔵穴より出土。形状から推測すると１/３～半分程度が欠損している。砂岩製で重量は1.05kg。

鉄滓（写真63）　ＳＫ1543より出土。重量は71g。磁石への引き付きが弱いためメタル度は高くない。

写真61　須恵器杯蓋（ＳＨ1714出土）

写真62　砥石（ＳＨ1562貯蔵穴出土）

写真63　鉄滓（ＳＫ1543出土）

３．②区の遺構と遺物

②区では期待されていた水場関連の遺構は確認できなかった（図20）。斜面の谷筋は、調査前から確認できた比較的大きなもの以外に、完全に埋没していた小規模なものを調査区南西隅で２つ検出した。この２つの谷筋からの遺物はなく、どちらもかなりの急斜面にあることから、土砂崩れ等の際に一時的にできた流路と思われる。

これらに比べ大きい方の谷筋は、傾斜の緩い斜面にあり、深いところでは約２ｍの堆積があった。最下層は砂礫層となっており、この層から、７世紀代の土師器や須恵器の小片が数点出土したが、明確に遺構といえるものは確認できなかった。

調査前まで水田として利用されていた谷底の平坦面（調査区の北西部）からは、蛇行する小規模な河川の流路痕跡が２つ検出できた。これら河川の最下層も砂礫層となっており、この層から、７世紀代の土師器や須恵器の小片が数点出土した。木質片が多く含まれる層もあったが、使用痕や加工痕のあるものは確認できなかった。

写真64　②区完掘全景（北から）

４．まとめ

（１）縄文時代

縄文時代早期の煙道付炉穴の集中する範囲は、①区の南西部と北東部の２箇所に分かれる。炉穴の形状は、南西部のものは比較的小型で浅く、北東部のものは比較的大型で深いものが多い。煙道付炉穴は時期が降ると小型化する傾向があるため、この違いが時期差を表している可能性もある。しかし、大型のものでも削平されれば小型のものと見分けが付きにくくなるため、削平の度合いや出土遺物等を、今後、詳細に検討していく必要があるだろう。

また、炉穴の数に比べて竪穴住居が少ないということがかねてより指摘されている。竪穴住居は第４次調査で４棟が検出されて以降、確認されていない。もともと存在しなかったのか、それとも削平されてしまったのだろうか。これについては、包含層からの出土を含めて、この時期の遺物が非常に少ないことが手がかりとなる。中野山遺跡の遺物の出土量は、同じ煙道付炉穴の確認されている鴻ノ木遺跡や野添大辻遺跡と比較しても格段に少ない。後世の耕作等で遺構が削平されたとしても、遺物のすべてが流出または消滅するわけではないので、竪穴住居があれば、もう少し遺物が出るだろう。この生活臭の希薄さこそが、もともと調査区内に竪穴住居が存在しなかったことを示しているのではないだろうか。

では、炉穴を作った人々はどこに暮らしていたのか。これまであまり注意が払われてこなかったが、これまで行われたすべての調査区で、陥し穴が全くみつかっていないことに注目したい。陥し穴は獣の多く通るところ（獣道）に沿って作られるのであるから、これがみつからないということは、調査区内が人の居住地域からそれほど遠くない場所（人の気配があり獣が近づかない場所）であるということがいえるのではないだろうか。調査区外の比較的近辺に竪穴住居が存在している可能性が考えられる。

（２）飛鳥・奈良時代

建物の集中する場所とそうでない場所がより明確となった。掘立柱建物は棟方向を揃えるものもあり、平面プランが30㎝弱の尺で復元できるものが大半を占めている。３×２や４×３の側柱建物が多く建てられているのに対し、倉庫とみられる正方形の総柱建物が少ない。その代わりに底の平らな大型土坑が多数検出されている。大型土坑には簡易な屋根が付いていた可能性を感じさせるものもあり、これが倉庫の機能を持つ穴倉（あなぐら）的なものであるならば、倉庫としての総柱建物が少ないことも頷ける。これについても、今後さらに検討する必要があるだろう。

8　中野山遺跡（第12次）

1．はじめに

中野山遺跡は四日市市北部の朝明川中流北岸の台地上に位置する。第12次調査は、遺跡南西部の8,006㎡を対象としたものである。過年度の調査（第２次～第９次）で、縄文時代から奈良時代までの遺構を確認しており、今回の調査区でも同時代の遺構の存在が予想されていた。第９次調査区の北側と接する今回の調査では、現地表下約0.4ｍで地山に達し、当該面上で縄文時代から奈良時代の遺構を検出した。

2．遺構

（１）縄文時代の遺構

集石土坑　第10次や第11次調査区で多数確認された煙道付炉穴は確認されなかったが、調査区東側で集石土坑ＳＫ1629（写真66）１基を確認した。出土遺物がないため詳細は不明であるが、拳大以下の石を用いており、石には被熱痕が観察された。また埋土内に炭化物が堆積しているため、食物を蒸すなどの用途が推測される。第４次調査で同じような規模や形状の集石炉と考えられる土坑を検出しており、時期は縄文早期と考えられる。

袋状土坑　ＳＫ1623 とＳＫ1671の２基を検出した。土坑の上部は削平されているため本来の高さは不明である。断面の形状や、ややオーバーハングする形状を呈する土坑は第９次調査でも検出されており、この時期は中期である。今回検出された２基は出土遺物がないため時期は特定出来ないが、第９次同様中期の可能性がある。

竪穴住居　本調査区では２棟確認した。ＳＨ1679（写真67）の規模は東西3.5ｍ×南北3.3ｍで、ほぼ中央に屋内炉を有し、主柱穴を４隅に配する。東面に最大幅0.4ｍの壁周溝が巡るが、北面には見られ

写真65　調査区全景（西上空から）

写真66　ＳＫ1629半裁状況（西から）

写真67　ＳＨ1679（南から）

写真68　ＳＨ1679屋内炉（南から）

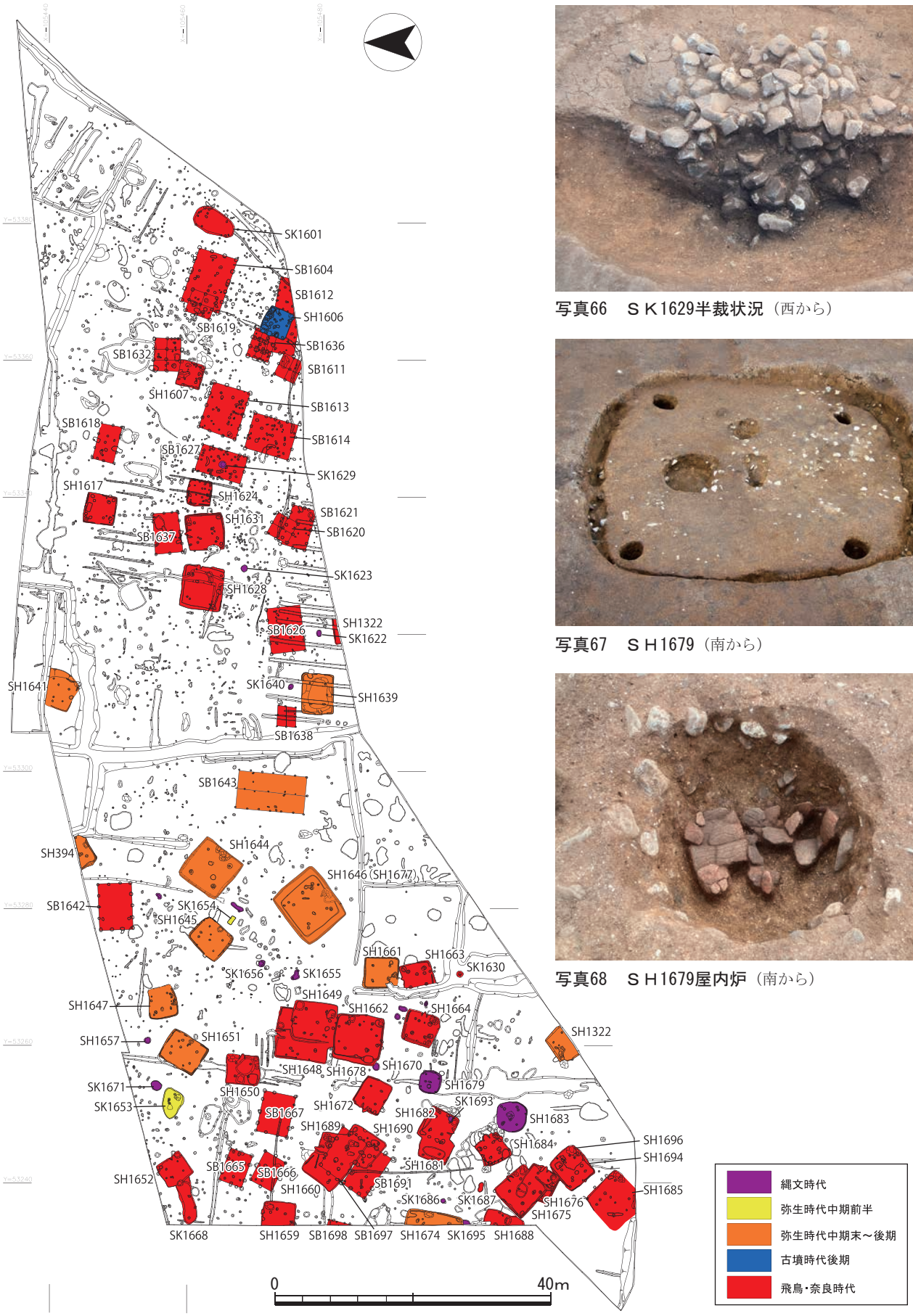


図27　調査区平面図（1：800）

ないことから住居の入り口は北側と思われる。時期は、屋内炉出土の遺物から中期末葉から後期初頭と推測される。

ＳＨ1683の規模は東西4.9m×南北4.4mで、屋内炉と主柱穴を有するが、壁周溝は確認できない。時期は出土遺物がないため不明であるが、規模や平面プランからＳＨ1679と近似した時期と推測される。

その他の遺構　調査区全体で約20基の土坑を確認した。早期の土坑３基を検出し、西側ではＳＫ1657をはじめ後期初頭の土器片が多く出土した。その他周辺のピットや土坑からも、中期末から後期初頭の土器が出土している。したがって、当該期の生活域が竪穴住居を中心に広がっていることがわかる。

（２）弥生時代の遺構

竪穴住居　中期末～後期の住居を９棟確認した。ＳＨ1646と、ＳＨ1677（写真70）の規模は10.7m×7.9mと、第12次調査区で最大で、東壁中央付近で貯蔵穴を確認した。東側壁面では赤色顔料の施された小型壺（写真71）、周溝からは石斧が出土しており、石斧の石材はハイアロクラスタイトである。ＳＨ1646はＳＨ1677と入れ子状に重複し、それぞれの遺構に対応する主柱穴や貯蔵穴が確認されたことから、外側に拡張されたことがわかる。ＳＨ1644（写真72）の規模は7.7m×6.9m、東側壁面中央付近で周囲が馬蹄状に盛り上がった貯蔵穴を検出した。

遺構名	平面形	東西（m）	南北（m）
SH1639	方形	6.0	4.6
SH1641	方形	4.6	4.6
SH1644	方形	7.7	6.9
SH1645	方形	5.6	4.7
SH1646	方形	10.7	7.9
SH1647	方形	5.2	4
SH1661	方形	5.0	4.6
SH1674	方形	8.3	8.3
SH1677	方形	4.1	4.1

表９　弥生時代の竪穴住居一覧

写真69　弥生竪穴住居群（手前：ＳＨ1646、右奥ＳＨ1644、左奥ＳＨ1645）（南東から）

写真70　ＳＨ1646（内側ＳＨ1677）（南から）

写真71　赤色顔料の施された壺

写真72　ＳＨ1644（北東から）

写真73　ＳＨ1661（南から）

ＳＨ1661は炭化材が底面直上で出土したことから、焼失住居であると推測される。本調査区における焼失住居はこの１棟のみである。

掘立柱建物（近接棟持柱付建物）　ＳＢ1643（図28）の規模は11ｍ×5.8ｍの２間×６間である。柱の径が小さいことから高床式ではなく平地式の建物であった可能性が高い。出土遺物がないため詳細な時期は不明であるが、周辺の竪穴住居の時期が後期であることや、岡山県沼ＥⅡ遺跡や島根県上中野原遺跡[①]に弥生時代の類例が見られることから、本遺構も同時期と考えられる。三重県内において同形式の建物遺構はいくつか見つかっているが、松阪市の村竹コノ遺跡[②]（後期）で検出されたＳＢ647は5.3ｍ×3.8ｍの２間×６間で、柱の規模などから高床式の建物と推測される。四日市内の菟上遺跡[③]（中期）ＳＢ284は規模は、9.6ｍ×3.5ｍの２間×６間で、高床式の建物が推測される。規模はそれぞれ異なるものの、いずれも高床式であるため、ＳＢ1643とは構造が異なる。

過去の調査結果から、同一丘陵上では北山城跡第２次付近が弥生時代後期から古墳時代初頭の中心地と推定されるため、第12次調査区は当該期集落の外れに位置するものの時期は、八王子古宮式から山中式にかけてと、最も古い事が特筆される。ＳＢ1643に関しては少なくとも現時点において両遺跡全体でこの１棟しか確認されていない構造であるため、祭りや集会などに使用される特別な性格を有する建物であった可能性がある。ただし、棟持柱付建物の性格については神殿、集会施設、倉などに議論が分かれる。

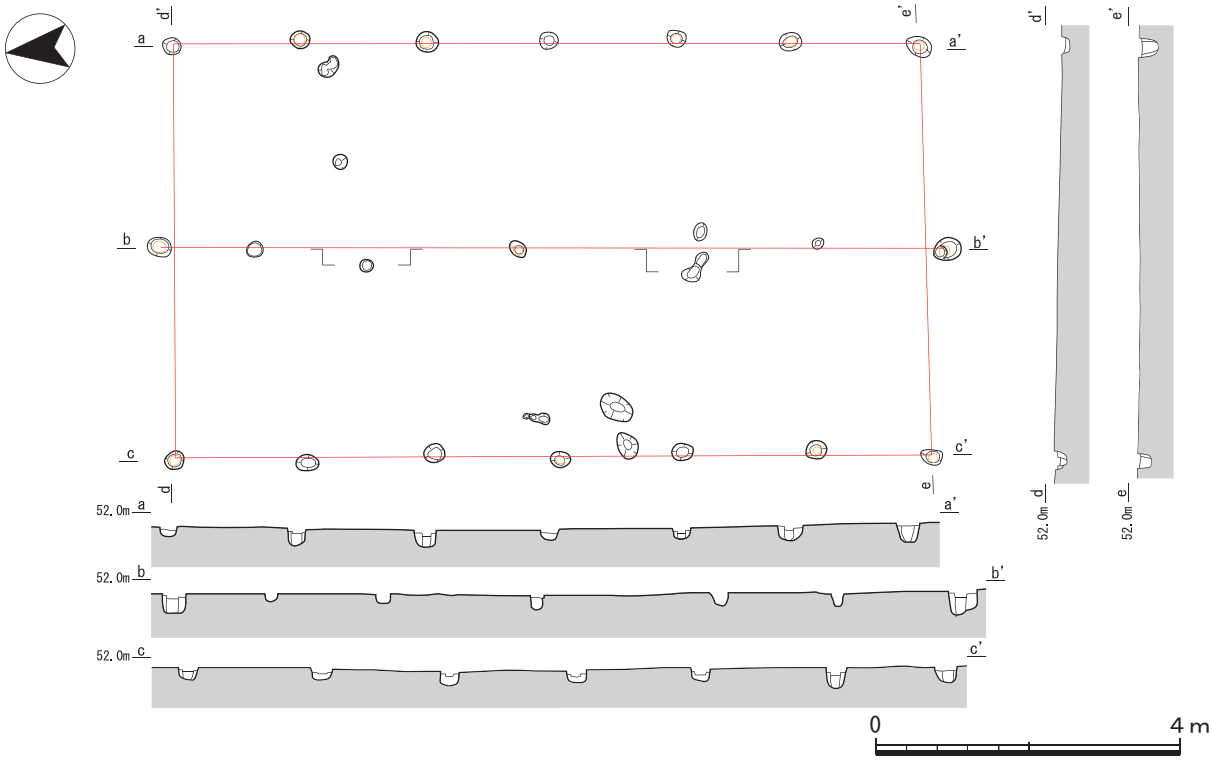


図28　ＳＢ1643平面図・断面図（1：100）

（３）古墳時代の遺構

竪穴住居　古墳時代後期の竪穴住居を１棟検出した。ＳＨ1606の規模は4.1m×4.0m、南東隅に貯蔵穴を有し、西側壁面にカマドを有する。貯蔵穴から土師器甕が出土した。

（４）古代（飛鳥～奈良時代）の遺構

竪穴住居　今回の調査で29棟確認した。竪穴住居は縄文時代や弥生時代を含め、その多くを調査区西側で検出した。支柱石を有する住居は11棟で、その大半は西側で検出した。これは、西側が土砂流出の影響が少なかった事に起因すると思われる。カマドの位置は、北もしくは東方向のものが29棟中18棟を占める。

ＳＨ1631の規模は5.8m×5.4mで、カマドの袖は良好な状態で残存していたが、支柱石は残っていなかった。ＳＨ1648の規模は7.5m×7.4mで、カマド埋土内から支柱石が転倒した状態で出土し、袖は良好な状態で残存していた。ＳＨ1648とＳＨ1649は大半が重複しており、前後関係はカマドの位置関係からＳＨ1648→ＳＨ1649である。

ＳＨ1650の規模は4.6m×5.0mで、東壁にはカマドと支柱石が残存していた。貼床の下で直径約2.8mの貼床下土坑を検出した。北壁中央付近の床面に焼土面がある点、それぞれに伴う貯蔵穴がある点から、当初北壁面にあったカマドを東壁面に付け替えたことがわかる。

掘立柱建物　調査区西側と、隣接する第９次調査区、第５次調査区の建物群はおおよそ同一の方位であり、同時期に建っていた事が推測される。

種別は総柱建物と側柱建物の２種類に大別される。まず総柱建物は３間×３間、３間×２間、２間×２間があり、３間×３間のものはＳＢ1636の１棟だけである。規模が東西4.8m×南北3.6mで、柱穴は隅丸方形で一部布堀状になっている。３間×２間はＳＢ1632のみである。２間×２間の総柱建物はＳＢ1619・ＳＢ1611・ＳＢ1620・ＳＢ1638、の４棟が確認出来た。

側柱建物は３間×４間、３間×６間、２間×４間などがある。３間×４間ではＳＢ1691・ＳＢ1697があり、それぞれ規模はＳＢ1691が7.6m×4.9mで、ＳＢ1697が6.9m×4.9mであり、この２棟は南北の一辺で接するように検出された。２棟は規模、棟方向ともにほぼ同格でＳＢ1691をＳＢ1697が重複して建てられているので移築の可能性もある。ＳＢ1604は東西11.4m×南北６ｍで、３間×６間の側柱建物である。２間×３間の側柱建物はＳＢ1618・ＳＢ1665の２棟を検出した。これらの建物は東西軸柱間のうち、柱間の中央一間分が広いという特徴がある。同様の例が中野山遺跡第７次調査南区、筆ヶ崎古墳群第５次調査でそれぞれ１棟ずつ確認されている。

写真74　ＳＨ1631（南から）

写真75　ＳＨ1648・1649（南から）

写真76　ＳＨ1650（西から）

遺構名	平面形	規模（m）		カマド
		東西	南北	
SH1607	方形	4.1	4.1	東
SH1617	方形	4.6	4.4	西
SH1624	方形	4.5	4.4	東
SH1628	方形	6.6	6.1	東
SH1631	方形	5.8	5.4	北
SH1648	方形	7.5	7.4	北
SH1649	方形	6.6	5.9	北
SH1650	方形	5.0	4.6	東
SH1651	方形	5.7	5	無
SH1652	方形	4.4	4.2	東
SH1659	方形	5.0	5.0	北
SH1660	方形	7.2	5.4	無
SH1662	方形	7.3	7.8	無
SH1663	方形	4.7	4.7	北
SH1664	方形	5.2	4.9	東
SH1672	方形	5.4	4.7	西
SH1675	方形	5.8	5.8	北
SH1676	方形	4.6	4.6	東
SH1678	方形	6.5	6.5	西
SH1681	方形	4.8	3.7	無
SH1682	方形	5.0	4.6	南
SH1684	方形	5.7	3.9	北
SH1685	方形	6.2	6.2	東
SH1688	方形	6.0	6.0	東
SH1689	方形	6.2	6.2	無
SH1690	方形	5.5	5.3	無
SH1694	方形	5.1	4.4	北
SH1696	方形	4.7	4.7	北

表10　古代の竪穴住居一覧

写真77　ＳＨ1650カマド（西から）

写真78　総柱建物ＳＢ1636（南から）

写真79　ＳＢ1604（東から）

写真80　ＳＢ1618（東から）

写真81　ＳＢ1637（西から）

写真82　南：ＳＢ1691、北：ＳＢ1697（南から）

遺構名	建物種別	規模(m)	間数	建物主軸	方位
SB1604	側柱	11.4×6.0	3×6	EW	N25° E
SB1611	総柱	2.6×2.6	2×2	EW	N25° E
SB1612	側柱	7.5×4.4	2×6	EW	N11° E
SB1613	側柱	8.7×6.1	2×6	EW	N30° E
SB1614	側柱	7.3×6.0	3×4	NS	N30° E
SB1618	側柱	5.3×3.5	2×3	EW	N2° E
SB1619	総柱	4.3×3.7	2×2	EW	N3° E
SB1620	総柱	4.1×3.7	2×2	EW	N30° E
SB1621	側柱	6.5×4.1	2×4	EW	N30° E
SB1626	側柱	7.4×5.3	3×4	EW	N20° E
SB1627	側柱	6.6×4.8	3×2	NS	N20° E
SB1632	側柱	5.2×4.5	3×2	EW	N25° E
SB1636	総柱	4.8×3.8	3×3	NS	N35° E
SB1637	側柱	7.5×4.3	2×4	EW	N25° E
SB1638	総柱	3.3×2.6	2×2	NS	N16° W
SB1642	側柱	7.0×5.2	2×4	EW	N10° W
SB1665	側柱	5.5×3.8	2×3	EW	N26° E
SB1666	側柱	5.0×3.8	2×2	EW	N26° E
SB1667	側柱	6.3×5.7	3×4	EW	N18° E
SB1691	側柱	7.6×4.9	3×4	EW	N48° E
SB1697	側柱	6.9×4.9	3×4	EW	N48° E
SB1698	側柱	／	／	NS	／

表11　古代の掘立柱建物一覧

３．出土遺物

石匙・石鏃　遺構には伴わないが、石匙３点・石鏃３点が出土した。形状から、時期は縄文時代中期と考えられる。

紡錘車　弥生時代後期と考えられるＳＨ1647の埋土から、古墳時代後期の滑石製紡錘車が出土した。紡錘車の下部は欠損しているが、截頭円錐形を呈し、上面はわずかに放射線状の線刻がみられる。

赤色顔料の付着した須恵器群　須恵器の杯身・杯蓋の外面に、赤色顔料が認められる一群で、大きく「×」印を記したものが主体であるが、「○」印や印が判別できないものも含まれる（図29）。今回の調査ではＳＫ1601から７点、ＳＨ1624から１点の計８点が出土した。蛍光Ｘ線分析の結果、ベンガラで着色されていることが分かった。時期はすべて陶邑編年[4]のＴＫ209型式併行期におさまるもので、６世紀末頃に製作され、廃棄されたと推測される。なお、ＳＫ1601では鞴羽口が出土し、ＳＨ1624では鉄滓とともに出土している事が特筆される。

同じような須恵器は、隣接する中野山遺跡第７次調査区の焼失住居から陶邑編年ＴＫ10型式併行期の杯１点が出土しており、時期は古墳時代後期と推定される。県内では津市安濃町の小屋城古墳群[5]や、同じく津市白山町のガガフタ古墳群[6]で確認されている。鳥取・兵庫・大阪など西日本から出土例があり、鳥取県名和飛田遺跡では鉄製品とともに出土する例が多いため鍛冶集団に由来する土器と指摘される。[7]

なお、第12次調査出土のうち１点は、顔料になる着色だけでなく、ヘラ記号で「×」の記号が刻まれた須恵器杯（図29－８）がある。先に触れたガガフタ古墳でも同様のものが出土しており、このことは、これら土器の性格を考える上で重要であろう。

４．まとめ

今回の調査では、縄文時代は土坑20基、集石土坑１基、竪穴住居２棟検出した。弥生時代は中期の土坑２基、後期の竪穴住居８棟、掘立柱建物１棟を検出した。古代では土坑17基、竪穴住居29棟、掘立柱建物22棟を検出した。

古代の場合、竪穴住居は調査区西側で多く検出され、一方掘立柱建物は東側で多く検出されており、明確といえるほど棲み分けがなされていたことがわかる。このことは丘陵の土地利用を考えるうえで重要となるであろう。

さらにベンガラで「×」印を付けた須恵器は、丘陵上の集落の性格を考えるうえでかかせないものである。第12次調査の遺構・遺物が当該地域の具体像を考証するうえで重要な手がかりとなることを期待したい。

［註］

① 埋蔵文化財協会『弥生時代の掘立柱建物―資料　西日本・本州編』1991

② 三重県埋蔵文化財センター『村竹コノ遺跡発掘調査報告』2009

③ 三重県埋蔵文化財センター『菟上遺跡発掘調査報告』2005

④ 田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981

⑤ 三重県埋蔵文化財センター『小屋城古墳群―安芸郡安濃町南神山―』1994

⑥ 三重県埋蔵文化財センター「三重県一志郡白山町ガガフタ古墳群発掘調査報告」『研究紀要』第5号 1996

⑦ 財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター『鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター104一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ｘ　名和飛田遺跡』2005

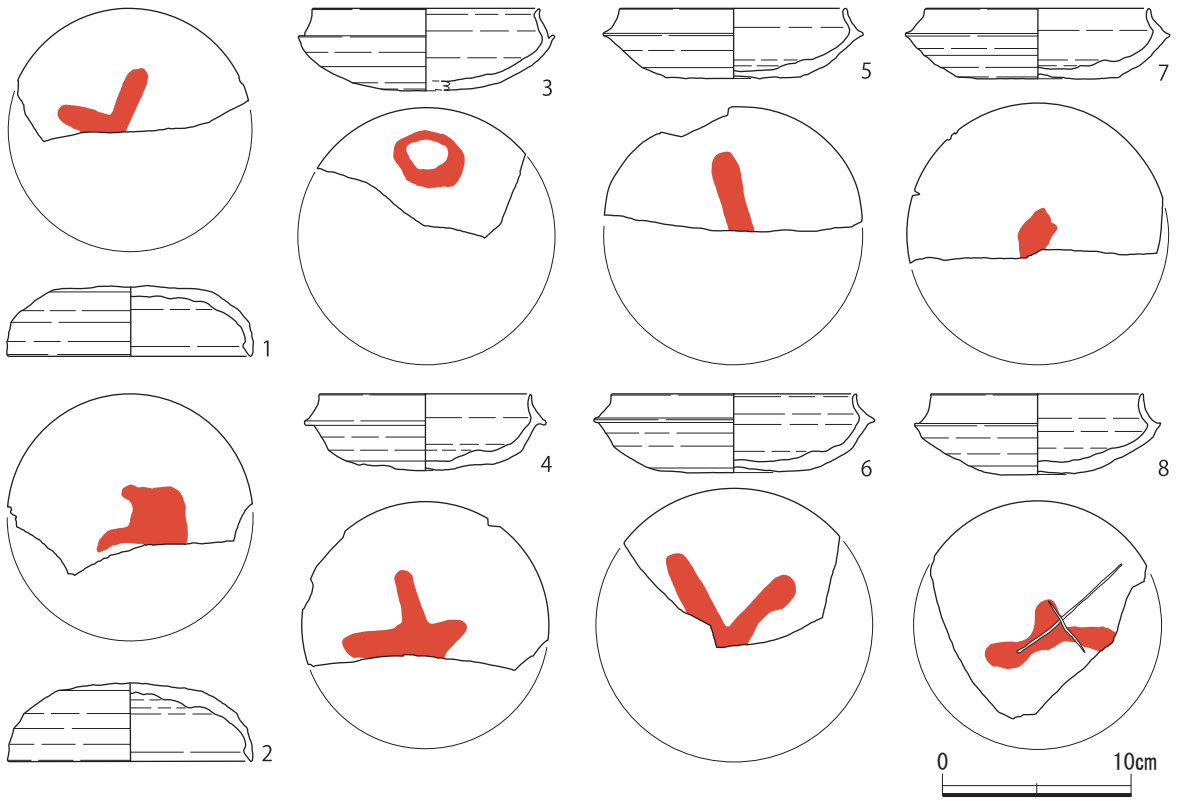


図29　赤彩顔料が認められる須恵器（１：４）　８はＳＨ1624、その他ＳＫ1601出土資料

9　筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡（第６次）

１．はじめに

筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡は、四日市市小牧町字筆ヶ先に所在する。遺跡は朝明川と員弁川にはさまれた台地および南面する緩斜面に位置する。筆ヶ崎古墳群は10基で構成される古墳群で、筆ヶ崎西遺跡は古墳群の周辺に広がる集落遺跡である。平成23年度に750㎡、平成24年度に9,100㎡の範囲を対象に調査を行った。調査が墳丘の一部にとどまった８号墳を除くと、いずれも横穴式石室を埋葬施設に採用した古墳で、出土品から６世紀末～７世紀中葉に築造されたことが明らかになった。集落については、古墳群より南側の斜面を対象とした調査において、竪穴住居48棟、掘立柱建物23棟などを確認した。集落は飛鳥時代から奈良時代にかけて営まれたと考えられる。筆ヶ崎西遺跡では鍛冶炉２基が検出されたほか[①]、複数の遺構で鉄滓が確認されており、鍛冶に携わった人々の居住が明らかになった点が特筆すべき特徴である。

２．遺構

今年度の調査は、古墳群よりも北側、すなわち台地の平坦地を対象として5,300㎡の範囲を調査した。その結果、調査区の北側において南北方向主軸の溝36条を確認した。形状から耕作あるいはそれに関連する溝と考えられる。時期を示す明確な遺物は認められなかったが、近・現代の溝と考えられる。この溝よりも古い遺構として、飛鳥時代から奈良時代の竪穴住居６棟、掘立柱建物１棟などを確認した。この付近は、調査区南側と比べて遺構密度が高くないことから、集落の北縁部と想定される。

調査区南側では竪穴住居28棟、掘立柱建物12棟などを検出した。これらは、ほとんどが飛鳥時代から奈良時代の遺構と考えられる。

（１）竪穴住居

竪穴住居は方形を呈し、一辺は３～６ｍの大きさである。竪穴住居の北壁あるいは東壁にカマドを付設する場合が多い。カマドの構築については、壁周

写真83　空からみた筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡（南東から）

溝を掘削後にカマド付設という手順が、ＳＨ132・ＳＨ219で確認できた。竪穴住居の多くから土師器・須恵器が出土しており、これらから飛鳥時代から奈良時代の遺構と考えられる。

（２）掘立柱建物

掘立柱建物は側柱建物６棟、総柱建物６棟を確認した。側柱建物は３間×２間、総柱建物は２間×２間が多く、柱間寸法は1.6～2.0mを主体とする。なお、桁行と梁行で柱間寸法の異なる建物があり、ＳＢ305は桁行３間×梁行３間の東西棟建物で、柱間寸法は桁行1.8～1.9m、梁行1.3～1.4mと、梁行において柱間寸法が通常よりも短い。竪穴住居との関係は、ＳＨ213→ＳＢ305の新古関係にある。

掘立柱建物の時期は、いずれも飛鳥時代から奈良時代と考えられる。なお、掘立柱建物ＳＢ307付近において糸切り痕を有する須恵器の無台椀１点が出土している。無台椀の時期は、奈良時代後半から平安時代前葉と考えられる。ＳＢ307の掘方形状がやや方形を呈し、他と異なることも考慮すれば、時期的にやや新しい建物の可能性がある。ＳＢ307については、奈良時代後半から平安時代前葉となる可能性を考慮しておきたい。なお、筆ヶ崎西遺跡でこの時期にさしかかる可能性がある建物は、ＳＢ307のみである。

３．出土遺物

遺物として、飛鳥時代から奈良時代の須恵器・土師器が多数出土した。このほか、大型砥石１点、不明鉄製品１点などが出土したものの、鉄滓は出土しなかった。この点から、平坦地では鍛冶に関わる行為が低調で、南側斜面で盛んに行っていた可能性がある。冬の強い季節風を考慮すれば、火災とそれによる集落中心部への延焼防止などを配慮した結果、集落の南側に偏在した可能性があろう。

このほか、縄文時代早期の尖頭器１点、奈良時代後半から平安時代前葉の須恵器の無台椀１点、奈良時代から平安時代の可能性をもつ黒色土器１点、時期不明の須恵質の土錘１点が出土した。

（１）尖頭器

飛鳥時代から奈良時代の竪穴住居ＳＨ218の埋土に混入して縄文時代早期の尖頭器１点が出土した。尖頭器は先端が欠損しており、残存長3.0㎝、幅1.4㎝、厚さ0.7㎝の大きさである。基部の両側には抉り状の剥離が認められる。田部剛士氏による分類の

写真84　竪穴住居ＳＨ219

写真85　掘立柱建物ＳＢ313

写真86　尖頭器

写真87　須恵質の土錘

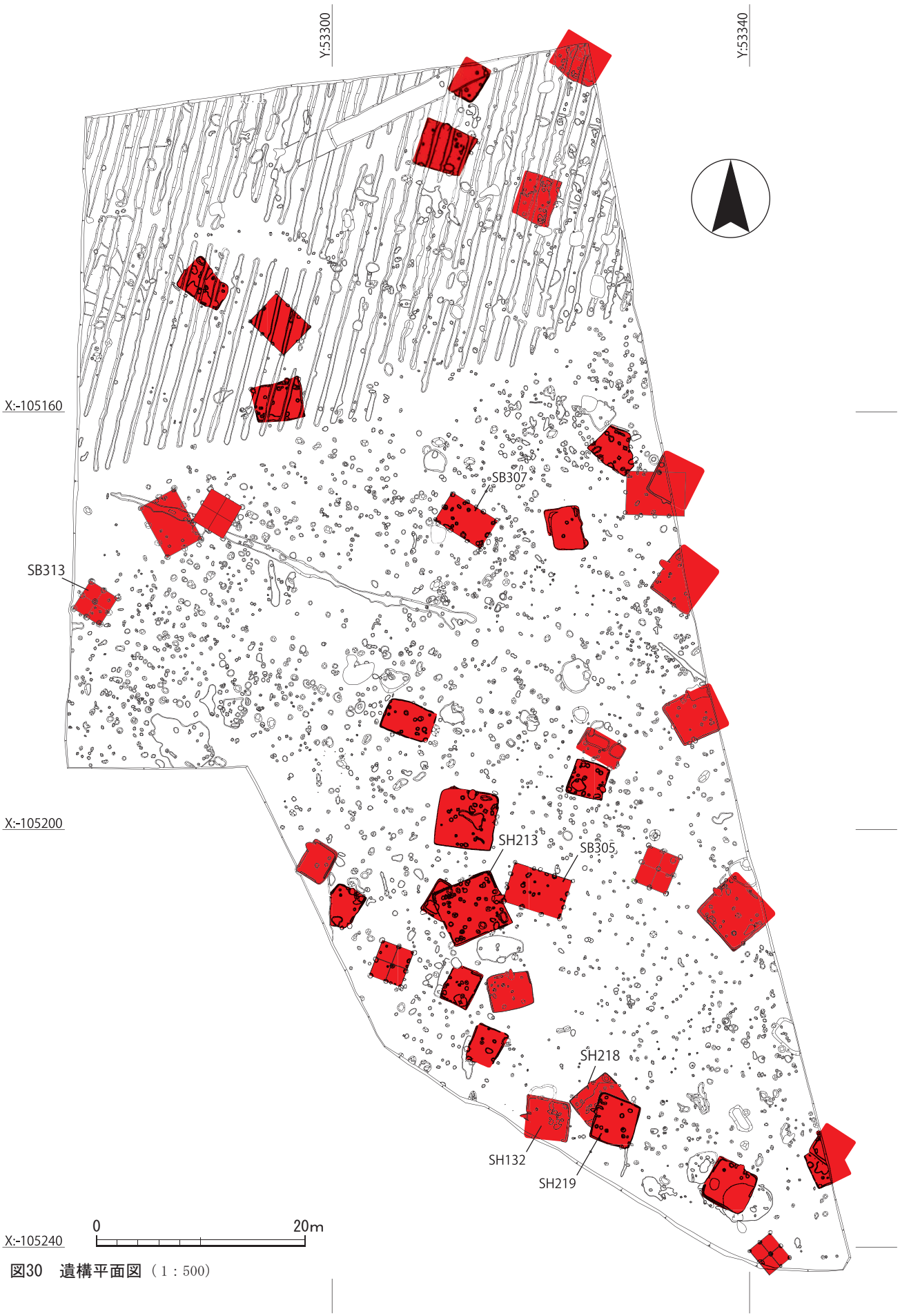


図30　遺構平面図（1：500）

写真88　筆ヶ崎西遺跡（南東から）

３a類に相当し、押型文土器の前半期にみられるという②。材質はサヌカイトと考えられる。

筆ヶ崎西遺跡において縄文時代早期の遺物が初めて確認された。遺構は確認できなかったが、今後、縄文時代についても注視していく必要があろう。

（２）大型砥石

ＳＨ219より大型の砥石１点が出土した。残存長24cm、最大幅17cm、厚さ10cmで、ほぼ半分が欠損している。使用面は２面で、長軸に沿った使用痕がそれぞれの面に観察できる。材質は不明だが、角の取れた形状から川原の転石などを利用した可能性が考えられる。ＳＨ219は飛鳥時代から奈良時代の竪穴住居であることから、当該期の鉄器加工に携わっていた証左となろう。

（３）須恵質の土錘

調査区中央付近の小穴より出土した。長さ6.3cm、長径2.6cm、孔の直径0.5～0.7cmの大きさである。この土錘は、須恵質であることから、窖窯で焼成されたと判断できる。当遺跡が須恵器生産に関わっていたとする手がかりは得られていないことから、集落外からもたらされたと考えておきたい。

４．まとめ

隣接する東海環状自動車道での調査も含めると、筆ヶ崎西遺跡では竪穴住居108棟、掘立柱建物43棟を確認したことになる。平安時代前葉にさしかかる可能性をもつ掘立柱建物ＳＢ307を除けば、いずれも飛鳥時代から奈良時代の建物と考えられる。

これまでの調査において、南側の斜面に立地する竪穴住居ＳＨ２で鍛冶炉２基が確認されたほか、複数の遺構で鉄滓が出土した。これらの点から、筆ヶ崎西遺跡では鍛冶を盛んに行っていたと評価できる。しかし、平坦地を対象とした今年度の調査では、大型砥石が出土したものの、鉄滓は出土しなかった。南側斜面での鉄滓出土と対照的である。平坦地と斜面において機能的な使い分けがなされていた可能性もあろう。この点は今後の検討課題といえる。

近隣の遺跡では中野山遺跡・北山Ａ遺跡・西山遺跡などでも、鉄滓・フイゴ羽口など鍛冶関連遺物が確認されている③。したがって、筆ヶ崎西遺跡およびその近隣の集落遺跡を含めた一帯で、鍛冶を盛んに行っていたといえる。これらの遺跡を総合的にとらえた評価が今後の課題となろう。

［註］

① 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』2012
三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』2013

② 田部剛士「鵜山遺跡出土石器における製作技術」『鵜山遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第96冊　奈良県立橿原考古学研究所　2006
田部剛士「押型文前半期における石器の様相」『押型文土器期の諸相』関西縄文文化研究会　2011

③ 大川操「金属生産・加工の足跡」『Mie History』vol.20 三重歴史文化研究会　2009
東員町教育委員会『西山遺跡・新野遺跡』1976
三重県教育委員会『新野遺跡発掘調査報告』1972
四日市市『四日市市史』第３巻史料編考古Ⅱ　1993

10　北山城跡（第３次）

１．はじめに

北山城は朝明川左岸の台地西端に位置する城館である。朝明川流域には桑名と近江を結ぶ主要街道である八風街道が通り、中世後期には街道沿いの丘陵部には伊坂城や市場城といった城館が点在している。同時代の文献や資料には北山城に関する記載はないものの、市場城等との縄張りの類似性や立地などから、中世後期の城館と考えられている[①]。

平成24年度に行われた第２次調査では、平坦面および斜面において、弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居および奈良時代の掘立柱建物、平安時代の土坑などを確認している。第３次調査は第２次調査の北側にあたり、台地西端の平坦面から斜面にかけて調査を行った。調査範囲には、北山城主郭南西部の一部および居林１号墳の南端を含んでいる。

２．遺構

（１）弥生時代後期の遺構

竪穴住居を21棟（調査区西端の平坦面で２棟、北側の平坦面で２棟、斜面で12棟、谷を挟んだ調査区東側の平坦面で５棟）確認した。

ＳＨ314　調査区西端の平坦面で確認された竪穴住居である。規模は、東西3.8m、南北2.0m以上の方形を呈する。南西部は調査区外で一部が大木により攪乱されているため完掘できなかったが、主柱穴と壁周溝を確認した。

ＳＨ303　北側の平坦面で確認した竪穴住居である。規模は、東西5.2m、南北2.0m以上の方形を呈する。北半分は調査区外であるが、南半分からは主柱穴と壁周溝、南壁中央で貯蔵穴、中央では屋内炉と思われる側壁が焼けた土坑を確認した。

写真89　調査区全景（西から）

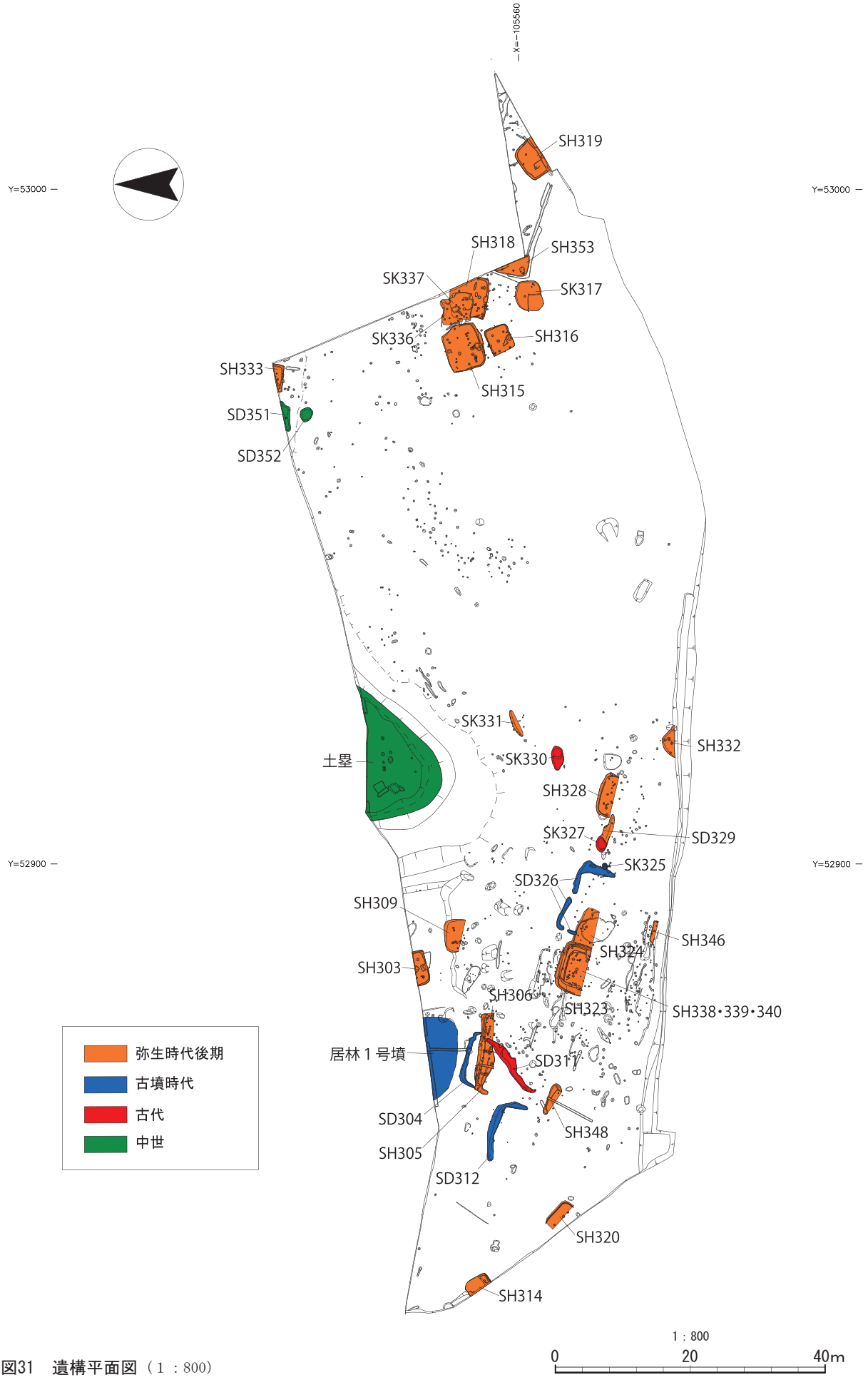


図31　遺構平面図（1：800）

ＳＨ323（写真90）　標高34ｍ～36ｍの斜面で帯状に並んで確認された12棟の竪穴住居の一つである。この竪穴住居では壁周溝が３棟分（ＳＨ338・339・340）重なって見つかっており、それらの壁周溝を粘土で埋めて、さらに竪穴住居が造られていることが確認されたことから、同一地点で３回以上の建て替えがあったものと思われる。このことから斜面の竪穴住居は一時的なものではなく一定期間存在したものと考えられる。南半分は斜面のため流失しており確認できなかった。

ＳＨ315（写真91）　谷を挟んだ調査区東側の平坦面で確認された竪穴住居である。規模は、東西7.0ｍ、南北5.6ｍの長方形を呈する。北面と東面は削平されているため、壁周溝は一部不明である。

（２）居林１号墳

居林古墳群は、四日市市[2]によると、西側400ｍには門ノ上古墳群、北東500ｍには筆ヶ崎古墳群が位置しており、この地域ではもっとも南側に張り出した丘陵の上に築かれた古墳である。古墳は２基あり、１号墳は直径12ｍ、高さ１ｍ、２号墳は直径８ｍ、高さ0.8ｍと小形である。

今回の調査では、居林１号墳の南端の発掘を行った。調査の結果、周溝と考えられる遺構は確認できなかったが、斜面のためすでに削平または流失している可能性がある。また、主体部は調査区外にあり、調査をしていないため、今回の調査では古墳と確定できるような遺構は確認できなかった。しかし、居林１号墳の周辺で、Ｌ字状に屈曲する古墳の周溝である可能性があるＳＤ304・312・326を確認することができた。

写真90　ＳＨ323（東から）

写真92　居林１号墳・ＳＤ312（南から）

写真91　ＳＨ315（西から）

写真93　ＳＤ304（北から）

（３）北山城跡

調査の結果、地山と考えていた黄色砂質土の下に、黒色土（旧表土または包含層）がもぐりこんでいることが明らかとなり、盛土であることが確認できた。上面では柵の可能性のある柱穴と方形の土坑を確認した。

調査終了後、重機による断ち割り作業を行い、断面および下層の調査を行った。その結果、平坦面南端は幅10cm程度の黒色土と礫層が交互に積み重ねられていることが確認できた。本来緩やかに北から南に傾斜する地形を盛土により平坦にして主郭の平坦面を拡張したものと考えられる。出土遺物はなく時期は不明である。

３．まとめ

今回の調査では、弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居を平坦面のみでなく、斜面からも確認した。斜面にある竪穴住居には、建物内の溝が３条重なっているものがあることから、同じ場所で建て替えられ、斜面も居住する場所として継続的に利用されていることが確認された。

居林１号墳の周溝は確認することはできなかったが、周辺の遺構から古墳の周溝の可能性がある溝を確認することができた。

北山城主郭南西部の高まりは、以前から北山城の土塁と考えられていたが、調査の結果、土が盛られていることが明らかとなり、土塁であることを確定することができた。

［註］

① 高田徹「織豊期における北勢四郡の城館」『中世城郭研究』８号　中世城郭研究会 1994

② 四日市市『四日市市史第二巻』 昭和63年３月31日

写真94　土塁（西から）

写真95　土塁（南から）

写真96　調査区西部（南から）

写真97　調査区東部（南から）

11　小牧南遺跡（第２次）

１．はじめに

小牧南遺跡は、四日市市小牧町風呂屋、朝明川右岸の垂坂丘陵と共に朝明川低地と並行する菰野台地裾部の標高30m付近に所在する。遺跡北側には朝明川低地と菰野台地を区切る崖状地形が東西に展開し、台地上と低地の比高差は１m程である（写真98）[①]。

当遺跡の位置する朝明川中流域では、両岸の段丘あるいは台地上に数多くの遺跡が展開している。特に左岸では中野山遺跡をはじめとした、昨今の新名神高速道路の建設に伴い、大規模な発掘調査が進んでいる[②]。

対して右岸は、左岸と比較すると遺跡の概要が把握できているとは言えない現状にある。右岸中流域で発掘調査がなされている遺跡は、道具林古墳や真造寺遺跡[③]、公事出古墳群、公事出遺跡[④]などに限定されており、かつ面積も小規模である。またこれらの遺跡は、古墳時代後期以降に偏りがみられ、それ以前の集落の変遷は不明瞭である。ただしこの地域では、過去に鈴木敏雄氏によって大字南小牧より筒形銅器１点が古墳より出土したことが明らかにされており[⑤]、さらに小型内行花文鏡１面も採集されている[⑥]。両遺物とも古墳後期より遡るものと考えられ、こうした希少な遺物が副葬されるような古墳、あるいは所有できるような集落が存在したと考えられる。

そうした中、小牧南遺跡は平成23～24年度に確認調査が行われ、縄文中期の埋設土器や古墳前期の集落、古墳後期の集落の存在を確認していた。そして平成25年度は、合計で7,371㎡の発掘調査を平成25年５月28日～平成26年２月６日の調査期間で実施し、成果として縄文中期後葉～末葉の集落、弥生終末期～古墳前期後葉の集落、古墳後期～飛鳥の集落、中世の土坑など、当初想定していた以上の成果を得ることができた。

写真98　調査区全景（南西より）

２．縄文中期の遺構

竪穴住居５棟、掘立柱建物５棟、集石炉１基、土坑８基などを確認した。

（１）竪穴住居（図32・写真99）

調査以前は畑地であったこともあり、住居壁の残存深度高に大きく差がみられた。ＳＨ248はその中でももっとも深く住居壁が残存する住居である。

ＳＨ248の平面は長軸3.4ｍ、短軸3.2ｍの円形に近い隅丸方形プランを呈しており、住居壁の高さは0.5ｍほど残る。床面には周壁溝と接するように、四隅に主柱穴がみられ、壁面に沿って0.1～0.3ｍほどの深さで周壁溝が廻る。さらに床面中央よりやや北側には炉跡を確認した。

その他の竪穴住居（ＳＨ147・184・191・193）は壁高がいずれも0.1ｍ以下のもので、明瞭に住居壁と認識できるものはなかった。しかし、いずれも主柱穴に加え、炉跡あるいは周壁溝などを認められたことから竪穴住居とした。

（２）炉（図32・写真102）

屋内の炉跡はＳＨ248のように土坑に焼土が伴うもの[7]（ＳＨ191・193）の他、石囲炉（ＳＨ185）や埋甕炉（ＳＨ147・写真102）を確認した。また屋外に集石炉（ＳＦ259）１基を確認した。

土坑炉（ＳＨ191・248）は、土坑底面に縄文土器が敷き詰められており、あたかも土器敷き炉の様相を呈していた。しかし、土器に２次被熱の痕跡は認められなかったため、住居廃絶時に土器片を敷き詰めることで、炉の封鎖を行ったものと考えられる。類似する状況は、ＳＨ147内の埋甕炉においても確認でき、こちらは埋甕体部径よりもやや小型の石が内部に充填されていた。

石囲炉を除けば、いずれの炉も焼土の痕跡が不明瞭であり[8]、炉跡としても長期間の使用を想定することはできない。

（３）掘立柱建物（図32・写真100）

県内における縄文時代の掘立柱建物は、松阪市王子広遺跡で後期のものが、鈴鹿市平田遺跡で晩期のもの[9]が確認されているが、中期まで遡る掘立柱建物はこれまでに県内では確認されていない。

今回確認した５棟の内訳は、柱の構成から以下の３タイプに分けられる[10]。

α．妻側３本×桁側４本のものが２棟
　ＳＢ276（写真100）・285

β．妻側３本×桁側３本のものが１棟
　ＳＢ280

γ．妻側２本×桁側３本のものが１棟
　（妻側２本×桁側２本以上のものが１棟）[11]
　ＳＢ287・（ＳＢ292）

妻側の全長は、いずれのタイプも３～４ｍとなる。

写真99　ＳＨ248（北から）

写真100　ＳＢ276（南東から）

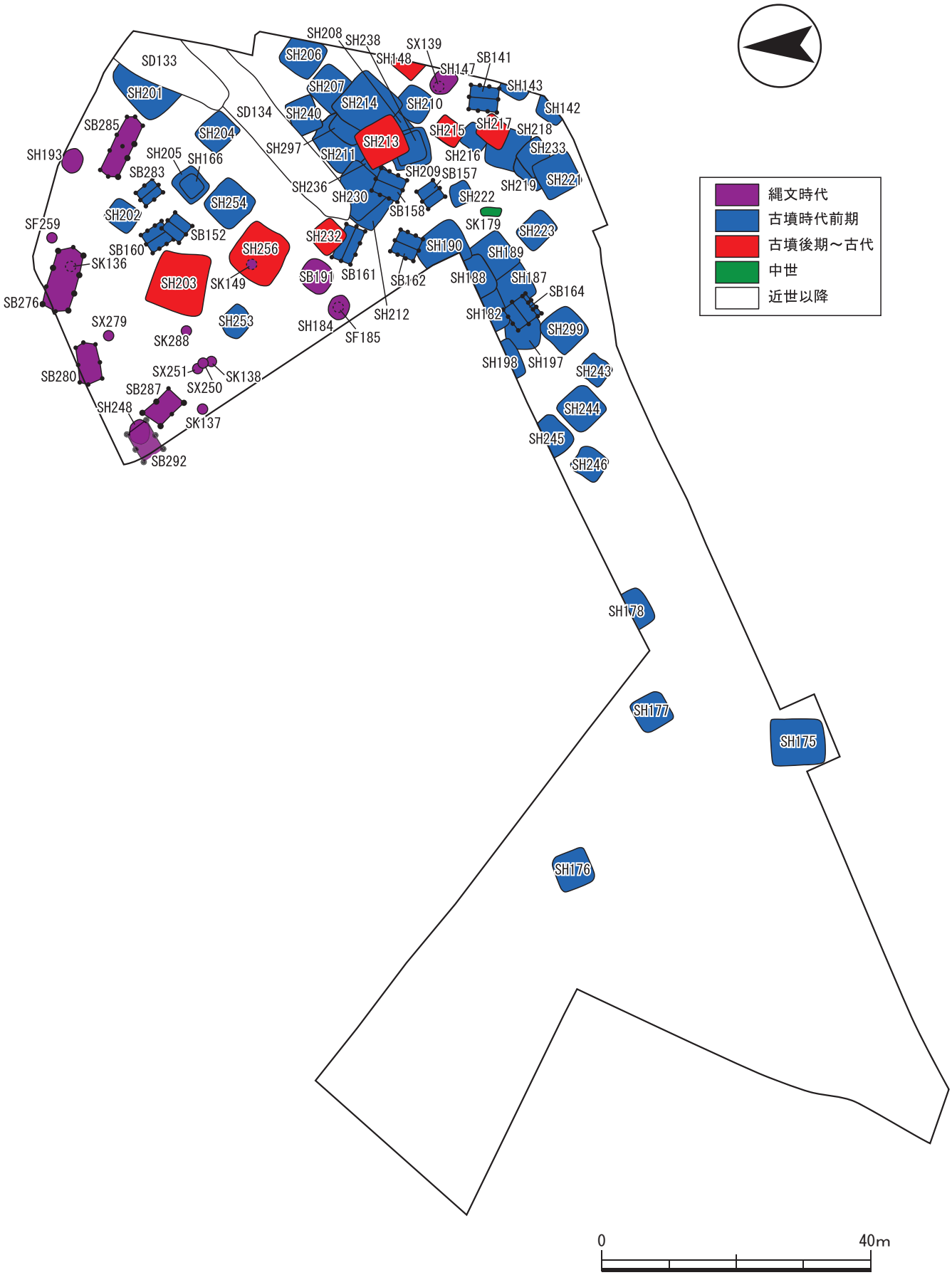


図32　遺構配置図（1：800）※弥生終末期～古墳前期については、今後詳細に検討する。

桁側の全長は、αが10m前後、β・γが６m前後である。桁側の柱間寸法も３～４mのものが多く、北勢地方の弥生時代以降の掘立柱建物には認められない特徴[12]を有する。また柱穴からの出土遺物は、縄文土器や石器、剥片などに限られたため、現状では土器の示す時期の縄文時代中期後葉～末葉に位置づけている。

（４）埋設土器・その他の遺構（図32・33）

屋外のものを合計で３基（ＳＸ250・ＳＸ251・ＳＸ279）確認した。そのうちのＳＸ250内部より垂飾が１点出土した（図33）。垂飾は深鉢の見込面直上より出土しており、ＳＸ250に伴っていたことは疑いない。

その他の遺構として、ＳＫ149は土坑底面より中期後葉～末葉の深鉢が横倒しの状態で出土した。その他、中期後葉～末葉の土器片が出土した径0.8～1.2m程の土坑が数基みられ、土坑墓もしくは貯蔵穴と考えられる。

（５）集落範囲（図32）

調査区の北東側に遺構が集中しており、南側で確実な縄文時代の遺構はＳＨ147に限られる。ただし、南東側においても包含層や古墳時代の竪穴住居貼床土などから縄文土器や石器が出土しており、南東側にもある程度の遺構が展開していたと想定される。なお、遺構密度の少ない西側では、縄文時代の遺物は全く出土しなかった。

写真101　ＳＨ191縄文土器出土状況（南から）

写真102　ＳＨ146内埋甕炉（南西から）

３．弥生終末期以降の遺構

弥生終末期～古墳前期の竪穴住居45棟、掘立柱建物９棟を確認した。その他、当該期と考えられる土坑を数基確認したが、時期の不明瞭なものも含まれる。

（１）竪穴住居（図32）

平面形はいずれも隅丸方形で、最小のものは長軸3.3m、最大ものは長軸8.8mであるが、全体の傾向としては５m前後のものが多い。

大多数が４本の主柱穴や周壁溝、地床炉、貯蔵穴を有しており、一辺７m以上のものには壁柱穴を有するもの（ＳＨ201・ＳＨ214など）もみられた。主柱穴・周壁溝・貯蔵穴を有さないものは、４m以下の小型のもの（ＳＨ253・ＳＨ222・ＳＨ243など）であった。

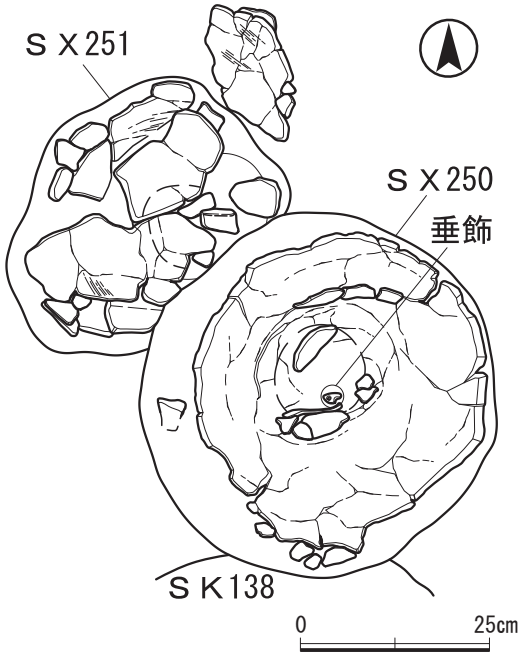


図33　ＳＸ250・ＳＸ251出土状況（1：10）

床面の構造としては、貼床を施すものが多く、約半数以上でみられた。壁際にドーナツ状の掘方が廻り、中央部のベース面が僅かに硬化している。そして、掘方にベース土と黒色土を混合させたものを敷き固めているものが多くみられた。貼床に使用された混合土は、竪穴掘削時の廃土を転用したものと考えられ、縄文土器を含んでいるものもみられた。

（２）掘立柱建物（図32）

時期は柱穴から弥生終末期～古墳前期の土器が出土していることによる。ただし、全ての掘立柱建物の柱穴より土師器が出土しているわけではなく、より詳細な検討が必要である。

いずれも側柱建物で、２間×３間のものが６棟（ＳＢ161・ＳＢ141など）、２間×２間のものが１棟（ＳＢ283）、１間×２間（ＳＢ152・ＳＢ157）のものが２棟である。ＳＢ164は１面に庇状の柱列が付随するものの、側柱との間隔は0.4mほどであり、柵列とも考えられる。

（３）古墳時代前期の集落範囲（図32）

調査区東側に偏りがみられ、西側との密度差は明瞭である。特にＳＤ134周辺では10数棟が密集するように切り合っており、これより西、北方向では少しずつ密度が低くなる。こうした分布傾向を示す理由として、台地の地形や地質が関係しているものと考えられる。遺構の密度の高いＳＤ134の東側調査区外は谷地形が朝明川低地より入り込んでおり[13]、集落のある台地上と耕作地があったと推測される低地とを結ぶ通路としてこの谷状地形が機能していたと考えられる。また調査区東側のベース面はシルト質であり掘削も容易であるが、西側ではベース面に拳大の礫が多く含まれることから、掘削は困難である。以上のことから集落の分布密度に顕著な差があらわれたと考えられる。

（４）古墳時代後期以降の遺構（図32）

古墳後期～終末期の竪穴住居７棟、中世の土坑を１基確認した。古墳後期～終末期の竪穴住居は東半分が調査区外であるＳＨ148以外の６棟はいずれも竈を有していた。ただし、ＳＨ232以外の竈はいずれも削平されており、支脚石や焼土塊の残存により、存在を確認したに過ぎない。

中世の遺構（ＳＫ179）は、ベース上に粘土小塊が部分的に敷かれていた。粘土の上面より山茶椀が出土したことにより、当該期の遺構であることが判明した。

４．出土遺物

（１）縄文時代の遺物（写真101・103）

縄文土器は東海地方の土器編年では概ね取組式～林ノ峰Ｇ層並行期の中期末葉の土器（写真101は島崎Ⅲ式）[14]が竪穴住居や掘立柱建物から出土している。また包含層及び遺構上層面より後期初頭～前葉の小片もわずかに出土しているが、当該期の遺構は確認できなかった。その他、埋設土器や土坑出土の土器も概ね中期末葉の土器が主体である。

縄文時代の石器は、埋設土器より出土した垂飾をはじめとして、打製石斧、磨製石斧（写真103）、石鏃、石錘、磨石、石皿、剥片で、剥片以外の出土点数は少ないものの多種にわたって出土している。石材はハイアロクラスタイトやチャートなど在地で産出するものの他に、黒曜石やサヌカイト、下呂石な

写真103　打製石斧・磨製石斧

写真104　古式土師器

ど、遠方にて産出するものもみられた。

（２）古墳時代前期の遺物（写真104）

竪穴住居や掘立柱建物より多数の土師器が出土している。尾張の土器編年でみると廻間Ⅰ式後半～松河戸Ⅱ式前半段階までの土器[15]があり、特に廻間Ⅱ式段階に出土数の偏りがみられた。

土師器以外の遺物として、砥石や鉄鏃なども数点であるが出土している。また床面より粘土塊の出土した竪穴住居が数棟でみられた。

（３）古墳時代後期以降の遺物

カマド付の住居からは須恵器や土師器が出土しており、概ね陶邑編年のＴＫ209～ＴＫ217段階[16]の須恵器が主体を占める。その他、ＳＨ213では長頸鏃１点が出土している。

中世以降は、ＳＫ179から山茶椀が出土し、ＳＤ134からは近世の陶器の擂鉢が出土している。

５．まとめ

今回の調査では、まず縄文中期後葉～末葉の集落跡を確認できたことが非常に大きな成果と言える。特に掘立柱建物を有する当該期の集落は、三重県の位置する近畿・東海地方では、岐阜県（関市塚原遺跡や各務原市炉畑遺跡など）・愛知県（岡崎市車塚遺跡[17]）で数例確認されているものの、その遺跡数は極めて限られている。加えて垂飾が出土した埋設土器や埋甕炉・石囲炉などを有する竪穴住居など、これまでの県内縄文中期集落の常識を覆す内容といっても過言ではなかろう。

続いて古墳前期の集落は、朝明川を挟んで左岸台地上に位置する北山城跡（弥生後期～古墳前期）で確認した集落と１㎞ほどしか離れておらず、当遺跡の集落との関わりが想定される。縄文時代も含め、今後の調査により集落規模の拡大は確実であり、さらなる成果が期待される。

［註］

① 四日市市『四日市市の土地分類』1992

② 三重県埋蔵文化財センター2010・2012・2013
『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

③ 四日市市遺跡調査会『真造寺遺跡・道具林古墳』2002

④ 四日市市教育委員会『公事出古墳群・公事出遺跡』1998

⑤ ただし古墳名や規模・形状などの正確な情報は明らかではなく、筒形銅器そのものの所在も現在は不明である。
鈴木敏雄『三重縣三重郡保々村考古誌考』1936

⑥ 現在は、四日市市立博物館にて展示されている。
四日市市『四日市市史』第二巻考古Ⅰ 1988

⑦ 以下、土坑炉と呼ぶ。

⑧ ベース面に強い被熱の痕跡はみられなかった。

⑨ 松阪市教育委員会『王子広遺跡発掘調査報告書』1990
鈴鹿市考古博物館『平田遺跡（第19・22次）』2013

⑩ 弥生時代以降の掘立柱建物と区別するために、下記論文にならい表記する。
石井寛「縄文時代掘立柱建物址に関する諸議論」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第６集　帝京大学山梨文化財研究所 1995

⑪ ＳＢ292は調査区外に続くため、正確な柱本数は不明である。

⑫ 三重県埋蔵文化財センター『莵上遺跡発掘調査報告』2005

⑬ 調査区東側には現在市道が通っているが、地元の方によると市道建設以前は深い谷状地形であったらしい。

⑭ 下記編年の４期～５期にあたる。
纐纈茂・高橋健太郎「中富式・神明式土器」『総覧縄文土器』小林達雄先生古稀記念企画 2008

⑮ 財団法人愛知県埋蔵文化財センター『廻間遺跡』1990
赤塚次郎・早野浩二「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第２号　財団法人愛知県埋蔵文化財センター 2001

⑯ 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

⑰ 愛知県岡崎市車塚遺跡で近年１棟確認された。川添和暁氏よりご教授いただいた。

12　釜垣内遺跡（第４次）

１．はじめに

釜垣内遺跡は、鈴鹿市小岐須町に所在する遺跡で、御幣川と鍋川に挟まれた扇状地に立地する。付近には小岐須城跡・小社遺跡などの中・近世の遺跡がある。平成24年度第２次調査では東地区と西地区の調査によって、鎌倉時代を中心とする集落が明らかとなった①。今年度は第２次調査区と接するようにして西区と東区を設けて3,200㎡の調査を行った。

２．遺構

（１）東区

本調査区は第２次調査東地区の北西に隣接する。東区では、幅約12ｍの東から西へ流れる自然流路を検出した。ここからは、灰釉陶器片や中世の土器片が出土している。その北側では幅１ｍの溝を検出した。この溝は西から東へ流れていることから御幣川からの用水路と推定される。

（２）西区

西区は、第２次調査西地区の北に隣接する。ここからは平安時代から鎌倉時代の遺構が検出された。

溝　ＳＤ154は幅１ｍで山茶椀の出土から鎌倉時代以降の溝と考えられる。西から東へ流れていることから、御幣川からの用水路と考えられる。

土坑　ＳＫ161は長さ155ccm、幅65cm、深さ35cmの隅丸長方形の土坑で、拳大から長径30cmほどの大き

図34　西区遺構平面図（1：500）

さの石が詰め込まれていた。その石材に混じって山茶椀の底部片が１点出土した。ＳＫ163は長さ210㎝、幅80㎝、深さ30㎝の隅丸長方形の土坑で、鎌倉から室町時代の土器片が出土している。ＳＫ164は長さ135㎝、幅90㎝、深さ40㎝の隅丸長方形の土坑で、鎌倉時代の山茶椀片が出土している。ＳＫ163・ＳＫ164ともにＳＫ161と同様の石材・土器の出土状況である。ＳＫ161・ＳＫ163・ＳＫ164は、石材の大きさが不揃いであることや、目地が通らないこと、破片となった土器が出土していることなどから中世墓とは考えにくい。したがって不要な石材をまとめて廃棄するための土坑と推測される。

なお、第２次調査西地区で検出した掘立柱建物ＳＢ108の東辺・北辺についてはその候補となる柱穴が明確にとらえられなかった。したがって東側隣接地の調査をもって評価したい。今年度の調査では新たな掘立柱建物が確認できなかったことから集落の北側への広がりは希薄といえるだろう。

３．遺物

西区からは縄文時代後期から晩期の土器が出土した。このうち、西区中央部から縄文後期後葉の注口土器片が出土している（写真105）。この注口土器の外面にはミガキを施している。さらに幅約２㎜の沈線および刺突で文様を描き、その内側に巻貝による疑似縄文を施す。体部屈曲付近には、瘤状の突起があり中央部を刺突によりくぼめる。文様構成などから、この注口土器は元住吉山Ⅰ式と考えられる[②]。

４．まとめ

第４次調査区では、建物や区画を示す溝が検出されなかったことから、この区域は集落の縁辺部にあたると考えられる。また、東区の自然流路をはさんで東西に集落があることが明らかになりつつある。両者の関係究明が今後の課題である。

［註］

① 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』2013

② 雄山閣『日本土器辞典』1996

写真105　注口土器（縄文時代後期後葉）

写真106　ＳＫ161（南から）

写真107　ＳＫ163（右）・ＳＫ164（左）（西から）

写真108　東区全景（北東から）

13　北山Ｃ遺跡（一次）

１．はじめに

北山Ｃ遺跡は、桑名市南部を流れる員弁川南岸、標高約60ｍの台地上に位置する。

平成24年度の第２次調査で古墳10基を検出し、平成25年度の第３次調査で古墳２基を検出している。今回の調査は、第３次調査区の東端に隣接する12,750㎡を対象に行った。

２．調査の概要と結果

調査にあたって、幅２ｍのトレンチを南北方向に４本、東西方向に２本設定した。トレンチの総延長は500ｍ、面積は1,000㎡である。

結果、トレンチ２～６で幅0.6～1.8ｍほどの溝31条を検出した。地表から遺構検出面までの深さは、15～46㎝である。また溝の形状や土質は、当遺跡の第２次調査や第３次調査で検出した古墳の周溝と極めて類似しているものが多い。さらに、溝からは土師器や須恵器、埴輪が出土した。

よって、今回の調査範囲の全域が古墳時代の墓域の可能性が高いと判断した。

写真109　Ｔ５（西から）

写真110　Ｔ３　Ｌ字状の溝（南西から）

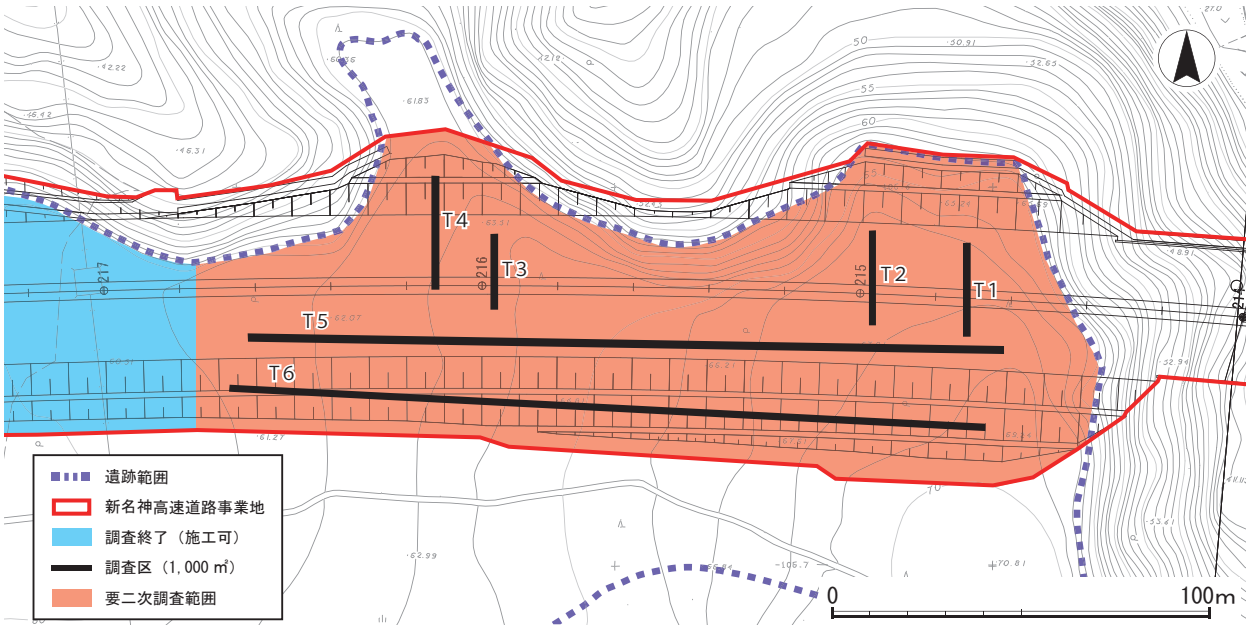


図35　調査区配置図（１：2,000）

14　野中遺跡（一次）

１．はじめに

調査対象地は、平成24年度に一次調査を実施した多奈閇神社（東員町大字中上所在）の南側緩斜面から続く標高55m前後の台地平坦部で、現況は雑木林となる。北山Ｃ遺跡・新野遺跡などの周辺遺跡の立地状況や、須恵器・土師器の散布などから古墳時代以降の遺跡が想定される。

２．調査の概要と結果

今回の調査対象地は、四日市市北山町地内に所在し、東西約200m×南北約40mの範囲（8,300㎡）内に、総延長250mに及ぶ幅２mの調査区６箇所（Ｔ１～Ｔ６）を設定した。基本的層序として、表土下厚さ0.1m～0.2mの黄灰色粘質土に続き、灰白色砂質土を確認し、基盤層として遺構検出を行った。

調査の結果、Ｔ1・Ｔ２では、現代の暗渠排水や畑等の耕作溝を部分的に検出したが、それ以外は木の根等の攪乱穴であり、遺物は確認されなかった。

以上のことから、後世の耕作等により改変を受け、遺構等は削平されたものと考えられる。

写真111　Ｔ１（西から）

写真112　Ｔ２（南東から）

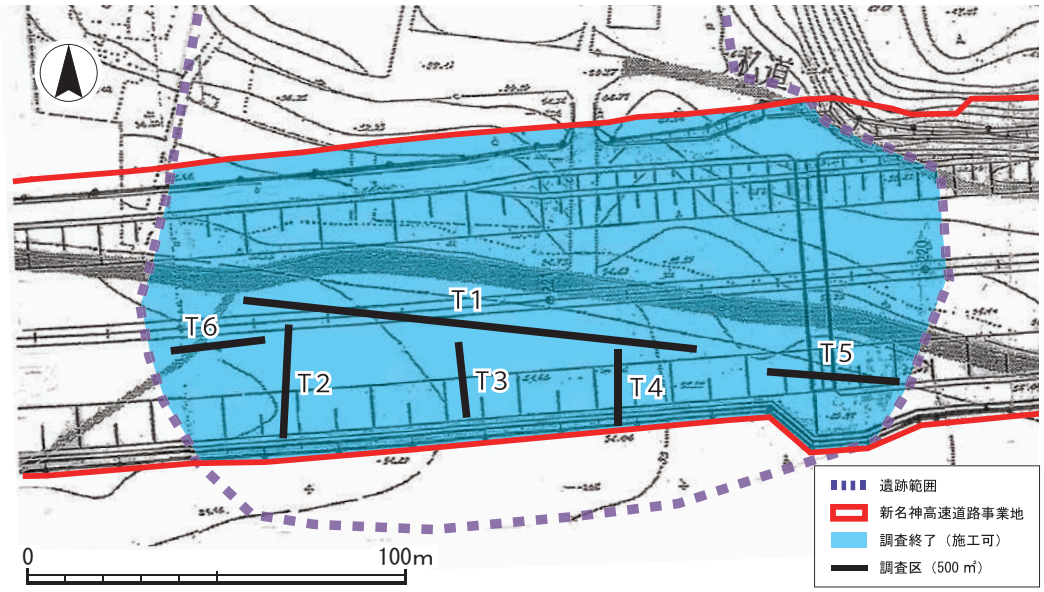


図36　調査区配置図（1:2,000）

15　小牧南遺跡（一次）

１．はじめに

当遺跡は四日市市小牧町に位置し、朝明川南岸の台地斜面に位置する集落遺跡である。

今回の調査区は遺跡全体の北東部にあり、現在は畑地および宅地となっている。西側の道路を隔てた区域では、昨年度の調査において古墳時代前期のものと見られる竪穴住居跡が複数見つかっているほか、一部で縄文土器も出土しており、当調査区においても集落跡の発見が期待された。

２．調査の概要と結果

今回は３箇所の調査区（計72㎡）を設定し調査を行った。遺構検出面は褐色土を主体とした地山面であり、遺構検出までの深度は20㎝～40㎝であった。この上面においてピット、溝類を検出したものの遺物をともなわず、遺構として認定することはできなかった。

またトレンチ２において土師器片が１点出土したものの、他には特筆すべき遺構、遺物は確認できなかった。

以上の結果から、小牧南遺跡の中でも当調査区の範囲については二次調査の対象外とした。

写真113　Ｔ２（南から）

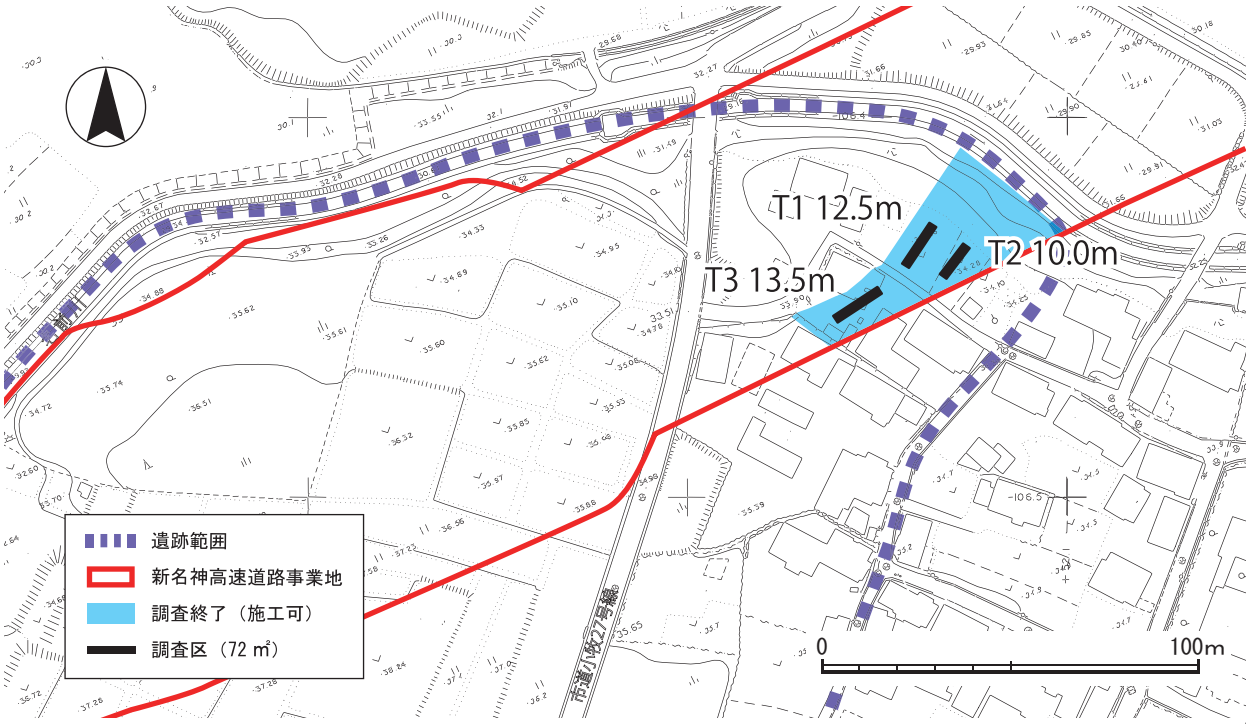


図37　調査区配置図（１：2,000）

16　中野平古遺跡（一次）

１．はじめに

中野平古遺跡は、朝明川中流域右岸の中位段丘上、現中野町一色集落の南側で、南に向かって緩やかに傾斜する丘陵端に位置する。周辺の畑地で石鏃や須恵器・山茶椀などが散布するため、弥生時代から鎌倉時代にかけての集落と考えられている。なお、当遺跡のすぐ南には名前川が東流しており、比高差は約12mある。

２．調査の概要と結果

調査区のほぼ中央に南北方向の開析谷が入るため、その谷の東側と西側にトレンチを11本設定して調査を行った。基本土層としては、概ね表土、褐色粘質土、淡褐色・黄灰色砂レキとなる。淡褐色・黄灰色砂レキを検出面として遺構の確認を試みたが、自然の落ち込みを数か所確認したにとどまり、遺物も近世陶器片数点が出土しただけである。遺跡の中心は、北側の現集落一帯に存在するものと思われる。

写真114　Ｔ２（北から）

写真115　Ｔ８（北西から）

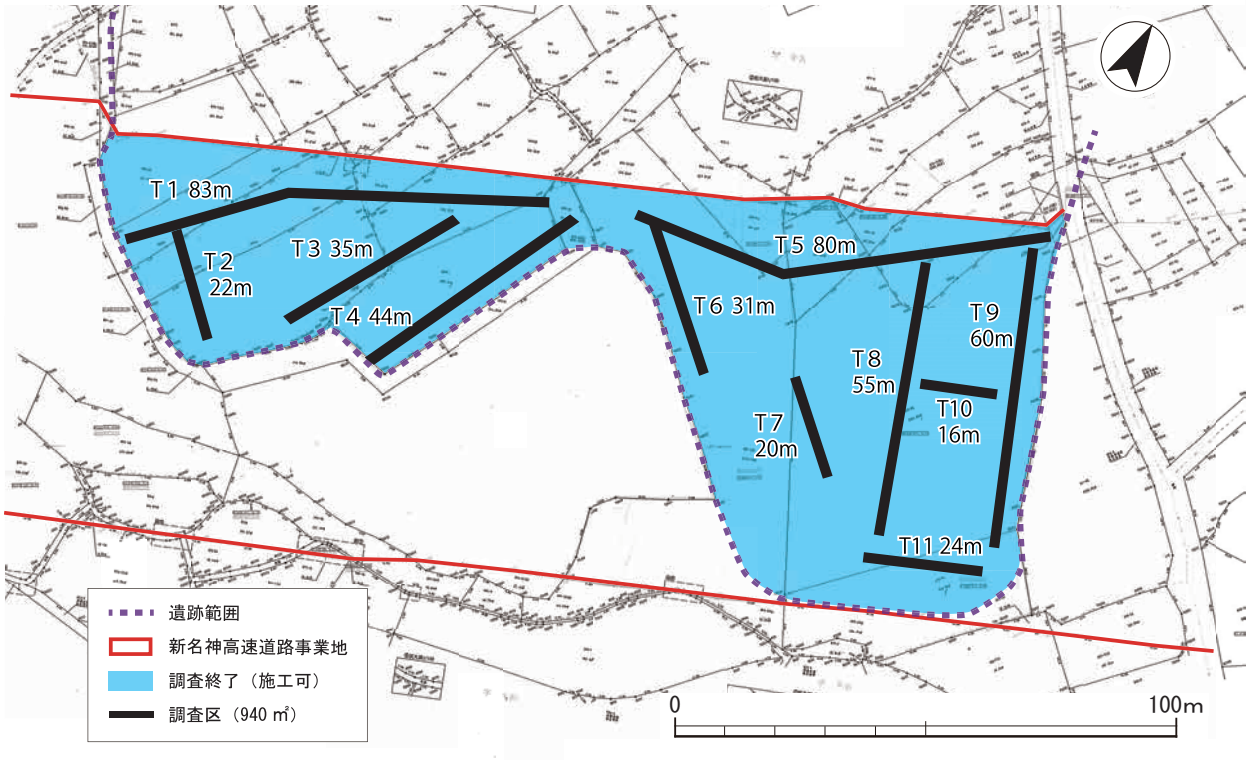


図38　調査区配置図（1：1,500）

17　鈴山遺跡（一次）

１．はじめに

鈴山遺跡は、竹谷川上流右岸、北側へ緩やかに傾斜する丘陵端に位置し、三重郡菰野町字音羽に所在する。平成19年２月に行われた分布調査において、石鏃・剥片が採取され、縄文時代の集落の可能性が考えられていた。なお、調査対象とした範囲内の東側に、南北方向に走るマンボが存在している。

２．調査の概要と結果

トレンチを15本設定して、遺構・遺物の有無についての調査を行った。マンボ東側に設定したＴ１・Ｔ２と北端に設定したＴ３では、遺構、遺物ともに確認できなかったが、それ以外のトレンチでは、縄文時代の遺構（土坑・焼土・竪穴住居？）と、遺物（縄文中期後葉の土器）を確認した。特に、Ｔ７の周辺から西側には明瞭な遺構が存在する可能性がある。今回の調査結果から、概ねマンボが存在する場所から西側の半分以上の範囲に縄文時代の集落が存在するものと思われる。

写真116　Ｔ６　東側（西から）

写真117　Ｔ７　土坑検出状況（北から）

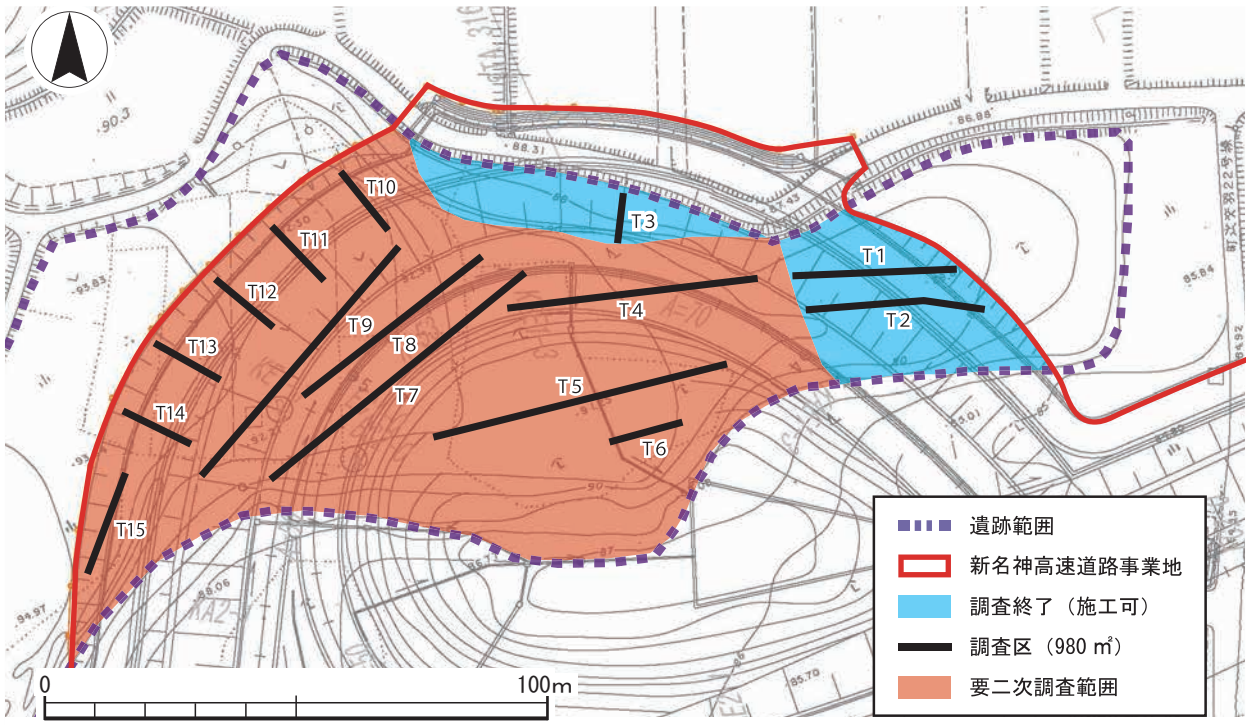


図39　調査区配置図（1：1,500）

18　椋ノ木遺跡（一次）

椋ノ木遺跡は、菰野町池底に所在し、海蔵川の右岸に立地する。慶安３年（1650年）の大洪水で、池底付近の海蔵川右岸がほとんど流失したことから、万治２年（1659年）に池底村は左岸の丘陵地に移転している。かつては池底の地名の由来となった池が点在していたが、昭和39年の圃場整備によりすべてなくなっている。

調査は幅２ｍの調査区を17箇所（930㎡）設定して実施した。検出面の標高は66～67ｍで、海蔵川に向かって緩く傾斜した地形である。

Ｔ16では、遺物（土師器・須恵器）を伴う遺構（竪穴住居？・ピット等）を検出した。遺構検出面は、にぶい黄橙色の砂質土で、深さは120～155㎝であった。Ｔ１・４・６・９では、土師器や山茶椀等の遺物を確認したが、遺構は検出されず、周辺からの流れ込みであると判断した。また、多くのトレンチで溝を検出したが、近代の排水路や畑等の耕作溝と考えられ、明確な遺構は確認されなかった。

以上の調査結果から、Ｔ16周辺に古代～中世の集落が存在すると判断し、二次調査の対象とした。

写真118　Ｔ16竪穴住居（北東から）

写真119　Ｔ16（東から）

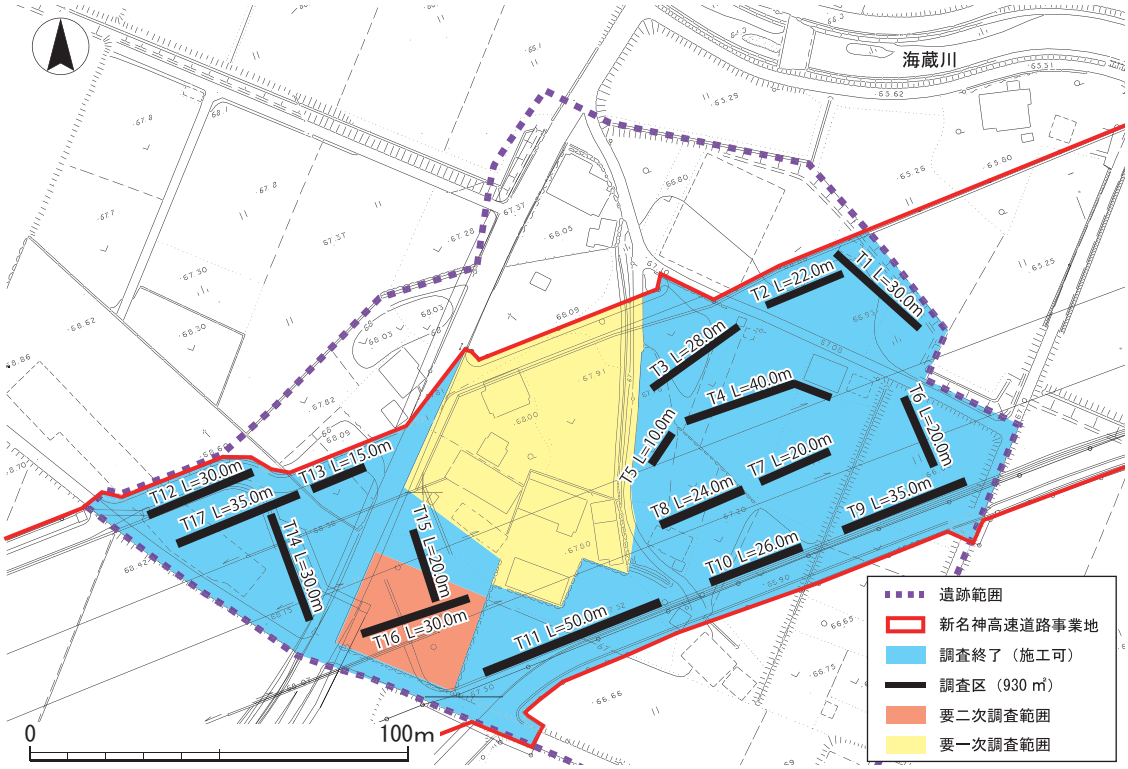


図40　調査区配置図（１：2,000）

19　大久保遺跡（一次）

１．はじめに

大久保遺跡は、三滝川中流左岸の中位段丘面上に位置し、現菰野町潤田集落と音羽集落の間に所在する。今回の調査区の南東側では昭和57年に都市計画道路（現、国道306号）の建設に伴って発掘調査が実施されており、鎌倉時代から室町時代にかけて遺構・遺物の他、縄文時代の遺物が確認されている①。また、調査区周辺には、中堀や中之堀、西堀という字名があり、城館に関する遺構の存在も想定された。

２．調査の概要と結果

トレンチを５本設定して遺構・遺物の有無についての調査を行った。基本土層として、表土下には、場所によっては旧表土が存在したが、その下は淡黄色粗砂・黄褐色粘質土などの互層が続き、安定した地盤は見受けられなかった。Ｔ１とＴ３で弥生土器・土師器・須恵器・山茶椀の細片が出土したが、遺構は確認されなかった。

［註］

① 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報13　昭和57年度』1983．3

写真120　Ｔ１全景（東から）

写真121　Ｔ２全景（西から）

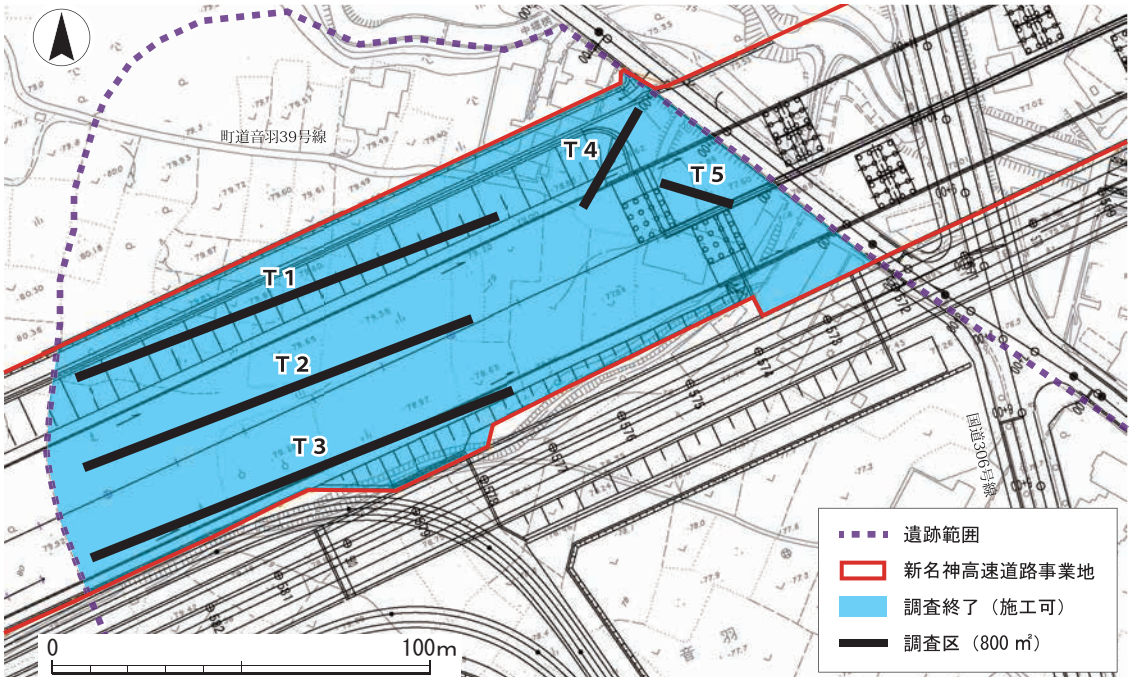


図41　調査区配置図（1：2,000）

報　告　書　抄　録

ふりがな	きんきじどうしゃどうなごやこうべせん(よっかいちじゃんくしょんからかめやまにしじゃんくしょん)けんせつじぎょうにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほう よん
書名	近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ
副書名	
巻次	
シリーズ名	近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報
シリーズ番号	Ⅳ
編著者名	野原宏司・服部芳人・松永公喜・浅野隆司・鈴木規之・宮﨑久美・水橋公恵・中村法道・勝山孝文・水谷豊・東谷洋平・矢田陽・髙松雅文・西脇智広・宮原佑治
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　　TEL 0596-52-1732
発行年月日	西暦2014（平成26）年８月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
いさかじょうあと 伊坂城跡	よっかいちしいさかちょう 四日市市伊坂町	24202	246	35°2′30″	136°37′24″	20131128～20140228	第５次調査 4,100	近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業
きたやましーいせき 北山Ｃ遺跡	くわなししち 桑名市志知	24205a	154	35°2′57″	136°36′8″	20130424～20130829	第３次調査 915	
						20130619～20130712	一次調査 1,000	
						20130821～20140114	第４次調査 4,030	
のなかいせき 野中遺跡	よっかいちしきたやまちょう 四日市市北山町	24202	571	35°2′56″	136°35′50″	20131118～20131122	一次調査 500	
きたやまえーいせき 北山Ａ遺跡	よっかいちしきたやまちょう 四日市市北山町	24202	239	35°2′55″	136°35′22″	20130510～20140224	第５次調査 4,920	
なかのやまいせき 中野山遺跡	よっかいちしきたやまちょう 四日市市北山町	24202	238	35°2′53″	136°35′14″	20130510～20140224	第10次調査 2,480	
						20130426～20140117	第11次調査 7,347	
						20130509～20140106	第12次調査 8,006	
ふでがさきこふんぐん 筆ヶ崎古墳群 ふでがさきにしいせき 筆ヶ崎西遺跡	よっかいちしこまきちょう 四日市市小牧町	24202	583	35°3′2″	136°35′3″	20130821～20140217	第６次調査 5,319	
きたやまじょうあと 北山城跡	よっかいちしきたやまちょう 四日市市北山町	24202	237	35°2′51″	136°34′50″	20130509～20131120	第３次調査 6,438	
こまきみなみいせき 小牧南遺跡	よっかいちしこまきちょう 四日市市小牧町	24202	568	35°2′32″	136°33′59″	20130528～20140206	第２次調査 7,371	
						20131105～20131106	一次調査 72	
なかのひらこいせき 中野平古遺跡	よっかいちしなかのちょう 四日市市中野町	24202	504	35°2′31″	136°33′28″	20130527～20130725	一次調査 940	
むくのきいせき 椋ノ木遺跡	こものちょういけぞこ 菰野町池底	24341	135	35°1′51″	136°31′7″	20131108～20140106	一次調査 930	
おおくぼいせき 大久保遺跡	こものちょううるだ 菰野町潤田	24341	85	35°1′34″	136°30′20″	20131225～20140225	一次調査 800	
すずやまいせき 鈴山遺跡	こものちょうおとわ 菰野町音羽	24341	136	35°1′28″	136°29′51″	20130730～20130930	一次調査 980	
かまがいといせき 釜垣内遺跡	すずかしおぎすちょう 鈴鹿市小岐須町	24207	1032	34°56′58″	136°27′8″	20130527～20130913	第４次調査 3,200	

所収遺跡名	種　　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伊坂城跡	城館跡	中世	ピット群・堀切状遺構	土師器（皿・羽釜・茶釜） 陶器（天目茶椀・擂鉢）	
北山Ｃ遺跡	散布地	古墳・弥生	古墳の周溝・竪穴住居・掘立柱建物・溝・土坑・ピット・土壙墓	須恵器・土師器・埴輪・鉄製品	
野中遺跡	散布地	古墳以降	なし	なし	
北山Ａ遺跡	集落跡	弥生・古墳・飛鳥・奈良	竪穴住居・掘立柱建物・土坑・ピット	土師器・須恵器・石器	
中野山遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・飛鳥・奈良	縄文早期：煙道付炉穴・集石炉　弥生時代：竪穴住居・土坑　飛鳥から奈良時代：竪穴住居・掘立柱建物・土坑	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器	
			縄文早期：煙道付炉穴・集石炉　縄文晩期：埋甕　飛鳥から奈良時代：竪穴住居・掘立柱建物・土坑	縄文土器・土師器・須恵器・石器	
			竪穴住居・掘立柱建物・土坑	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器	
筆ヶ崎古墳群 筆ヶ崎西遺跡	古墳・集落跡	飛鳥・奈良	飛鳥から奈良時代：竪穴住居・掘立柱建物・土坑・ピット	縄文時代：尖頭器　飛鳥から奈良時代：須恵器・土師器	
北山城跡	集落跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世	竪穴住居・古墳・溝・土坑・ピット	弥生土器・土師器・須恵器	
小牧南遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・飛鳥・中世	縄文中期：竪穴住居・掘立柱建物・埋設土器・集石炉・土坑　弥生終末期から古墳前期：竪穴住居・掘立柱建物・土坑　古墳後期から飛鳥：竪穴住居　中世：土坑	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・山茶椀・石器・垂飾・鉄鏃	
中野平古遺跡	散布地	弥生から鎌倉	なし	近世陶器	
椋ノ木遺跡	散布地	古代・中世	竪穴住居・土坑・溝・ピット	土師器・須恵器・山茶椀	
大久保遺跡	集落跡	縄文・中世	なし	弥生土器・土師器・須恵器・山茶椀	
鈴山遺跡	散布地	縄文	土坑・焼土・竪穴住居	縄文土器	
釜垣内遺跡	集落跡	縄文・中世	土坑・溝	縄文土器・土師器・黒色土器・山茶椀	

要　約	【伊坂城跡】主郭北側の丘陵地を対象として調査を行ったが、明確な遺構はほとんど確認できなかった。但し、西区の馬背状地形は、断割り調査の結果、時期不明であるが、旧表土面から１メートル以上盛土をしている事が判明した。また、堀切状地形は、調査区南側にある帯曲輪に沿う形で存在しているため、城郭に伴う構造物の可能性も否定できない。
	【北山Ｃ遺跡】（第３次）方墳１基と円墳１基、２基の古墳を確認した。墳丘は削平され、周溝を残すのみで、７世紀の遺物が出土した。また、飛鳥・奈良時代の竪穴住居１棟と、２棟の掘立柱建物を確認した。 （第４次）13基の方墳を確認した。墳丘は削平され、大半の古墳は周溝を残すのみであったが、周溝埋土から５世紀の須恵器と土師器が出土した。このうち１基には木棺直葬の主体部が残存し、木棺痕跡の脇から刀子が出土した。 　また、古墳時代と飛鳥時代の土壙墓が１基ずつ確認され、古墳時代の土壙墓からは鉄製品が出土した。
	【野中遺跡】トレンチを６本設定して遺構・遺物の有無についての調査を行った。Ｔ１・Ｔ２では、現代の暗渠排水や畑等の耕作溝の他は攪乱穴等を確認したにとどまる。遺構・遺物は確認されなかった。
	【北山Ａ遺跡】飛鳥時代から奈良時代にかけての竪穴住居20棟、掘立柱建物７棟が確認された。昨年度までに行われた第２次・第３次調査の結果と合わせると、北山Ａ遺跡に営まれた飛鳥時代から奈良時代にかけての集落には、掘立柱建物が集中して建てられた地区があることが明らかになった。
	【中野山遺跡】（第10次）縄文時代の煙道付炉穴53基、集石炉６基、弥生時代の竪穴住居１棟、土坑１基、飛鳥から奈良時代の竪穴住居７棟・掘立柱建物３棟、大型土坑10基、小土坑１基などを確認した。 （第11次）丘陵上とその北斜面および谷部分の調査を行った。縄文時代早期の煙道付炉穴63基、集石炉７基、晩期の埋甕２基、飛鳥から奈良時代の竪穴住居５棟、掘立柱建物18棟などを確認した。遺構はすべて丘陵上の調査区で検出され、北斜面および谷部分からは小規模な自然流路が複数検出された。 （第12次）縄文時代早期の集石土坑１基、中期末の竪穴住居２棟、土坑14基、弥生時代中期の土坑１基、後期の竪穴住居８棟、中期から後期と考えられる掘立柱建物１棟、古墳時代後期の竪穴住居１棟、飛鳥から奈良時代の竪穴住居29棟・掘立柱建物23棟などを確認した。
	【筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡】今回の調査でも、飛鳥から奈良時代の遺構と遺物を確認した。調査区の北側では、耕作に伴うものかそれに関連すると考えられる溝を36条検出した。溝の時期は近代以降と考えられる。この溝で削られていたものの、竪穴住居６棟と掘立柱建物１棟を検出した。調査区中央部から南側では、竪穴住居22棟と掘立柱建物11棟を検出した。したがって、今回の調査では竪穴住居28棟、掘立柱建物12棟を確認した。掘立柱建物は側柱建物が６棟、総柱建物が６棟である。
	【北山城跡】弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居19棟が確認され、居住域が平坦地のみではなく斜面部にも広がっていることが明らかとなった。居林１号墳の調査は、墳丘の盛土は確認できたものの南端の一部であったため主体部は確認されず、周溝も斜面のため明確ではない。また、周辺ではＬ字状に曲がる溝が３条確認されており、古墳周溝の可能性が考えられる。北山城では、土坑２基、ピットが確認されたが、建物に伴うものかは明らかではない。中世と考えられる遺物は調査区全体からほとんど出土しておらず、城に伴うと考えられるような遺構は確認されなかった。
	【小牧南遺跡】縄文時代中期の竪穴住居５棟、掘立柱建物５棟、埋設土器４基、集石炉１基、弥生時代終末期から古墳時代前期の竪穴住居47棟、掘立柱建物９棟、古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居７棟、中世の土坑１基などを確認した。なお、縄文時代中期の掘立柱建物群は、県内最古であり、垂飾が埋設土器の内側より出土した例は、県内初めてである。
	【中野平古遺跡】トレンチを11本を設定して調査を行った。自然の落ち込みを数か所確認したにとどまり、遺物も近世陶器片数点が出土しただけである。
	【椋ノ木遺跡】調査坑を17本設定して遺構・遺物の有無についての調査を行った。Ｔ16では、遺物（土師器・須恵器）を伴う遺構（竪穴住居？・ピット等）を検出し、Ｔ１・Ｔ４・Ｔ６・Ｔ９では、土師器や山茶椀等の遺物を確認したが、遺構は検出されず、周辺からの流れ込みであると判断した。
	【大久保遺跡】調査坑を５本設定して遺構・遺物の有無についての調査を行った。Ｔ１・Ｔ３で弥生土器・土師器・須恵器・山茶椀の細片が出土したが、いずれの調査抗からも遺構は確認されなかった。
	【鈴山遺跡】調査坑を15本設定して遺構・遺物の有無についての調査を行った。Ｔ１・Ｔ２・Ｔ３以外で縄文時代の遺構（土坑・焼土・竪穴住居？）と遺物（縄文土器）を確認した。
	【釜垣内遺跡】調査区を東西２つの地区に分けて行った。東区では、中世から近世の水路の跡と、平安から鎌倉時代の自然流路の跡を確認した。西区では、数多くの石を詰め込んだ土坑を３基検出した。この土坑からは山茶椀が石とともに出土しているので鎌倉時代のものと推定される。西区では、縄文時代後・晩期の縄文土器の破片が出土している。特に縄文時代後期の注口土器は装飾的な傾向が顕著である。この他に、平安時代の黒色土器、鎌倉時代の山茶椀が出土している。

近畿自動車道名古屋神戸線
（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ

2014（平成26）年８月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　伊 藤 印 刷 株 式 会 社